鹿児島県史料

旧記雑録拾遺

家わけ十

解　題

本書は『鹿児島県史料　旧記雑録拾遺　家わけ十』として、宮崎県高岡町及び指宿市考古博物館時遊館所在の「指宿文書」、鹿児島県歴史資料センター黎明館所蔵の「笠間文書」、串木野市所在の「冠嶽頂峯院文書」、加治木町所在で黎明館寄託の「北村文書」、隼人町所在で同町歴史民俗資料館及び黎明館寄託の「桑幡家文書」、東京大学史料編纂所所蔵の「国分文書」、同じく同所所蔵の「日向佐土原島津文書」と黎明館所蔵の「垂水島津家文書」（両者共に実体は「新城島津家文書」）、川内市所在の「新田神社文書」、東京大学史料編纂所所蔵島津家文書中の「野久尾家文書」、鹿児島市所在個人旧蔵の「日置島津家文書」、指宿市考古博物館時遊館所蔵の「比志島文書」、黎明館所蔵の「本田家記文書及系譜」、東京大学史料編纂所所蔵島津家文書中の「本田家文書」及び同所所蔵影写本「（日向高岡）本田家文書」、鹿児島県立図書館所蔵の「山田家文書」、東京大学史料編纂所所蔵島津家文書中の「山田家文書」、磯尚古集成館所蔵の「山田家文書」、隼人町所在の「留守文書」を収載する。以下その一々について説明しよう。

指宿文書

宮崎県高岡町有村昭比登氏現蔵文書。指宿氏は薩摩平氏一族で代々薩摩国指宿郡郡司。南北朝時代、懐良親王を迎え、南朝方武将として活躍、近世には日向国高岡郷の曖役等を勤めた。鎌倉時代以後の文書を相伝、指宿氏の嫡流とされる。『旧記雑録』には「正文在高岡衆指宿左近兵衛忠眞」とあるものが、文暦二年八月二十八日の関東下知状をはじめとして六点ある。また「高岡士指宿十郎右衛門蔵本」とあるものが、前者との重複分二点を含め五点ある。十郎右衛門は左近兵衛忠真と親子関係にある者と思われる。そして慶長二年二月二十八日の島津

義弘掟書には「島津氏文書」として「右於隈城指宿左近兵衛所江卅日程御逗留被遊、此御条書被仰出、高麗へ御渡海被遊候、長井十郎左衛門右筆と申候云々」の注記がある。これにより高岡指宿家（忠廣）は慶長二年の時点で隈城在住士であったことを知る。また指宿家に系図三巻があり、嫡流系図と思われるものが二巻で、その内容に若干相違点があり、この中やや簡略な方が昭和五十七年同家から指宿市に寄贈され、現在同市考古博物館時遊館に保管されている（共に採録）。もう一巻は現在所在不明であるが、往時調査の際部分撮影したものでその中から所載文書（重複分を除く）のみを採録した。なお『旧記雑録』所収の応永十六年二月十八日の近江守忠合譲状も右系図に収載されていたものと考えられる。この系図は嫡流の朝忠の子光忠を始祖とする指宿清左衛門流系図で、『鹿児島県史料　旧記雑録拾遺　伊地知季安著作史料集三』所収の「諸家系図文書一」の平姓指宿氏系図がこれに当ろう。清左衛門家は『旧記雑録』慶長五年十月十日の島津義弘感状（忠政宛）を伝え、関ヶ原戦に殊功をあげ恩賞を与えられており、その子内蔵介忠易は寛永六年、福山より地頭山田昌厳（有栄）に付属、出水に移住した一流である。その子清左衛門尉忠能は山田昌厳の子有隆に従って恒吉に移っている。また高岡指宿家に現存しないが『旧記雑録』には「正文在高岡衆指宿左近兵衛忠眞」として（寛永四年）八月二十七日の樺山久高より指宿拾郎右衛門尉（忠利）宛の証状があり、朝鮮出兵時の武功を立証している。また同家には「指宿氏勲功書上」として曾祖父の忠家から忠常・忠廣・忠利と四代の武功を書上げた記録が残されている。ここに左近兵衛尉とあり、十郎右衛門尉とあるのは忠廣・忠利のことであろう。忠利は関ヶ原戦後加藤氏らの来攻に備えて出水米之津まで出向、番役をつとめている。その後比志島国貞の指揮下に高岡に移住、以後高岡郷士として活躍したというわけである。（『宮崎県史　史料編　中世1』所収「指宿文書」、『指宿市誌』所収、江平望氏「中世揖宿郡・指宿氏関係史料」参照）

笠間文書

日置島津家々臣笠間家相伝文書。昭和六十一年鹿児島県歴史資料センター黎明館で古書肆より購入。内容は島津久慶の重臣であった笠間主計助良秀の書状案文をはじめ同人宛の書状等一一点。同人は島津久慶の東郷領主時代、弓組を率いて島原の乱にも参加、馬術にも長じていたらしい。久慶の他、島津久通・川上久慶・桂忠増等、当時の有力者からの書状もあり、その地位の重さも推測できよう。（『鹿児島大学人文学科論集』二五号所収、拙稿「日置島津家文書と島津久慶㈢―「島津久慶自記」その他史料の紹介を中心に―」参照）

冠嶽頂峯院文書

薩摩国山岳信仰の霊山冠嶽関係の中世文書写他。現在冠嶽神社宮司田代宣照氏所蔵のもの。串木野市指定文化財。「冠嶽山鎮国寺頂峯院文書並縁起写」並びに「冠嶽山鎮国寺頂峯院来由記」が主体。収録する中世文書は二六点で一時期軸装されていたと思われる。「由緒調書」によれば寛政二年春藩主斉宣が閲覧したとあり、その際表具改めをしたとある。原本の所在は明らかでない。現状の冊子写本は各文書に貞享五年に至る何年との注記があることから同年に文書改めがあったことが知られ、記録所等による写本の作成も行われたことが推測される。恐らくそれ以後の再写本であろう。「冠嶽山之次第」には頂峯院開山以来の経緯、日置郡中原坊との熊野山・彦山での先達職をめぐる争い等興味深い内容を含んでいる。併せて頂峯院文書ではないが同家に伝来する元治元年五月の「串木野神社佛閣調帳」、寛政十年十月の「古城并古戦場糺帳」も掲載した。（『串木野郷土史』、『鹿児島中世史研究会報』36所収、拙稿「串木野頂峯院文書に関する一、二の考察」参照）

北村文書

加治木町北村義視氏所蔵、鹿児島県歴史資料センター黎明館寄託文書。中世蒲生院北村を本貫地とする蒲生氏

一族、国人領主北村氏相伝文書。はじめ蒲生氏配下、近世初頭島津義弘に従って朝鮮出兵時には京都留守番を命じられ、のち帖佐に移り、元和年間、蔵入地代官を勤めた。地方(じかた)支配関係の文書、坪付等があり、何れも『旧記雑録』未収文書で重要史料であるが腐損文書も少なくない。系図によれば近世初代安芸守の子六右衛門（範光）は比志島氏（美濃守国守）に付属、転じて加治木住士になったとある。成巻の「北村系図」一巻は後代作成のものであるが、蒲生氏初祖舜清から系統している。

桑幡家文書

桑幡家は沢・留守・最勝寺家と共に大隅正八幡宮四社家の一、息長姓、長門本『平家物語』に登場する平清盛の信任を得ていたという執印清道の流。現存文書は「桑幡系図」の他、「大隅国図田帳」（現在黎明館寄託）、「古記」等近世の書写冊子本が多い。「古記」の中に暦応二年十一月の正八幡宮講衆・殿上等訴状等『旧記雑録』未載の興味深い文書が収録されている。四社家の中、鹿児島神宮社殿にもっとも近接した位置に桑幡家の屋敷があり、近年発掘調査され報告書も刊行されている（隼人町教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告書『桑幡氏館跡―第三次調査』）。他に鹿児島神宮『鹿児島神宮文化財調査報告書』所収、日限正守氏執筆「桑幡家関係記録」の解説がある。なお拙稿「大隅国正八幡宮領吉田院小考」（『鹿児島大学法文学部文学科論集』六号）、「大隅国正八幡宮社家小考」（『続荘園制と武家社会』所収）、「大隅国建久図田帳小考」（『日本歴史』一四二）等参照。

国分文書

東京大学史料編纂所所蔵国分文書は『鹿児島県史料　旧記雑録拾遺　家わけ六』で紹介した「国分文書」（松元町入佐、国分啓子氏所蔵文書で黎明館寄託文書）と本来一体であった文書（東京都国分徳子氏寄贈）で、先に山口隼正氏の「中世薩摩国分二寺の伽藍と嫡流国分氏」（『日本中世史論攷』所収）で発表され、ついで前述の

「国分文書」と併せて『新修国分寺の研究』第六巻「付録2　薩摩国分寺文書」において同氏の全文飜刻及び詳細な解説が施されているが、とくに「薩摩国天満宮・国分二寺損色注文」と「惟宗姓国分氏正統系図」は『旧記雑録』未採収で、県史料として不可欠の文書であるので、このたびあらためてとりあげ、付属文書も含めて載録することにした。なお国分文書を用いた研究としては、その後江平望氏の「中世知覧院関係史料補遺　付、鎌倉末期薩摩国分寺の相論について」（『知覧文化』四一、『改訂島津忠久とその周辺』にも所収）、渡邊正男氏の「正和の神領興行法と入門」（『鎌倉遺文研究』13号所収）を得た。今後の研究の進展が期待される。

新城島津家文書（日向佐土原島津文書）

東京大学史料編纂所所蔵の「日向佐土原島津文書」は八巻あるが、その内容は一巻から四巻までが先年国の重要文化財に指定された、現在国立歴史民俗博物館所蔵「越前島津家文書」の「越前島津系図」三巻を除く巻子本六巻中、巻六（巻装題簽「証判物並起請文」）・巻五（「御綸旨口宣」）・巻三（「赤松入道円心一見状」）・巻四（「諸一見状」）と一致し（「諸御文書」・「尊氏公・義詮公・義政公御判物御感状」の一・二巻は除く）、かなり早い時期の精密な模写本とみられる。そして五巻から八巻までが今回刊行分で、次掲の「垂水島津家文書」と共に同種一括の新城島津家相伝文書とみられるのである。「越前島津家文書」もその相伝の歴史は播磨の島津家（鎌倉時代越前国守護代から播磨国下揖保荘地頭となり移住）から大隅鹿屋の新城島津家に江戸前期（寛永初年とも）もたらされたものであり、元文二年本宗島津家による越前島津家再興に際して、新城島津家から本家に当る垂水島津家を介して本宗家に引渡された経緯があり、また佐土原島津家は近世初期垂水島津家から別立した親縁関係にあることから何らかの事情でその模写本と新城島津家文書の原本の一部が合体して佐土原島津文書と命名され、それが東京大学史料編纂所の所蔵になったということであろう。

新城島津家は垂水島津家の庶家であるが、島津義久二女で垂水島津家の彰久夫人となった女性（久信母、新城様とよばれた）が実質上の始祖とされ、その養女となった本宗家の家久の女と結婚した孫の久章（久信の子）が継承、その肅清後は遺子忠清がついだものの、その跡には本宗家から養子が入って義久の血統は絶える。ただ垂水・新城両島津家とも義久の後裔としての自負は強く、その家格、経済的特権の主張は幕末にまで及んでいた。「佐土原島津文書」の五巻から八巻までの内容も垂水・新城島津家に関わるもののみであり、特に巻八の収録文書五通は新城島津家当主の将軍家御目見目録であることからみて、全巻新城島津家旧蔵文書と断定してよいであろう。新城島津家は明治年代には末川家を名乗り、子孫は近年まで都城に居住していたが、先年所蔵文書を一括黎明館に寄託された。都城市教育委員会刊行の『都城市文化財調査報告書二一集　末川家古文書』でその概要を把握できるが、家譜等未刊分も残されている。その中に一紙文書として所蔵の巻装文書の巻数書上目録があり、本文書の各巻に該当するものがあるので記してみよう。すなわち巻五には「相模守・又四郎・大和守江従御一門家老中諸人之御書中　但大巻」、巻六には「新城袋へ御一門御家老并従諸人之御書中　大巻」、巻七には「自家代々筆跡　但小巻」、巻八には「公方様献上目録　但小巻」の如くで、恐らく巻装外題として名付けられたものであろう。なお各巻の巻末には発出者名の目録と文書点数が付されているが、その筆跡と前述末川家譜の筆跡の相似性からも本文書相伝の由来が推測できよう。（拙稿「新城島津家と越前島津家―末川家文書の紹介―」『鹿児島中世史研究会報』31、「新城島津家々譜所収文書」『同』32、「越前島津家文書の伝来について」『同』39、「島津久章一件史料並びに覚書」『旧記雑録月報』8参照）

新城島津家文書（垂水島津家文書）

前項の「日向佐土原島津文書」と同種一括の文書一巻。表装の文様が一致すること、前述末川家文書中の巻数

書上目録に「新城袋江上様并御一門御家老中より被遣候御書中　但大巻」とあるのに本文書の巻装題簽の字句が合致することで判明。先年古書肆目録に「垂水島津家文書」と所載されていたものを購入、現在は鹿児島県歴史資料センター黎明館の所蔵となっている。編集仕立、巻末目録の筆跡の一致からも、前項同様新城島津家旧蔵文書として間違いない。ただこの一巻が「日向佐土原島津文書」と離れて巷間に流出していた経緯は定かでない。五三点の文書の内訳は、中納言家久書状七点をはじめ光久書状六点、彰久書状一三点等新城宛の興味深い内容のものが多い。

以上両項を通して仮名書の難解な文書も少なくないが、たとえば舅以久に対する嫁新城とその子久信（信久）の微妙な関係、久信の後嗣久敏の病身故の焦燥感、経済的に優位に立つ久信に対する家久のコンプレックス、逆に久信の家久に懐く複雑な心境、そして久敏死後その弟久章の漠然とした怨念等々、これら往復文書の数々の中から随所に読みとれよう。近世初期の島津家の家督相続をめぐる争い、本宗家の権力掌握過程を示す史料として貴重である。また『旧記雑録』未収録の文書であることも今後の研究に期待がよせられる所以である。（『鹿児島県歴史資料センター黎明館所蔵品目録(XVI)文書(5)』所収「垂水島津家文書」参照）

新田神社文書

新田神社文書はこれまでに三度刊行されている。最初は昭和十八年新田神社から、二度目は鹿児島県立図書館から『鹿児島県史料集』第三集として、三度目は昭和四十七年川内郷土誌編さん委員会から『川内市史料集』第一輯として刊行された。しかしそれぞれに編纂方式が異なり、また誤植等もあり、何れも発行部数が少なく希覯本となっており、その間昭和五十八年、県文化財指定に続いての国の重要文化財指定に伴い、一部成巻文書の配列順を変更すること等もあったので、所蔵者の新田神社並びに寄託先の川内市歴史資料館の了承を得てあらため

て県史料の中の一つとして刊行することとした。

構成は執印文書七巻と権執印文書一巻の社家相伝文書、それに新田宮縁起と制札一点とからなっている。もちろん本来の新田神社文書は他にも多数あったとみられるが、それらは散佚或は焼失して現存するものは必ずしも多くはない。川内市史料集では『新田神社文書㈡』として他に昭和四十八年『旧記雑録』所収文書その他関係史料の文書を収録している。さて執印文書のはじめの成巻の年時は明らかではないが、東京大学史料編纂所の影写本の書入れ、文書毎貼付の符箋の記載等からみて、最初の刊行時以前それ程遡及しない頃のものと考えられ、国の重要文化財指定の際、調査担当者が内容、形状を検討の上、文書の成巻順を一部変更したのは評価してよいと考える。今回の刊行も変更後の成巻順によっている。ただ従前の文書配列との相違については既刊史料集との関連でその都度注記を施しておいた。従来は執印道教（重兼）、酒匂久景等の裏花押の確認が不十分のまま文書が配列されていたのを見過ごしていたことになろう。その点を改めて、従来の巻六の第二文書群を巻三の方に移動分載し、末尾の暦応四年の文書二点を巻五に移しており、巻三の第一文書を巻五の第一文書としている。これらは各文書の筆跡、形体、内容等からみて本来の姿に復原を試みたものであり、適切な処理であったと思われる。成巻順は影写本のスタイルの方がより編年順に近く、それを綸旨を巻首に掲出する等の操作をすることによってやや変則的な形で成巻されたといってよい。成巻の時期は影写本作成時より後、すなわち明治三十七年以降のことになろう。各文書に付されていた符箋は明治三十三年時のものであったが、影写本作成時それらは不要として写されなかったのであろう。

新田神社文書に関する考察は少なくない。『鹿児島県史』、『川内市史』の記述の他、拙稿「新田宮執印道教具書案その他」（『日本歴史』三一〇）、田中健二氏「宇佐弥勒院薩摩国新田八幡宮の領家について」（『日本中世史

論攷』所収)、日隈正守氏「新田宮・五大院の所領支配機構」(『九州史学』八六)等。また近年日隈氏による集中的な研究発表がある(『千台』27～32)(本巻月報参照)。また文書中連歌懐紙については大内初夫氏の論考「薩摩新田神社所蔵の鎌倉末期連歌懐紙」(『語文研究』一九五)がある。今回の刊行にあたり、以上の論考を参照させていただいた。

野久尾家文書

野久尾家文書は東京大学史料編纂所所蔵の島津家文書中、長持三十六番箱に収納されており、島津氏支族和泉惣領家の一流系図二点と口宣案をはじめとする文書一〇点、それに同系図文書目録とそれらを日向国吉田村嘘・真幸院地頭を経由して藩記録所に提出した経緯を記す文書が付属している。同文書は正徳三年、久・忠等の文字の使用を制限する藩の法令が出された後、気づかず打過ぎていた野久尾家当主六右衛門が寺入り釈明した際の関係文書であり、記録所に提出、のち島津家に納められたものと思われ、その法令の施行を物語る史料としては興味深いが、文書自体の形式、内容、筆跡等には検討を要する点が少なくない。また二点の系図によれば、同家は和泉島津家始祖忠氏の子忠頼(直)、その子氏儀の子久親の弟久儀に出る。久親の子孫は子の直久・忠次兄弟が応永二十四年の川辺合戦で討死して絶えるが、久儀の子孫は子の久氏・久頼があり、「文明記」等にその名はあらわれる。弟の久頼は「号野久尾、又七郎、刑部少輔、法名道珍、野久尾草道地頭也」とあり、野久尾氏の初代と思われる。文書では応永年間の子久国への譲状があり、久国の子義久は文明十七年櫛間合戦で討死と系図に記されている。以後四代を経て久吉代に加久藤から真幸院吉田に移住したとある。文禄年間頃のこととする。一般に和泉島津家は断絶したとされているが、『鹿児島県史料　旧記雑録拾遺　諸氏系譜二』島津氏世録支流系図には「和泉島津系図」があり、さきに『宮崎県史料　史料編　中世1』で紹介された「押領司文書」と共に、本文書の如

くその信憑性に問題はあるにしても、同じく同家の遺族を称する家の文書の存在はあらためてその意義について考察してみる要があろう。

日置島津家文書

前に『鹿児島県史料　旧記雑録拾遺　家わけ九』で日置島津家関係文書をまとめて収録したが、その際同解題でふれ紹介した現在所在未確認の個人旧蔵文書としてとくに掲載した寛永六年十二月二十八日の島津家久起請文を含む二二点の文書一巻（ほとんど『旧記雑録』載録）を、今回あらためて採録しておく。島津久慶宛の島津家久・光久書状が大半で元和、寛永期のものが中心、何れも家久と久慶のごく緊密な関係を示す内容の文書である。

なおまた今回掲載した日置島津家文書と同様に現在所在未確認の日置島津家文書一巻（六点）があり、寛永十年から十三年までの家久から久慶宛書状三点、島津久元外一名宛書状一点、伊勢貞昌より久慶宛書状一点、鹿児島家老宛書状一点で何れも久慶関係の文書であるが、二点が『旧記雑録』に載録されている。『鹿児島県史料旧記雑録後編五』の六三九・九三七号文書であるが、前者が著名な（寛永十年）八月二十四日の義母堅野永俊尼の切支丹始末に関する文書で、『旧記雑録』の方に二、三の誤写、誤読のあることが明らかになっているので、この機会をかりて一部訂正しておきたい。それは、四―五行目に「大持之たての半会、同新八郎内」とあるが、これは「大将之たての津の守（喜入摂津守忠政）、同新八郎内」とよむべきで、このように『旧記雑録』自体、採録の際の写違いは間々あることで、原本の存在意義の大きさをあらためて認識させられた例証である。（『鹿児島中世史研究会報』26「喜入外園氏所蔵文書」、『同』44「島津久慶宛島津家久文書二点について」参照）

比志島文書（指宿市考古博物館）

本書に収める比志島文書は次項のものとともに比志島国貞家の文書である。比志島氏嫡流九代義重二男義信を

始祖とする庶流「比志島源左衛門系図」（『鹿児島県史料　旧記雑録拾遺　諸氏系譜三』所収系図）によれば、子孫に近世初頭、島津義久・家久に仕え家老職を勤め殊功のあった国貞の名をみる。ただ国貞の子国隆は専権の振舞ありとして種子島配流後賜死の処分をうけているので、末裔の家運必ずしも恵まれていたとはいえまい。もちろん国貞の後嗣には家久の命により嫡家範員が鎌田政貞の次子国治を女婿として相続させ、国隆の実子国安も赦免後国治の弟として別家を立てたから文書等も相伝されたと思われるが、その後嫡流の「比志島文書」の如くにはまとまった形ではうけつがれなかったようである。近年指宿市居住の個人所蔵者より指宿市考古博物館時遊館に寄贈されたのはその一部と思われ、（文禄元年）九月二十九日の島津義弘が朝鮮陣中より国貞に宛てた戦況報告と弟歳久生害の感懐と鉄砲調達の要望等を記した興味深い内容の書状、並びに寛永五年正月、国隆が山の寺（川辺宝福寺）への寺領直前に姻戚の吉利忠張へ宛てた自己の冤罪を訴えた書状等八点である。このうち義弘書状は『旧記雑録』に載録のものの原本であり、その誤写箇所を訂正し得る。（『鹿児島県史料　旧記雑録後編二』の九七〇・一三八六号は「雑抄」によっているが、後者には「右朝鮮より龍伯公江被仰進候御状ニ而正文指宿士海江田仲左衛門所持之由」の注記があり、文書伝来の経緯を推測させる。また国隆書状は比志島国隆事件解明のための基本史料といえよう。（『指宿市考古博物館平成九年度紀要』所収「比志島紀伊守家古文書」、『鹿大史学』18、拙稿「比志島国隆について」参照）

比志島文書（尚古集成館）

磯尚古集成館には比志島旧蔵文書（巻装）として島津義弘より比志島国貞に宛てた書状二点、島津家久から町田久幸・比志島国貞宛書状一点、それに松平信綱と久世広之から家久宛の書状各一点が伝えられており、国貞の地位の重要性を物語っている。以上同家文書としてまとまっているのは前項のものと二件で、他は散佚または島

津家文書中に収納されたのではあるまいか。

なお『鹿児島中世史研究会報』50号に松尾千歳氏の「尚古集成館文書について」で同文書の飜刻、解説がある。

本田家記文書及系譜

本史料の冒頭に明治二十年四月二十五日付の内閣修史局より本田九郎宛の同家相伝系図一巻の借用申込書が掲げられていることから、本書は修史参考のため修史局に於て本田家より借用書写した表題の上・中・下三冊本を一帙にしたものと思われ、旧蔵者の手より巷間に出ていたところをたまたま鹿児島県歴史資料センター黎明館創設期に購入したものとみられる。上は親鞗から恒親、親恒とつづけ、親恒以後の記事が多い。はじめに大田久知より浅羽三右衛門宛の親恒以前の本田家系譜調査方依頼状をのせ、次に本田氏始祖以降の系譜の伝承等についての記述がある。それは島津氏の始祖説話と同様、源頼朝や畠山重忠との関連で語られており確証性に乏しい。またはじめて入部した貞親を静観とし、次で親兼（道観）・久兼とつなげているが、これには伊地知季安も注書で疑義を呈しており従いがたい。年数的には静観・道観を貞親のあと、久兼・親保の前に挿入するのが妥当であろう。その他上には「本田静観伝」・「本田二郎親兼入道道観伝」・「本田重親譜」等の記事・文書をのせ、中には「本田元親譜」・「本田重恒譜」・「本田国親譜」・「本田兼親譜」等の記事と文書をのせ、下には本田董親代の記事・文書をのせている。とくに天文十五、六年代の董親の書状が十数点まとまって記載されている。まさにこれらは島津貴久によって追却される直前までの彼の権勢を裏付ける史料といってよい。本田氏が公家との関係に於ても島津本宗家被官の出自乍ら、北郷・樺山・新納・豊州家等有力な一族庶子家と対等或はそれ以上の立場にあったことを示している。しかもこれらの文書がほとんど『旧記雑録』に載録されておらず、今後の研究史料としての

活用が期待されよう。ただ董親の復権以後の活躍等の記載を欠き、親兼の子公親代以降の詳細を知りえないのは嫡流系譜として物足らぬ感を抱かせる。（『鹿児島県史料　旧記雑録拾遺　伊地知季安著作史料集三』所収「諸家系図一　本田家総譜」参照）

本田家文書（島津家文書）

東京大学史料編纂所所蔵の島津家文書中新長持納入文書として「本田家由緒書類」がある。これは前掲本田氏系図中、兼親の子親貞流の六右衛門家文書で、島津義久から家久の家老として活躍、初代出水地頭となった本田六右衛門正親時代の文書が中心。はじめの三点は著名な本田家の格式を立証する文書であるが、なお検討を必要としよう。その他島津義久・義弘・家久らの発給文書や、近衛前久書状など近世初期の文書がまとまっている。近世後期までに藩庫に入ったと考えられる。

本田家文書（東大影写本）

日向高岡本田家文書を東京大学史料編纂所の影写本によって紹介する。『旧記雑録』に「正本在本田九郎右衛門親豊」とあるのに該当しよう。同家は前掲『鹿児島県史料　旧記雑録拾遺　伊地知季安著作史料集三』所収「諸家系図一」の本田氏系図に出自不詳、或は重恒流としてみえる古簾の後、島津日新、貴久に仕え戦功のあった本田九郎入道松（笑）閑の関係文書。その孫親広代に高岡へ移り、地頭比志島国貞のもとで与頭役を務めた家統の文書と思われる。

山田家文書（鹿児島県立図書館）

日置郡山田村（日吉町）を本貫の地とする平姓山田氏流で、有信・有栄父子の代に島津義久・義弘・家久等に仕え殊功があった。有信は越前守、出家して越前入道利安と称し、有栄は民部少輔、出家して昌厳と称した。出

水地頭として名を挙げた。子孫は山田新助家で重宝、文書等を相伝したが、明治になって家産が傾き、その保持が困難となり、島津家に返献又は巷間に放出したと思われる。本文書は現在鹿児島県立図書館に収蔵されているもので、題簽に山田昌厳書簡とあり、巻軸仕立、二通とも年未詳であるが、山田民部有栄が近縁の者に発出した書簡で、後者には老体故押印をしたとあるから出家以前ながらかなり高齢になってからのものであろう。因に今井市兵衛とは、島津義弘と親交のあった堺商人田辺屋道与の養子となった仁礼頼景の二男で有栄の女婿に当る。

山田家文書（島津家文書）

東京大学史料編纂所所蔵島津家文書中の山田家文書は「山田弥太郎返献文書」と名づけられている。五通の義弘・義久書状等のあとに明治十八年、活計困難のため返献の申出があり、やむなく収納した旨の磯邸執事方覚書がある。内容は何れも有信・有栄らの功績を証する直々の褒詞であり、同家にとって格別大切に取り扱われてきた文書であったことがわかる。但しその内容・表現等からみて、なお検討を要しよう。

山田家文書（尚古集成館）

磯尚古集成館所蔵の「山田家旧蔵文書」と名づけられている文書は、同じく有信・有栄らに宛てた義久・義弘・家久・光久ら歴代島津家当主の書状で計十七通（一点だけ家久の義母堅野永俊尼宛の書状を含む）で、乾坤二巻に貼り継がれている。腐損文書が多いが、大部分のものが『旧記雑録』に収録されていて補って読解可能であり、その大半に「正文在山田弥九郎有盛（有栄子）」とあり、一部に「在山田市郎兵衛有英（有栄孫）」とある。これまた前項と同じく同家の重宝として相伝されたものが、やはり明治期に島津家に収納されたものと考えられる。（前掲松尾千歳氏「尚古集成館文書について」『鹿児島中世史研究会報』50参照）

留守文書

留守文書は姶良郡隼人町見次留守景彦氏所蔵文書である。留守家は紀姓、桑幡・沢・最勝寺家と共に大隅正八幡宮（鹿児島神宮）四社家の一つで、中世以降留守職を世襲、近世は四社家中をもって家格が高かった。『鹿児島県史料　旧記雑録拾遺　家わけ六』では東京大学史料編纂所所蔵の「留守文書写」によって九点の文書写を採録したが、今回あらためて同家を採訪、現存を確認した八号文書一点を再録し、併せて所蔵の由緒書、系図等を収録する。参考資料として平成九年二月刊『鹿児島神宮文化財調査報告書』（鹿児島神宮）、平成十三年四月刊、埋蔵文化財発掘調査報告書『留守氏館跡』（隼人町教育委員会）のあることを記しておく。

終りに参考資料として本書掲載分の史料点数と、文書について『旧記雑録』に収録済のもの、未収録のものの点数をしめしておこう（表参照）。

（五味　克夫）

『家わけ十』掲載文書内、文書・記録・記事等点数

文　書　名	文　書　数 (収載)<未収>	系図・記録・ 記事等	目録上史料 総　数	掲載史料数
指宿文書	47 (31) < 16 >	11	39	37
笠間文書	11 (0) < 11 >	0	11	11
冠嶽頂峯院文書	41 (25) < 16 >	2	33	33
北村文書	41 (0) < 41 >	12	43	40
桑幡家文書	56 (5) < 51 >	27	15	12
国分文書	28 (24) < 4 >	2	30	30
新城島津家文書 (日向佐土原島津文書)	94 (0) < 94 >	2	96	96
新城島津家文書 (垂水島津家文書)	53 (1) < 52 >	0	53	53
新田神社文書	152 (103) < 49 >	2	121	119
野久尾家文書	14 (0) < 14 >	2	14	14
日置島津家文書	21 (19) < 2 >	1	22	22
比志島文書 (指宿市考古博物館)	7 (1) < 6 >	1	8	8
比志島文書 (尚古集成館)	5 (0) < 5 >	0	5	5
本田家記文書及系譜	141 (94) < 47 >	0	141	141
本田家文書 (島津家文書)	41 (33) < 8 >	1	42	42
本田家文書 (東大影写本)	5 (3) < 2 >	0	5	5
山田家文書 (鹿児島県立図書館)	2 (0) < 2 >	0	2	2
山田家文書 (島津家文書)	6 (1) < 5 >	0	6	6
山田家文書 (尚古集成館)	17 (14) < 3 >	0	17	17
留守文書	2 (0) < 2 >	4	6	6

注　1　収載とは「旧記雑録」収載文書を示し、未収とは、「同」未収載文書を示す。
　　2　掲載史料数とは、『家わけ十』内で掲載した重複分を除く史料数を示す。

例　言

一　本書は、「指宿文書」以下二十家の中世から近世（一部近代まで）文書を収め、『鹿児島県史料　旧記雑録拾遺家わけ十』として刊行するものである。本書の底本とした文書名と所蔵を掲載順に示すと次のとおりである。

史料名	所蔵別
指宿文書	有村昭比登氏（宮崎県東諸県郡高岡町） 指宿市考古博物館時遊館COCCOはしむれ
笠間文書	鹿児島県歴史資料センター黎明館
冠嶽頂峯院文書	田代宣照氏（串木野市）
北村文書	北村義視氏（姶良郡加治木町）
桑幡家文書	吉丸正司氏（姶良郡隼人町）
国分文書	東京大学史料編纂所（国分家史料）
新城島津家文書	東京大学史料編纂所（日向佐土原島津文書巻五―八）
新城島津家文書	鹿児島県歴史資料センター黎明館（垂水島津家文書）
新田神社文書	新田神社（川内市）

史料名	所蔵別
野久尾家文書	東京大学史料編纂所（島津家文書長持三十六番）
日置島津家文書	個人旧蔵
比志島文書	指宿市考古博物館時遊館COCCOはしむれ
比志島文書	尚古集成館（鹿児島市）
本田家記文書及系譜	鹿児島県歴史資料センター黎明館
本田家文書	東京大学史料編纂所（島津家文書新長持）
本田家文書	東京大学史料編纂所（影写本）
山田家文書	鹿児島県立図書館（山田昌巌書翰）
山田家文書	東京大学史料編纂所（島津家文書新長持）
山田家文書	尚古集成館（鹿児島市）
留守文書	留守景彦氏（姶良郡隼人町）

一　総括的な文書名の表記は、原則として本来の氏姓に従って「〇〇文書」または「〇〇家文書」とした。文書の配列については、五十音順とした。

一　個々の文書や記録などの掲載にあたっては、成巻されたものや編さん物については原則として底本の収載順に収め、それ以外は編年順に掲載した。

ア　指宿市考古博物館所蔵「平姓指宿氏系図」は、有村氏所蔵文書と一括して「指宿文書」とした。また「指宿文書」中、所在未確認分については指宿氏旧蔵文書として収載し、注記した。

イ　「桑幡家文書」中「大隅国図田帳」については、五味克夫「大隅国建久図田帳小考―諸本の校合と田数の計算について―」（『日本歴史』一四二）に倣い補注を加え、それが鹿児島大学附属図書館所蔵玉里文庫本「図田注文」中の写本と同一の場合㊟で示した。

ウ　「国分文書」中、「薩摩天満宮・国分寺所司神官等申状并具書案（冊子）」所収の文書は、「天満宮古文書写（巻子）」により補充し、補充箇所は▽㊟△で示した。

エ　「新田神社文書」端裏書・裏書については、適宜東京大学史料編纂所所蔵影写本「新田八幡宮文書」により補った。また、「新田神社文書」中第二巻から第六巻については、現在の表装された文書について、料紙の継目は破線及び（紙継目）として示し、連続しない文書は┌──┐└──┘で区別した。また権執印文書においても一部同様に示した。

オ　島津家文書長持三十六番箱中「野久尾家文書」及び「野久尾文書系図差出一件」を一括して「野久尾家文書」とした。

一　文書は、原則として底本に従って掲載し、通し番号と文書題を文首に付した。重出文書等は文書名のみを示し、

本文は省略した。なお、添書等のあるものは、枝番を付して分けて収めた。

一　収載した文書の欠失箇所をほかの文書や写本等によって補充または校訂する場合は、次のようにした。

ア　補充・挿入箇所は▽　△及びくで示した。

イ　補充や校訂に使用した典拠史料は、次の略号で示した。

旧記雑録　㊧

島津家文書　◎

新編島津氏世録正統系図（東京大学史料編纂所所蔵）　㊦

新編島津氏世録支流系図（東京大学史料編纂所所蔵）　㊨

大隅国図田帳（鹿児島大学附属図書館所蔵玉里文庫本「図中注文」中）　㊤

一　刊行にあたって、文書の体裁をおおよそ次のように統一した。

ア　原注や文書中の異筆・補筆は、原則として「　」（墨書）、『　』（朱書）で囲んだ。

イ　文書の年月日・差出所・宛所の位置などは、原則として底本の体裁に従った。

ウ　文書・記録・記事には、適宜読点「、」および並列点「・」を付した。

エ　文書・記事の冒頭部にある「○」印・「●」印は、底本の体裁に従った。

一　原文の磨滅虫損は、字数を推して□または▭を以て示し、判読不能な文字については▩で示した。

一　虫損等の理由で書写の際に空けられたと考えられる箇所については、□または▭を以て示した。

一　見せ消は、その文字の左側に「〻」を付した。

一　合点は右肩に〵で示した。

一　系図中人名上の「●」「▲」「♣」「○」「△」「◎」などがすべて朱書の場合は文末に付注し、文中に『　』を付けないこととした。

一　系図中の罫線等については、一部朱線について注記した。

一　頭注や行間の書き込みは、原則として底本の体裁に合わせたが、書き込みが長い場合は※印を該当箇所に記し、関連箇所の本文後に適宜まとめた。

一　編者の付した注は、原注と区別するために（　）で囲んだ。

一　欠字・平出・台頭などは、原則として底本の体裁に従った。

一　原文中の送り仮名は、一部を除き省略した。

一　原文中の返り点については、原則として省略した。

一　原文中の地名・人名・官名・年号などに施されている朱引は、全て省略した。

一　変体仮名は現行の平仮名に改めたが、江、而、茂、者、与など一部はそのまま用いた。

一　漢字は一部の異・略・俗字を除き、原則として底本の用字に従った。

一　当時一般に使用された文字のうち、次のようなものはそのまま用いた。

　吴（異）旱（畢）亥（事）躰（体）刁（寅）帋（紙）刄（州）析（料）墩（郭）逃（逃）季（年）

　广（摩）麑（鹿児）寰（最）庸（廟）二（四）諏方（諏訪）閇（閉）卩（部）嵜（崎）仝（同）

　夕（勺）皈（帰）劔（剣）

旧記雑録拾遺家わけ十　目次

解題……1
例言……17
目次……21

指宿文書……一
笠間文書……六一
冠嶽頂峯院文書……六七
北村文書……一一五
桑幡家文書……一五三
国分文書……二二三
新城島津家文書（東京大学史料編纂所）……二六五
新城島津家文書（黎明館）……三一九
新田神社文書……三五三
野久尾家文書……四三九
日置島津家文書……四六一
比志島文書（指宿市考古博物館）……四七一

比志島文書（尚古集成館）……四七七
本田家記文書及系譜……四七九
本田家文書（島津家文書新長持）……五五七
本田家文書（東京大学史料編纂所影写本）……五七五
山田家文書（鹿児島県立図書館）……五七九
山田家文書（島津家文書新長持）……五八一
山田家文書（尚古集成館）……五八五
留守文書……五九三
文書目録……六〇三

指宿文書

○ 一　関東下知状

可令早平重秀領知養父忠秀跡薩摩國揖宿郡之司蕨野
同内九所大明神宮司秋冨名田畠名主職等各半分事

右、當郡地頭豊後四郎左衛門尉忠綱代官殺害忠秀以下親類所従等□(之)間、如忠秀舎弟字小次郎忠成・同養子平次郎重秀(本名二郎法師、忠秀甥)訴申者、非主人忠綱下知者、為代官身、争致如然狼藉哉云々、而忠綱一切依不知子細、或召進下手人於六波羅、或斬首之旨披陳之處、如忠綱梶取同郡山河住人字綾三郎延元男申状者、忠綱上取忠秀同親類等跡名田畠、宛行代官高四郎行重男之由承及云々、忠綱陳詞之趣渉矯餝之間、被改補所職畢、爰忠成企参上、不訴申子細者、何今可及御沙汰哉、且為忠秀為奉公欤、仍可宛給其跡所職名田之由申之、重秀亦稱有養父忠秀譲状可惣領之旨雖令申、子細不分明之上、忠成所申一向難被弃置(棄)欤者、件所職名田畠重秀・忠成各半分令領知、任忠秀之例、可相従地頭所務之状、依鎌倉殿仰、下知如件、

文暦二年八月廿八日　　武蔵守平(北条泰時)(花押)

相模守平(北条時房)(花押)

(本文書ハ「旧記雑録前編一」三八九・三九〇号文書ト同一文書ナルベシ)

○ 二　北条泰時書状

(包紙ウハ書)
「　武蔵守下知状此武蔵守ハ鎌倉執權北条氏と相見得候、高武蔵守師直ニ而者決而有之間敷候、」

(ハリ紙)
「兄三郎左衛門殿ハ忠久公ノ御嫡　もろなふの御書也、
弟四郎左衛門殿ハ越前嶋津殿　指宿依理運此書在當家」

薩摩國御家人揖宿平四郎忠秀与娃(頴娃)頴平太忠継論申開門神領間事、豊後三郎左衛門尉相共召決、両方可被注申給候也、謹言、

七月廿七日　　武蔵守(北条泰時)(花押)

豊後四郎左衛門尉殿御返事

(本文書ハ「旧記雑録附録一」四二四号文書ト同一文書ナルベシ)

○ 三　島津道鑑貞久書下写

武蔵修理亮英時誅伐之時、分取壹人門真余三之頸、并親類忠継

被疵事、令見知了、仍執達如件、

元弘三
五月廿七日　　道鑑在―

揖宿郡司彦次郎(忠篤・成栄)入道殿

（本文書ハ「旧記雑録前編一」一六三六号文書ト同一文書ナルベシ）

○　四　大友具簡(貞宗)書下写

武蔵修理亮英時誅伐之時軍忠事、申状給候了、仍執達如件、

（元弘三年）
七月廿八日　　具簡(大友貞宗)在―

揖宿郡司彦次郎(忠篤・成栄)入道殿

（本文書ハ「旧記雑録前編一」一六五六号文書ト同一文書ナルベシ）

○　五　指宿成栄(忠篤)着到状写

（包紙ウハ書）

「　元弘三年　　第二號

指宿忠篤関係文書　一通　」

（包紙ウハ書）

「　後醍醐天皇(宸)震筆之御書入有　」

「一見了、
（左少将カ）
□」

薩摩國揖宿郡司彦次郎入道成榮、令馳参御方候、□(以)此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

元弘三年七月十三日　　沙弥成榮□(判カ)

進上　御奉行所

（本文書ハ「旧記雑録前編一」一六五四号文書ト同一文書ナルベシ）

○　六　島津道鑑(貞久)書下

（包紙ウハ書）

「　貞久公御一見状壱通　」

嶋津庄日向方冨山七郎左衛門尉義道申、嶋津院住人右衛門五郎致追捕苅田以下狼藉由事、訴状副具書、如此、早土持掃部左衛門入道相共莅彼所、且遂検見、且企参上、可明申旨相觸之、可被執進請文、若令難渋者、載起請之詞、

可被明申也、仍執達如件、

元弘三年十月十三日　　（島津貞久・道鑑）沙弥（花押）

揖宿郡司入道殿

（本文書ハ「旧記雑録前編一」一六六八号文書ト同一文書ナルベシ）

○七　指宿成栄（忠篤）軍忠状写

薩摩國揖宿郡司入道成榮謹言上、

欲早預御注進消息賞武蔵修理亮英時誅伐合戦、抽軍忠子細事、

右、去々年五月廿五日、成榮・同子息次郎忠泰等屬大将島津上總入道之手押寄于英時城郭、越乱杭逆向木城等地打入敵栗石坪（ママ）秤定所、或令分取門眞余三頸、或親類厚地孫八忠継被疵、打捕數輩凶徒抽軍忠之條、大将被見知畢、随而為後證大友近江具間（簡）・筑後入道妙恵所出覆勘状等也、而成栄依所北方在國之間、相漏大将注進之條、愁吟无者也、所詮、軍忠无其隠之上者、速預御注進消息賞、殊欲施弓箭面目、仍恐々言上如件、

建武二年二月　日

○八　内裏大番役交名注文写

（八の1）内裏大番自三月朔日可被勤仕薩摩國地頭御家人実（交カ）名事、次第不同、参分、鎧直垂、てうつかけあるへく候、

大隅次郎三郎　　式部五郎入道
周防蔵人三郎　　渋谷小四郎入道
矢上左衛門二郎　　智覽四郎
指宿郡司入道　　光富又五郎入道
渋谷彦三郎入道　　朝岳諸三郎
比志島

建武二年二月晦日

（本文書ハ「旧記雑録前編一」一七二六・一七二七号文書ト同一文書ナルベシ）

（八の2）指宿郡司入道殿

薩摩國大番役所二条万里小路物頼（南煩）

今月建武二より五ケ日五ケ夜可有勤仕之状如件、

○九　雑訴決断所牒

（端裏書）

「指宿入道聖代なり」

雑訴決断所牒　薩摩國守護所

當國揖宿郡司成榮申、地頭智覧次郎入道善通・同子息忠康田畠在家等押領事、

解状　具書

牒、為糺決、来六月中可参洛之旨、相觸善通、可申散状者、牒送如件、以牒、

建武二年四月十四日　　前筑後守藤原朝臣（小田貞知）（花押）

明法博士兼左衛門權少尉左京大進中原朝臣（職政）（花押）

左少弁藤原朝臣（藤長）

○一〇　島津道鑑（貞久）書下

（包紙ウハ書）

「道鑑与有之

一貞久公御執達状壱通并大友具簡同状壱通

但右ノ写　（右ハ三・四号文書ヲ示スモノカ）

沙弥与有之

一貞久公御執達状壱通」

薩摩國揖宿郡司彦次郎入□（道誠）榮申、山口三郎入道了一跡□（從、同カ）國揖宿郡秋冨名内中河并荻迫事以下抑留事、御牒案并□（御教カ）書如此、早任被仰下之旨、急速可参洛之旨、矢上左衛門五郎相共相觸了一跡輩、可被執進請文、若不叙用者、載起請之詞、可被注進也、仍執達如件、

建武二年五月廿五日　　沙弥（島津貞久・道鑑）（花押）

伊集院弥五郎（久兼）入道殿

（本文書ハ「旧記雑録前編一」一七三五号文書ト同一文書ナルベシ）

○一一　足利尊氏軍勢催促状

（包紙ウハ書）

「足利尊氏将軍

菊池誅伐状」

菊池武敏已下凶徒等誅伐事、可致軍忠之状如件、

建武三年三月五日　　（足利尊氏）（花押）

揖宿一族中

（本文書ハ「旧記雑録前編一」一七八四号文書ト同一文書ナルベシ）

○一二　指宿成栄忠篤着到状

（包紙ウハ書）

「　建武三年
指宿忠篤関係文書　第二號　一通　」

肝付八郎兼重与黨凶徒等誅伐事、為抽軍忠、薩摩國御家人揖宿郡司入道成榮令馳参候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

建武三年四月廿五日　　沙弥成榮

（裏花押）

「承了　　（島津貞久）（花押）」

進上　御奉行所

（本文書ハ「旧記雑録前編一」一八四二号文書ト同一文書ナルベシ）

○一三　薩摩国市来城合戦次第

同年建武四九月十四日、大隅助三郎忠國師（旧帥）兵救市来城、十七日、頼久進師（帥カ）復囲市来城、至廿七日凡数十戦、大隅五郎兵衛尉助久率子孫六及酒匂兵衛次郎・頴娃三郎・延時彦五郎忠能等、（旧進）〈矿水塞、又薄大門、於是三条侍従泰季遣揖宿彦次郎忠篤入道成栄、率其代官高野中務丞朝久・高野淡路房宗栄等、亦救市来、晦日、頼久（旧乃）〈使式部亀三郎友久・比志島孫三郎範經・延時忠能・遠矢次郎太郎入道円也・小浜十郎等、与援軍戦、助久父子・頴娃三郎等奮戦、斬成栄子揖宿次郎忠泰等数人、大隅助七及上原某降、二十九日、沙弥与比志島彦一範經（旧平）書、使護助七（旧等）〈、且命之曰、凡有軍功宜就頼久報告之、自二十八日至晦日凡数十戦、時晦日、揖宿成栄代官高野宗栄及有間平次郎・山角平三郎入道・栗山（旧下）宰相等、續救城兵、大隅助久・上野三郎四郎・延時等与之（旧闘）〈戦、我兵壱人為宗栄所斬首、又比志島範經及其家僮常陸坊・旗持又二郎等死之、

（本記事ハ「旧記雑録前編一」一九六九号トホボ同文ナリ）

○一四　薩摩国指宿郡合戦討死手負注進状案

目安

薩摩國揖宿郡度々合戦事

討死分

一人　揖宿次郎忠泰　一人　野間彦六忠友
一人　中村四郎家忠　二人　厚地八郎入道善心
同子息孫八忠継

手負分

一人　高野中務丞朝久
平合戦分　一人　奈良三位房俊忠扶持人討死手負等在之、
一人　原田彦五郎入道妙栄扶持人手負等在之、
一人　山崎又次郎忠弘扶持人手負等在之、
一人　赤崎左衛門三郎同
一人　原田小次郎　同
一人　嶋間七郎久宗　同
一人　吉田又四郎清忠同
一人　岩本平太郎政忠同
一人　山崎平四郎忠遠同
一人　杉岡助七家秀　同
一人　神野平三郎　同

（裏書）

「　任傍例
右、為浴恩賞、大略注進如件、
延元二年三月十七日　」

○一五　三条泰季袖判御教書

（包紙ウハ書）
「　左中将御袖判　」

（三条泰季）
（花押）

薩广國揖宿郡内秋益名道鑑法師跡上裁落居之程所被預置也、早可被静謐甲乙人乱妨之由、三條侍従殿仰所候也、仍執達如件、
延元二年五月廿六日　左近将監高家奉
揖宿郡司入道殿

（本文書ハ「旧記雑録前編一」一九四〇号文書ト同一文書ナルベシ）

○一六　指宿成栄忠篤軍忠状

「加一見了

（三条泰季カ）
」

薩摩國揖宿彦次郎入道成栄謹言上、

欲早致度々軍忠上者、賜御一見状、備後證龜鏡事、

右、去年三月十七日、薩州御大将三条侍従殿御下向之間、任　綸旨之旨、馳参最前、及数十ヶ度合戦、為御□（敏）嶋津上総入道々鑑一族大隅五郎兵衛子息孫六・顕娃三郎等、成栄子息次郎并一族親類若黨数輩令打死早、将又市来院後巻之時、代官高野中務丞朝久致散々合戦、令分取了、至于今毎度合戦不断絶之条、世以無其隠候、然早賜御一見状、為備後證龜鏡、恐々言上如件、

延元三年二月五日

（本文書ハ「旧記雑録前編一」二〇〇〇号文書ト同一文書ナルベシ）

〇一七　左中将某寄進状

（包紙ウハ書）

「　宮方大将
三條殿初侍従後
中納言左中将寄進状壹通
」

奉寄進

薩摩國揖宿郡國衙年貢以下事

右於正税物等者、所奉寄進當郡　鎮守開門新宮大明神也、迄于未来際、不可有相違之状如件、

正平三年八月廿二日　（三条泰季カ）左中将

〇一八　征西将軍宮令旨

（包紙ウハ書）

「　宮方大将三条前中納言状　」

（封紙ウハ書）

「　指宿能登守殿　　前中納言　」

智覧美濃權守忠泰申、薩摩國智覧院并河邊郡事、任亡父忠元譲状旨、可致沙汰之由、　令旨如此、早鮫嶋下野守相共莅彼所、可被沙汰付下地於忠泰、若有子細者、載起請之詞、可被注進之状如件、

建徳元年十一月廿一日　（三条泰季カ）前中納言

指宿能登守(忠勝)殿

（本文書ハ「旧記雑録前編二」二〇三号文書ト同一文書ナルベシ）

〇一九　指宿忠勝寄進状

奉清大山常樂寺寄進田薗事

薩摩國指宿郡秋冨名内神野薗一ヶ所・同水田二町、忠勝重代相傳地也、然間彼御寺進上仕候畢、仍為後日寄進状如件、

天授二年七月廿五日　　能登守忠勝

〇二〇　今川了俊安堵状

（包紙ウハ書）

「　九州探題今川了俊筆　安堵状　」

（ハリ紙）「今川了俊」

薩广國指宿郡内山河・鳴河事、任相傳旨、不可有知行相違之状如件、

明徳四年十月十一日　　沙弥（今川了俊）（花押）

指宿殿

（本文書ハ「旧記雑録前編二」五〇六号文書ト同一文書ナルベシ）

〇二一　犬追物手組

犬追物手組之事　文安三年二月

又三郎殿　　島津次郎三郎
島津次郎　　島津助三郎
村田三河守　　揖宿平次郎
本田因幡守　　島津十郎次郎
島津下野守　　市来筑前守
島津三郎太郎

検見　　喚次
陸奥守(島津忠国)殿　　平田美濃守

〇二二　島津義久加判領知目録

（包紙ウハ書）

「　義久公御袖判知行目録一通　」

（端裏書）
「指宿左近兵へ」

（黒印、印文「義久」）
□
隅州蒲生之内領知目録
浮免
かまふ之内
壱段壱畝三段壱畝十歩之内　一ノ殿守先　宮田
壱段壱畝　同先　堂乃脇
已上
山畑壱段弐畝　同先　谷河つる
天正廿年雪月廿日　鎌田出雲守　政近（花押）
町田出羽守　久倍（花押）
長壽院　盛淳（花押）
指宿左近兵衛尉（忠慶）殿

（本文書ハ「旧記雑録後編二」一〇一一号文書ト同一文書ナルベシ）

〇二三　島津義弘掟書

（ハリ紙）
「武庫様高麗へ御渡海候時此御条書を左近兵衛尉へ被下置候也」

（ハリ紙）
「隈之城ニ而、祖父左近兵衛所へ　義弘公卅日程御逗留被遊、此御條書を被成下、高麗へ御渡海被遊候、親十郎右衛門御供仕候、慶長二年丁酉三月在所打立申候、但此御條書、長井十郎左衛門御右筆仕候よし申傳候、但二番立ニて候」

（ハリ紙）
「忠利申ハ、御両君能御存為被遊者ノ事ニ候へハ、御方へ御咎目於有之者、乍不似合拙者ヨリ御断可申上候、是非ノセテ給リ候へト再三ニ及ニ付」

掟

一京都・高麗之御公役無緩可相調事、

一諸代官もし構私曲、猥儀於在之者、為諸百性（姓）中、無用捨有様可致直訴事、

一於普請衆者、無懈怠可罷出事、付もし懈怠之者於在之者、則過怠普請可申付事、萬一難澁之輩あらは、めい〳〵しるしをき、為其地頭可申上事、

一諸事為其地頭申付儀、晝夜共無吳儀可相勤事、

一晝夜共於小路高雑談高笑其外猥振舞にて、在高麗・在京人以下留守居之者之門にたゝすミありき候儀并さと宿停止たるへし、付横目之者共申付置候事、

一惣別在國之者共、上下共もし猥儀於在之者、たれ〳〵たりといふ共、見立聞立、有様於申上者、褒美をなすへき事、

一毎月地頭所ニ朔日・十五日之出仕、懈怠有間敷事、

一女方之嗜肝要たるへし、就中人の妻をぬすみ、慮外之振舞仕者あらハ、見立聞立、實否を糺し、為其地頭可令討罰事、

一毎座酒を過すましき事、付酒狂仕者あらは、過物を相懸へき事、

一人の留守居にもし用所あらは、然ゝ使を以申へし、取分若輩として、自身出入せしむる儀、一切停止たるへき事、

一他所ありき停止之事、但無余儀用所あらは、其地頭にいとまをこひてまかり出へき事、

一火用心由断有間敷事、付自火には過物有へき事、

一其地頭食仕候者、萬一猥儀在之而、於構私曲者、其地頭緩たるへく候間、能ゝ念を入可申付事、

一分國中之者、　公用之外私之上洛可為停止、但商賣人者此外たるへき事、

一いつミ御蔵入より、或走者、或賣人、買取於拘置者、早ゝ可相返、自今以後走者之儀者申にをよはす、いつミよりの賣人、一切買取間敷事、

一當所限城之儀者、御蔵入之堺、又北郷領彼是出入在之事候条、諸事念を入、毎物令遠慮肝要ニ候、就中喧嘩口論之儀、一切停止たるへき事、

一下馬之儀、傍至（傍示カ）之外其沙汰有間敷之事、

一一向宗之儀、先祖以来御禁制之儀ニ候之条、彼宗躰ニなり候者者、曲事たるへき事、

慶長二

弐月廿八日　　義弘（花押）

（本文書ハ「旧記雑録後編三」二〇二号文書ト同一文書ナルベシ）

（包紙ウハ紙）

「　やふミ貳通入　一　」

（二四・二五号文書ヲ納ム）

○二四　為有書状

以齋藤房申、御舟之間事無相違之様ニ計沙汰候者、真實ニ公私可為大慶候、忩々承御左右、則罷越仰之趣條々可申談候、此事道慶令下向候、委細可申談候欤、毎事期後信候、謹言、

三月三日　　為有

指宿彦大郎入道殿

○二五　五条頼元書状

被進紀州之絹弐疋慥到来、年内可被進候、丁寧沙汰神妙之由、其沙汰候、恐々謹言、

十一月四日　　頼

指宿入道殿

○二六　島津家久書状

（包紙ウハ書）

「　家久君御書壹通入　」

至遠路為見廻使者、殊為音信銀子三枚到来、喜悦之至候、猶可相達口上候、謹言、

七月十四日　　家久（花押）

○二七　某覚書

（端裏書）

「指宿十郎右衛門尉」

高麗へ御渡海之時、従唐土江南、高麗為加勢人数百万余相渡候内、龍涯と云者、日本与大國弓箭致調法者也、慶長三年戊戌九月下旬、泗州（ソウシウ）古城へ為使者来時、相良玄番助致同心被差出候時、我等へ是ヲ書渡候、其十月朔日ニ、右之百万之人数泗州新城ニ相懸所ヲ、漸薩广衆七八千程ニテ悉追崩打捕候、我國之誉、前代未聞之由也、

○二八　某覚書

慶長三年戊戌九月下旬、高麗泗州（ソテン）御城へ軍之儀ニ付、為使者龍涯と云者数度参候、其節張番シテ相良玄番・河上六郎兵衛相勤候處ニ、為加番士弐百人程主取参候時、此書付ヲ十郎右衛門尉忠利相渡候、其後弟子丸弥八為替番指越候故、相替泗州へ帰り候、後数十万崎（騎カ）大明人泗州へ押寄候、

○二九　指宿氏系図

（前略ス）

平四郎
忠秀

（二九の1）
（本文書ハ二号ト同文ニツキ省略ス）

右、忠秀依理運、此御書當家有之、

郡司小二郎　指宿本地頭
忠成
法名成心

（二九の2）
（本文書ハ一号トホボ同文ナリ、省略ス）

指宿本地頭　郡司又二郎
忠連
初宗忠　法名賢成

（二九の3）
ゆつりわたすゆふすきのこほりのくんししきなら
ひにてんはたさんやかゝい、をなしきかいもんし
んくのミやつかさしき之事、
　ちやくなん又二郎むねたゝかところに
右、くたんのりやうしよ〳〵いけてんはくさんや
らハ、たいらのたゝなりせんそさうてんのしりや
うなり、しかるあひた、てうとのせうもんらをあ
ひそへて、やうたいをかきて、ちやくなんむね
たゝにゆつりあたうるところしちなり、きやうこ
うたのさまたけなくちきやうすへきなり、よてゆ
つりしやうくたんのことし、
　ふんゑい九年十一月十二日たいらのたゝなり判

（本文書ハ「旧記雑録前編一」七四四号文書ト同一文書ナルベシ）

指宿郡司彦次郎　幼名彦鶴丸
忠篤
法名成榮

（二九の4）
譲渡　薩摩國揖宿郡〻司職并田畠山野河海同開門
　　新宮宮司職等事
右、於両職以下田畠山野等者、平忠連先祖相傳所職所領也、然間、副調度證文等、限永代、所譲与子息彦鶴丸實也、向後不可有他妨、仍譲状如件、
　　正應六年五月廿四日　　平忠連判
（本文書ハ「旧記雑録前編一」九八二号文書ト同一文書ナルベシ）

（二九の5）
（本文書ハ五号ト同文ニツキ省略ス）

（二九の6）
（本文書ハ六号ト同文ニツキ省略ス）

（二九の7）
（本文書ハ一一号ト同文ニツキ省略ス）

（二九の8）
（本文書ハ一二号ト同文ニツキ省略ス）

（二九の9）
（本文書ハ一五号ト同文ニツキ省略ス）

（二九の10）
「一見了（三条泰季）（花押）」
　　薩摩國指宿彦次郎入道成榮代高野淡路房宗栄申、去九月卅日、為誅伐嶋津孫三郎頼久以下凶徒等、大将市来院御發向之間、馳参致軍忠、令分取一人之条、有間平次郎・山角平三郎入道・栗下宰相殿令見知候早、仍為浴恩賞、恐〻言上如件、
　　延元二年十月　　日
（本文書ハ「旧記雑録前編一」一九七二号文書ト同一文書ナルベシ）

（二九の11）
（本文書ハ一六号ト同文ニツキ省略ス）

号次郎、
忠泰討死
指宿地頭　能登守
忠勝
　法名了成

（二九の12）
ゆつりわたす大隅國内多祢の嶋事、成榮おんしやうとしてはいりやうの条、せい〳〵ミやのしやうくんの令旨明白なり、しかるを嫡子たる間、忠勝

にはんふんおハゆつりあたゑおハぬ、のこるはんふんにおきてハ、左京の亮忠之、掃部助忠平二人してちきやうすへし、けりやう四分一なり、おなしなからかの嶋ハ、代代ゆいそのちたる間、申給ハる所なり、子〻孫〻いたるまて、ちきやうさふいあるへからす、但かの所おハ、三人よりあひてわかちてちきやうすへきなり、仍為後日譲状如件、

正平十八年二月十七日　沙弥成榮（指宿忠篤）判

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一二二号文書ト同一文書ナルベシ）

（二九の13）
（本文書ハ一八号ト同文ニツキ省略ス）

（二九の14）
（本文書ハ二〇号ト同文ニツキ省略ス）

指宿本地頭
正忠
イ将忠

（二九の15）
譲与

薩摩國指宿郡惣地頭職事

右所職者、依多年軍忠之（田之）節、被成下安堵　令旨、忠勝令當知行所也、然間、嫡子将忠限永代譲与所也、迄于自今以後者、守彼状趣、不可有知行相違、仍為後日譲状如件、

天授二年七月廿五日　能登守忠勝判

（本文書ハ「旧記雑録前編二」三五一の1号文書ト同一文書ナルベシ）

女子
師犬
指宿本地頭

（本系図ハ現在不明ナリ、指宿氏旧蔵文書トシテ収載ス）

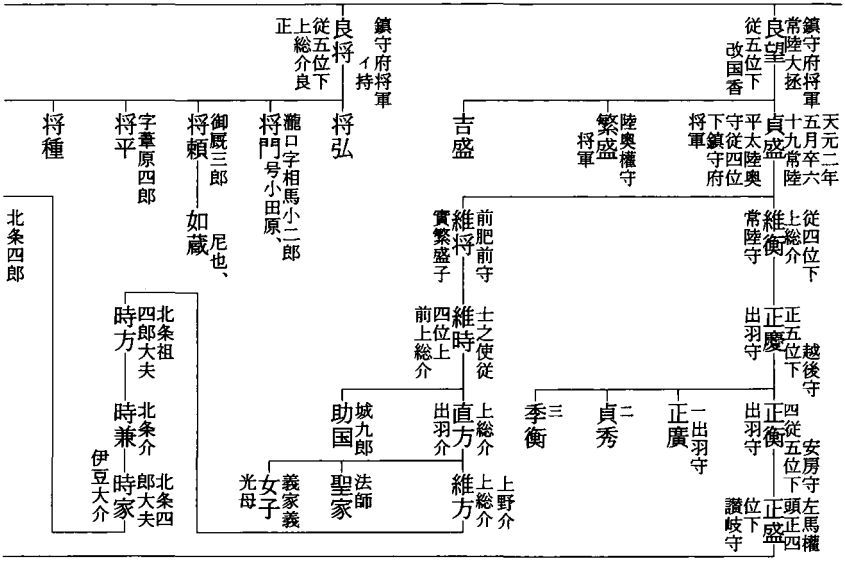
○三〇　平姓指宿氏系図（巻子）

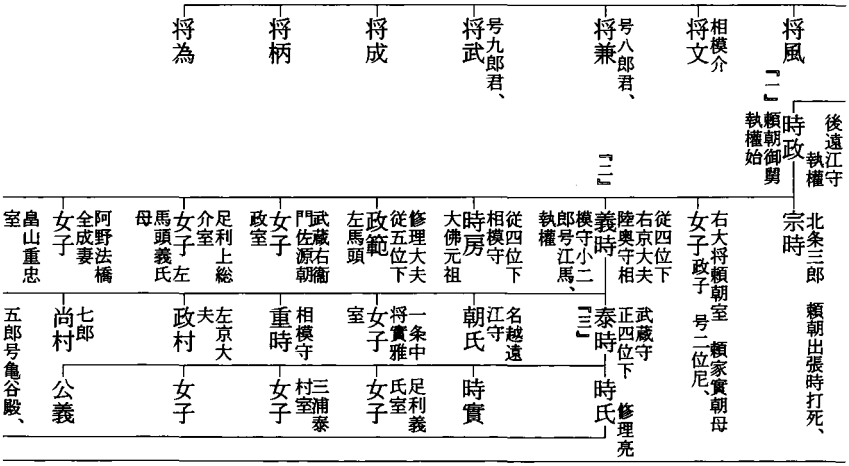
「指宿壱岐
- 同主税
  - 同助左衛門
    - 同主税
    - 同半右衛門
  - 指宿才圓
    - 同宗吉　鹿児ニ住、

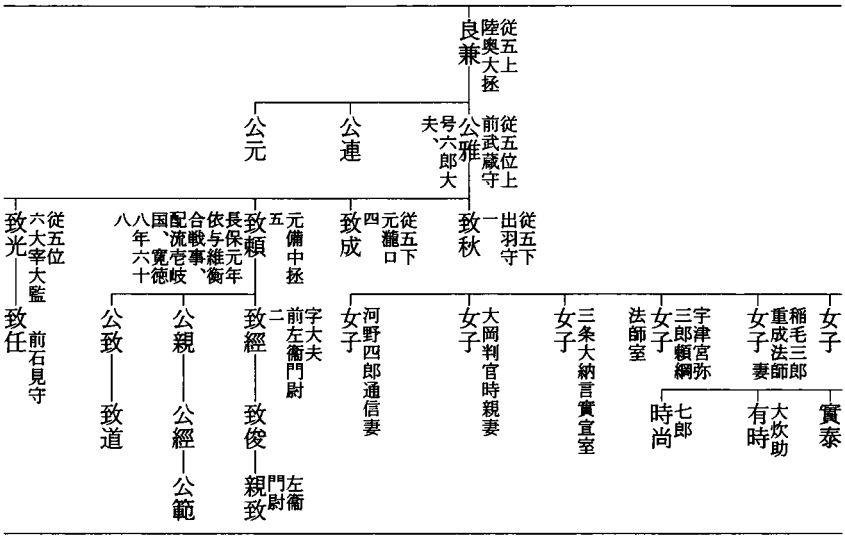
指宿帯刀子孫在鹿児嶋ニ、右ニハ別家也」

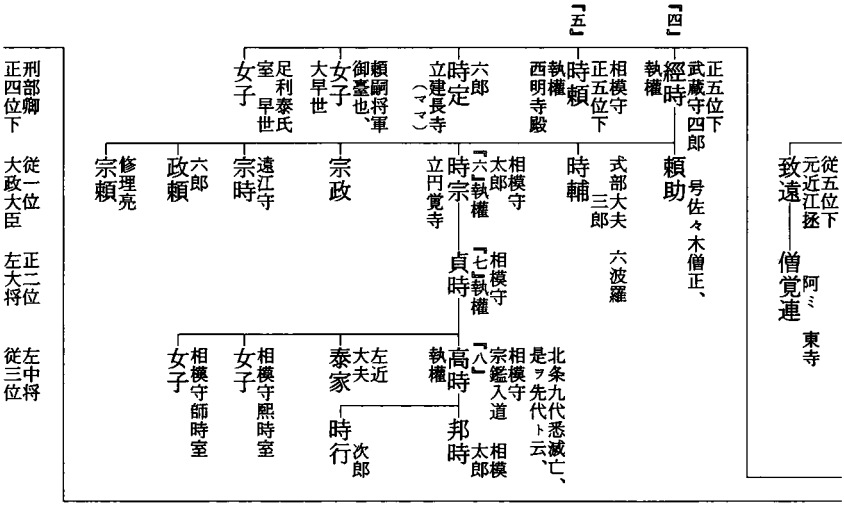
平氏系圖

- 【●】桓武天皇　人王五十代帝　諱山部　四十六歲即位、七十才崩御、三月十七日
  - 白壁天皇第一王子、母正一位高野乙継女、贈皇后、
  - 【一】太夫人
    - 御笠聽聲車、仁壽三年六月四日崩御、六十八、
    - ○葛原親王事也、　薨
  - 平城天皇
  - 嵯峨天皇
  - 淳和天皇
  - 伊豫親王
  - 葛原親王　一品式部卿　母参議従三位丹波真人長野女
    - 佐味親王
    - 賀陽親王
    - 伊豆内親王
    - 大野親王
    - 葛多親王
    - 高津内親王
    - 葛井親王
    - 仲野親王　式部卿
      - 宣子内親王
      - 大田親王
        - 班子女王　宇多国母
        - 坂本親王
        - 好風　左中将
          - 貞文
        - 良峯安世　大納言
          - 遍昭　号花山僧正、歌人
            - 素性法師　俗名左近将監利玄　歌人
          - 高忠内親王（志）
            - 經成
        - 朝原内親王
        - 安濃内親王
        - 甘南備内親王
        - 桂子内親王
        - 萬子内親王
        - 大宅内親王
        - 順子内親王
        - 純子内親王
    - 大納言　右大将民部卿
      - 高棟王　正二位
        - 惟範　中納言　従三位
          - 時望　頭中納言　従三位
            - 真村　伊勢守　従四位下
              - 親信　因幡守　正五位下
                - 行義　武蔵守　従四位下
    - 無官無位
      - 高見王
- 【●】
  - 高望王　上総介　従五位下　鎮守府将軍
    - 宇多院御宇寛平二年五月十二日始賜平氏始、（姓カ）


鎮守府将軍
良将
イ持
従五位下
上総介
良正
鎮守府将軍
常陸大掾
良望
従五位下
改国香
天元二年
五月卒六十九常陸
貞盛
平太陸奥守
従四位下
鎮守府将軍
陸奥権守
繁盛
将軍
吉盛
瀧口字相馬小二郎
将門
号小田原、
御厩三郎
将頼
尼也、
如蔵
字章原四郎
将平
将種
北条四郎
従四位下
上総介
維衡
常陸守
前肥前守
維将
実繁盛子
土之使従
四位上
前上総介
維時
正五位下
越後守
正慶
出羽守
四従五位下
頭正四
安房守
左馬権
正衡
出羽守
位下
讃岐守
正盛
一出羽守
正廣
二
貞秀
三
季衡
上総介
直方
出羽介
城九郎
助国
法師
聖家
義家義
女子
光母
上野介
上総介
維方
北条祖
四郎大夫
時方
北条介
郎大夫
時兼
北条四
郎大夫
時家
伊豆大介


相模介
将文
号八郎君、
将兼
号九郎君、
将武
将成
将柄
将為
『一』
後遠江守
執権
時政
頼朝御舅
執権始
『二』
北条三郎
宗時
頼朝出張時打死、
右大将頼朝室
女子政子
号二位尼、
頼家実朝母
従四位下
右京大夫
陸奥守相
義時
小二郎号江馬、
執権
『三』
泰時
武蔵守
正四位下
修理亮
時氏
従四位下
相模守
時房
大佛元祖
修理大夫
従五位下
政範
左馬頭
武蔵右衛門佐源朝
女子
政室
足利上総介室
女子左馬頭義氏
母
阿野法橋全成妻
女子
畠山重忠室
名越遠江守
朝氏
一条中将実雅
女子
室
相模守
重時
左京大夫
政村
七郎
尚村
足利義氏室
女子
時実
三浦泰村室
女子
女子
公義
五郎号亀谷殿、


良兼
陸奥大拯
従五上
公雅
前武蔵守
従五位上
号六郎大夫、
公連
公元
致秋
従五下
出羽守
一
致成
従五下
元瀧口
四
致頼
元備中拯
五
長保元年
依与維衡、
合戦事
配流壱岐、
国寛徳
八年六十八
致光
従五位
六大宰大監
致任
前石見守
公致
致道
公親
公経
公範
致経
二
字大夫
前左衛門尉
致俊
親致
左衛門尉
女子
河野四郎通信妻
女子
大岡判官時親妻
女子
三条大納言實宣室
法師室
女子
宇津宮弥三郎頼綱
時尚
七郎
女子
稲毛三郎重成法師妻
有時
大炊助
女子
實泰

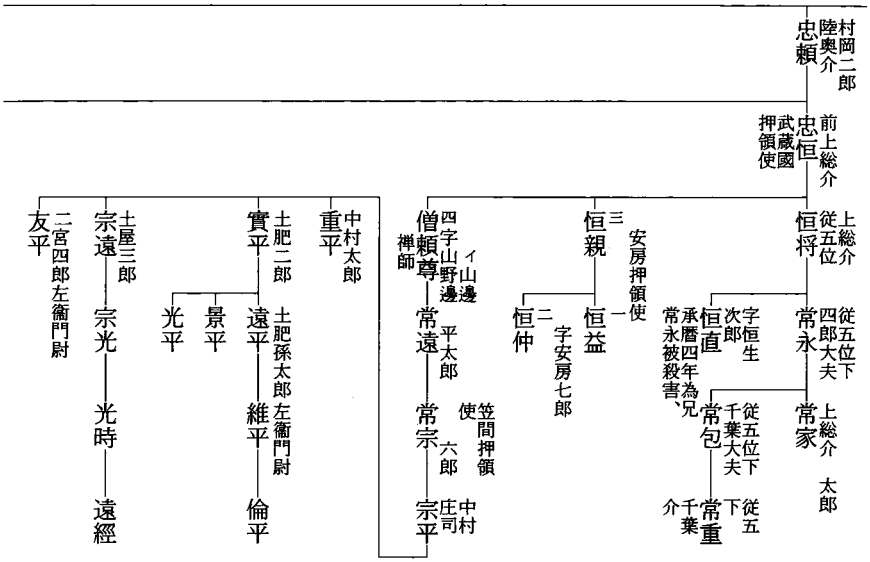

刑部卿
正四位下
大政大臣
従一位
左大将
正二位
従三位
左中将
致遠
従五位下
元近江拯
僧覚連
阿ミ
東寺
「四」
経時
武蔵守四郎
正五位下
執権
頼助
号佐々木僧正、
「五」
時頼
相模守
正五位下
執権
西明寺殿
時輔
式部大夫
三郎
六波羅
時定
六郎
立建長寺
(ママ)
頼嗣将軍御臺也、
女子
大早世
足利泰氏室早世
女子
時宗
相模守
太郎
「六」執権
立円覚寺
宗政
宗時
遠江守
政頼
六郎
宗頼
修理亮
貞時
相模守
「七」執権
高時
北条九代悉滅亡、是ヲ先代ト云、
相模守宗鑑入道
「八」
執権
泰家
左近大夫
女子
相模守熙時室
女子
相模守師時室
邦時
相模太郎
時行
次郎

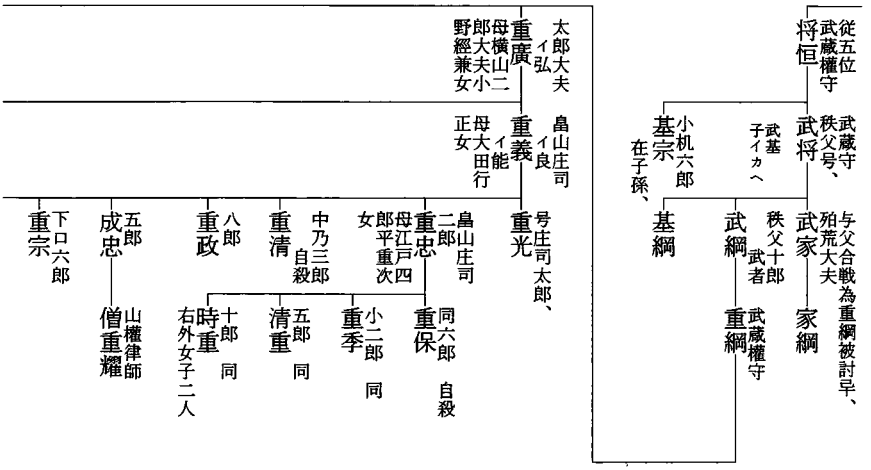
- 忠盛（内昇殿、院執柄）
  - 清盛（法名浄海）
    - 重盛（号小松、内大臣、法名浄蓮）
      - 維盛（法名浄圓）
        - 妙覚
        - 六代
      - 資盛（右中将）
        - 盛綱
      - 清經（左中将、従四位下）
      - 有盛（左少将、従四位下）
      - 忠房（侍従、丹後守）
      - 師盛（備中守、従五位下）
      - 宗實（侍従、従五位上）
    - 基盛（右衛門尉、従四位下）
      - 行盛（左馬頭、正五位下）
    - 宗盛（内大臣右大将、従一位）
      - 清宗
      - 能宗（従五位下）
      - 宗親
  - 家盛（左馬頭、従四位下、早世）

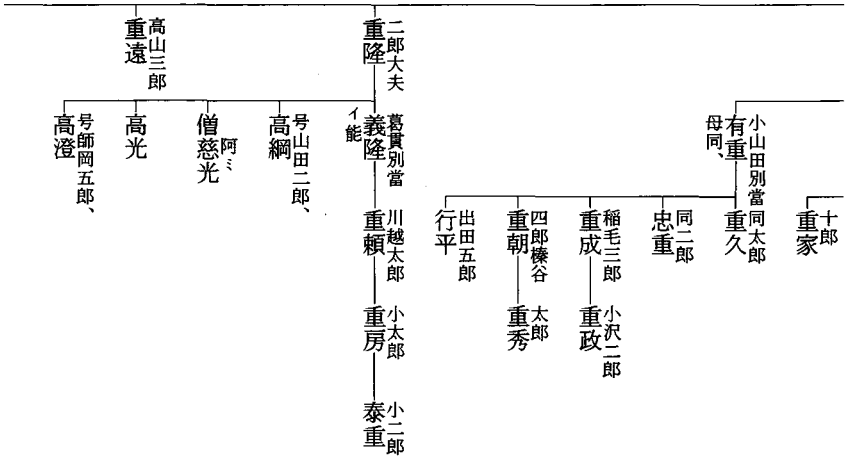
- 頼盛（大納言正二位、号池殿、）
  - 保盛（正三位中宮亮）
    - 頼清
    - 保業
  - 光盛（号八条二位、従二位、左少将）
    - 長盛
  - 為盛（静遍法師、左兵衛佐）
  - 女子八人
  - 良衡
  - 清邦（丹後守）
  - 清房（淡路守）
  - 清貞（尾張守）
  - 知度（三河守、従五位下）
    - 知忠（伊賀守、従五位下）
    - 知邦
  - 重衡（号本三位中将、）
    - 増盛（法師）
  - 知盛（中納言）
    - 知明（左馬頭、従五位上）

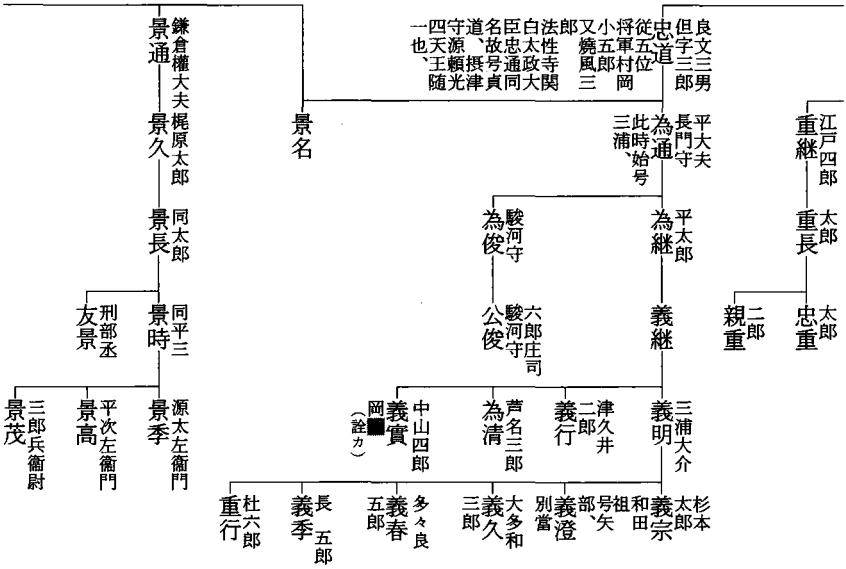
- 貞正（伊与守）
  - 女子
  - 忠度（薩摩守 正四位下 歌人）
    - 敦盛（無官大夫 従五位下）
    - 經俊（刑部卿）
  - 經盛（参議正二位修理大夫）
    - 經正（但馬守 正四位下）
    - 女子（修明門院母）
    - 教子（宗盛公室）
    - 業盛（蔵人）
    - 教經（能登守 従五位上）
    - 忠快（中納言律師）
    - 國盛 ― 女子
    - 教盛（従二位 門脇中納言）
      - 通盛（越前守 従三位）― 通衡
      - 女子（中納言保家母）

- 忠政（従五位下 右馬助 平馬助）
  - 女子（判官代親路室）
  - 長盛（讃岐院蔵人）（二）
    - 皇后亮
  - 忠綱（三）
    - 皇后先生
  - 正綱（四）
    - 左大弁
  - 通正（五）
    - 平九郎
  - 國正（一 逃脱）― 正方 ― 有頼 ― 維頼
  - 時盛（稲荷左大臣）
- 良緜（鎮守府将軍 従五位下）
- 良文（村岡五郎 鎮守府将軍）
  - 良兼（下総介 従五位 武蔵權守）― 經邦
  - 良氏（七男）
  - 良持（在子孫、）
- 忠輔


村岡二郎 陸奥介 忠頼
前上総介 武蔵國押領使 忠恒
上総介 従五位 恒将
従五位下 四郎大夫 常永
上総介 常家 太郎
字恒生 次郎 恒直
常永被殺害、 承暦四年為兄
従五位下 千葉大夫 常包
従五 千葉介 常重
三 安房押領使 恒親
一 恒益
二 字安房七郎 恒仲
四字山野邊 イ山邊 僧頼尊 禅師
平太郎 常遠
笠間押領使 常宗 六郎
中村庄司 宗平
中村太郎 重平
土肥二郎 實平
土肥孫太郎左衛門尉 遠平
光平
景平
維平
倫平
土屋三郎 宗遠
宗光
光時
遠經
二宮四郎左衛門尉 友平


従五位 武蔵權守 将恒
武蔵守 秩父号、 武将
武基子イカヘ 基宗 在子孫、
小机六郎 基綱
秩父十郎 武者 武綱
与父合戦為重綱被討早、 殆荒大夫 武家
武蔵權守 重綱
家綱
太郎大夫 イ弘 重廣
母横山二郎大夫小野經兼女
畠山庄司 イ良 重義
母大田行正女
イ能
号庄司太郎、 重光
畠山庄司二郎 重忠
母江戸四郎平重次女
同六郎 自殺 重保
小二郎 同 重季
五郎 同 清重
十郎 同 時重
右外女子二人
中乃三郎 自殺 重清
八郎 重政
五郎 成忠
山權律師 僧重耀
下口六郎 重宗

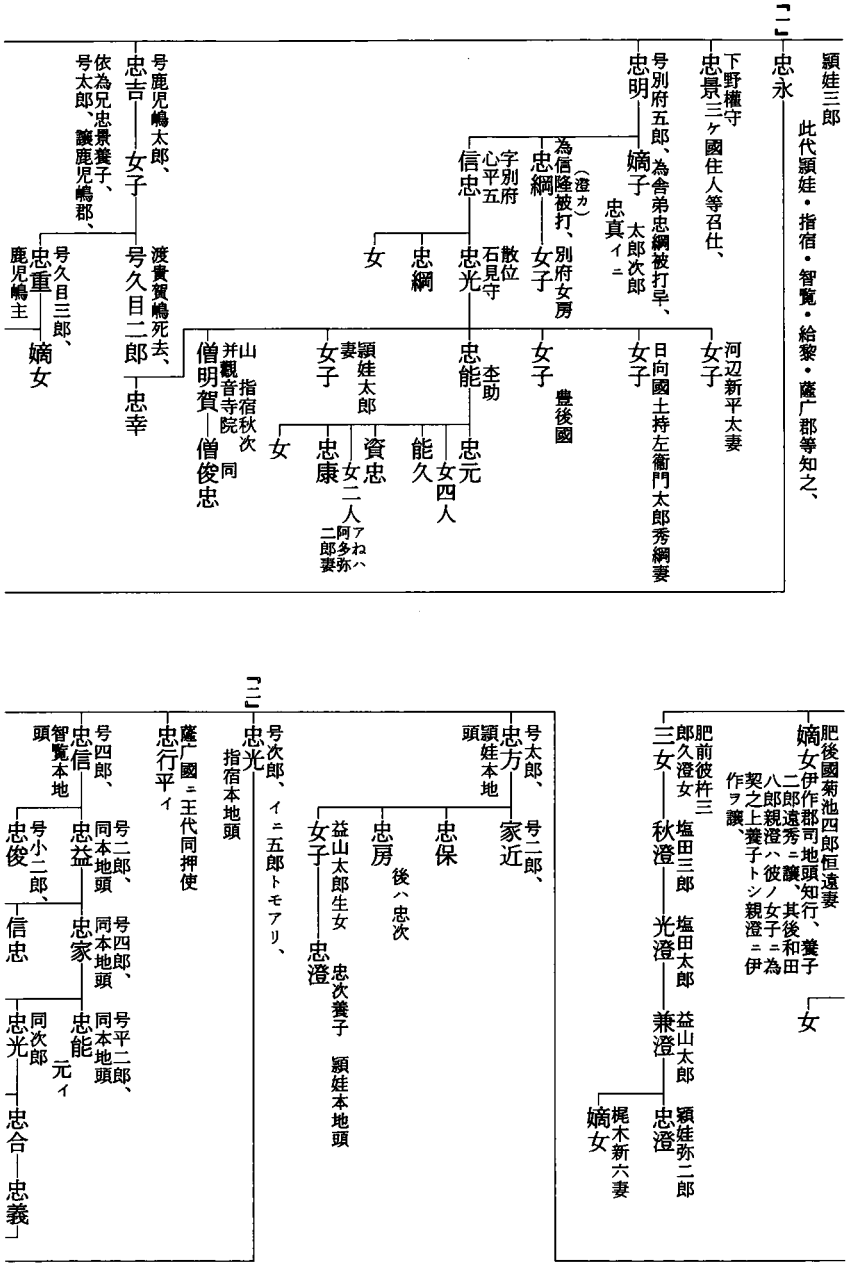

重遠 高山三郎
重隆 二郎大夫
高澄 号師岡五郎、
高光
僧慈光 阿〻
高綱 号山田二郎、
義隆 葛貫別當 イ能
重頼 川越太郎
重房 小太郎
泰重 小二郎
行平 出田五郎
重朝 四郎榛谷
重成 稲毛三郎
重秀 太郎
重政 小沢二郎
忠重 同二郎
重久 小山田別當同太郎
有重 母同、
重家 十郎

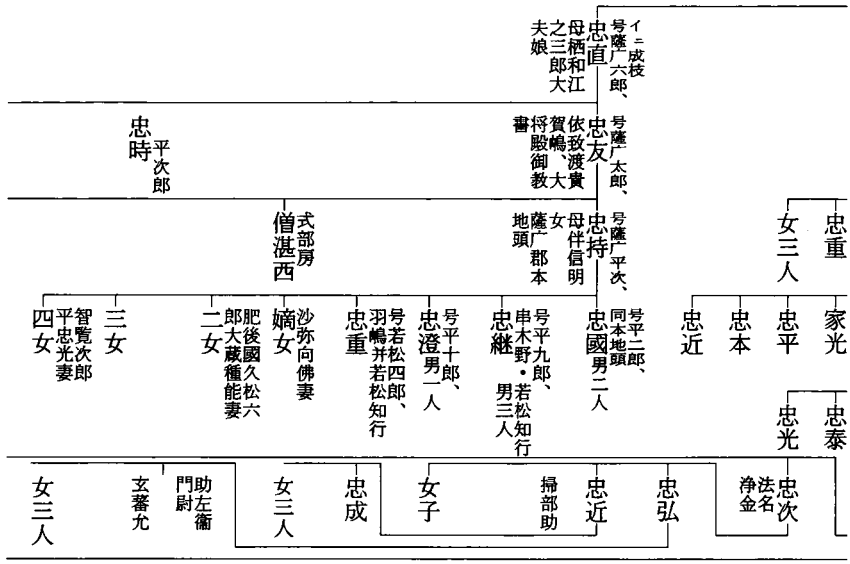

景名
景通 鎌倉權大夫
景久 梶原太郎
景長 同太郎
景時 同平三
友景 刑部丞
景季 源太左衛門
景高 平次左衛門
景茂 三郎兵衛尉
忠道 但字三郎 良文三男
一四天王也、守源頼光 道摂津 名故号貞 臣忠通同 白太政大 法性寺関 郎又 小五郎 将軍村岡 従五位 焼風三
為通 長門守 平大夫 此時始号三浦、
為継 平太郎
為俊 駿河守
公俊 駿河守 六郎庄司
義継
義明 三浦大介
義宗 杉本太郎 和田 祖号矢部、
義澄 別當
義久 大多和三郎
義行 津久井二郎
為清 芦名三郎
義實 中山四郎 岡■（詮カ）
義春 多々良五郎
義季 長五郎
重行 杜六郎
重継 江戸四郎
重長 太郎
忠重 太郎
親重 二郎

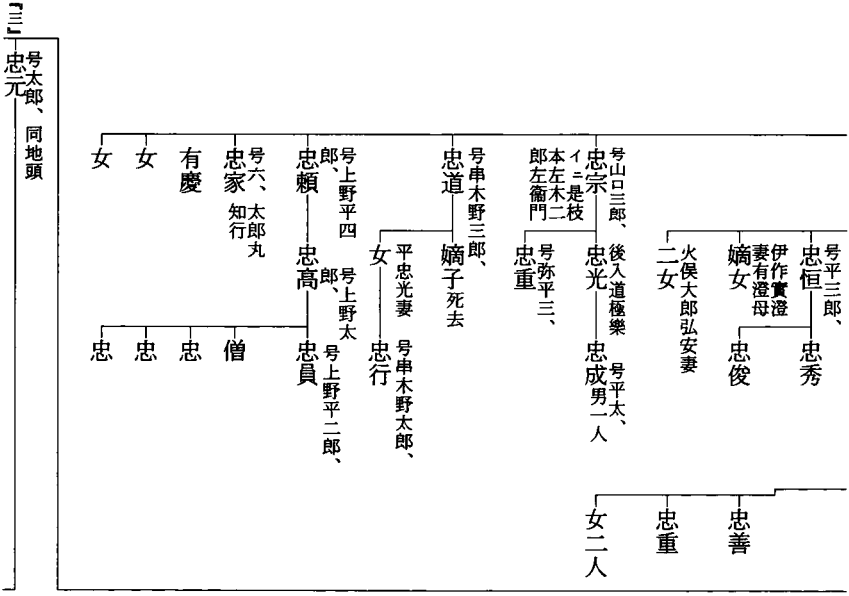
- 輔孝
- 景村（鎌倉四郎 太郎）
  - 景明
    - 景宗（号大庭權守、懐嶋平權守）
      - 景義
        - 景親
    - 景弘（長尾二郎 同新六）
      - 貞景
        - 景基
- 景成（鎌倉權五郎 イ政）
  - 景經（中宮大夫）
    - 義景（左衛門尉）
      - 明義（長江四郎 太郎）
        - 明信
- 貞時（流人 号伊勢平次、異本伊作平次 イ佐 イ言）
- 宗行（大宰平小貳 平權守）
  - 助任（安王寺次大夫）
    - 成任（瀧口平季任子三之吳説）
- 良元（七平三大宰大監物 イ貞基）
  - 兼輔（平五大夫）
- 季基（五平太 同監物）
  - 兼輔（イ 平五 従五位）
    - 兼重（神崎平太郎）
      - 成道（太郎）
        - 成兼（莫祢弥太郎）
          - 成秀（従五 位下）

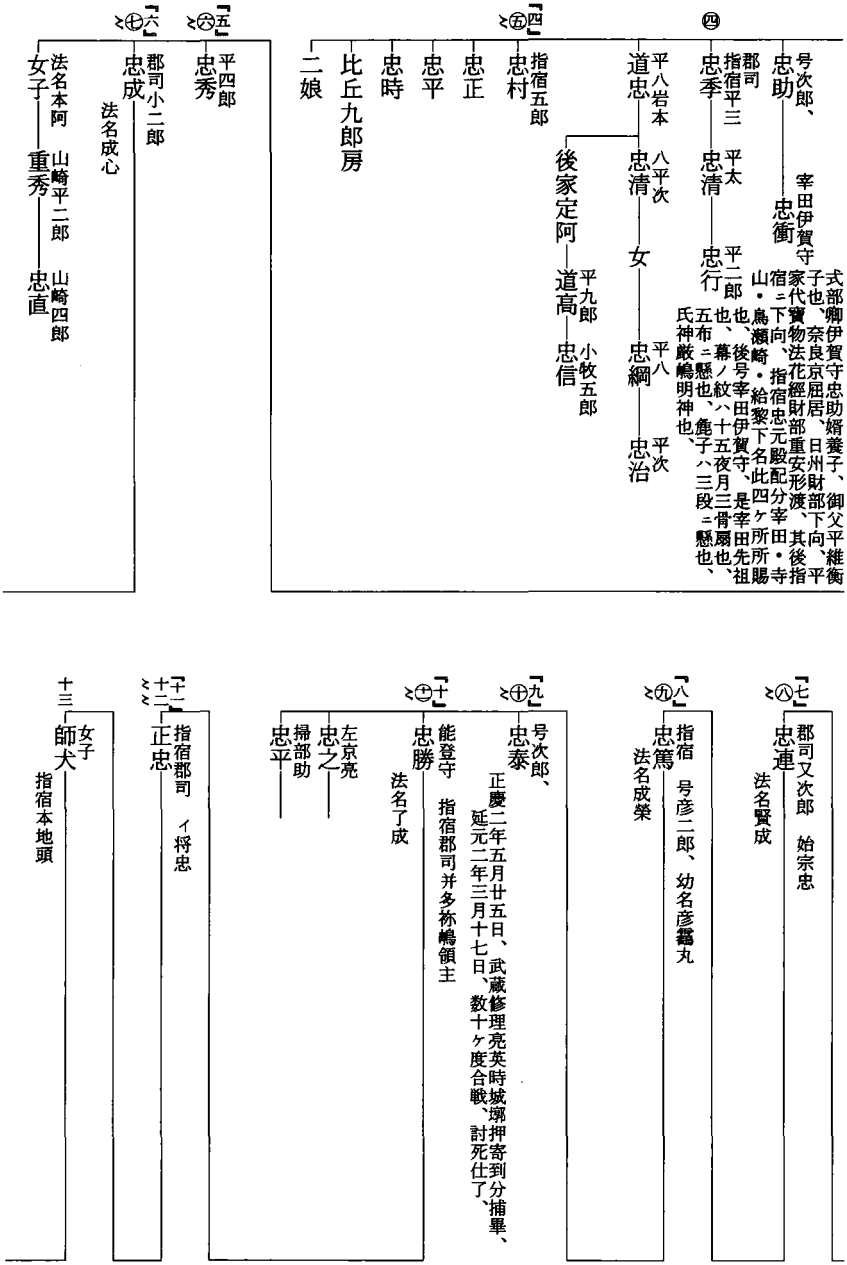
- 良道（平次郎大夫）
- 季兼（従五位下 同五郎）
  - 兼時（五郎）
    - 成次（二郎 湯浦別府讓与、）
- 良忠（隠岐守）
- 良宗（平判官）
  - 良高（二郎大夫）
    - 良門（平太夫）
      - 良包（二郎大夫）
        - 良長（兵衛尉）

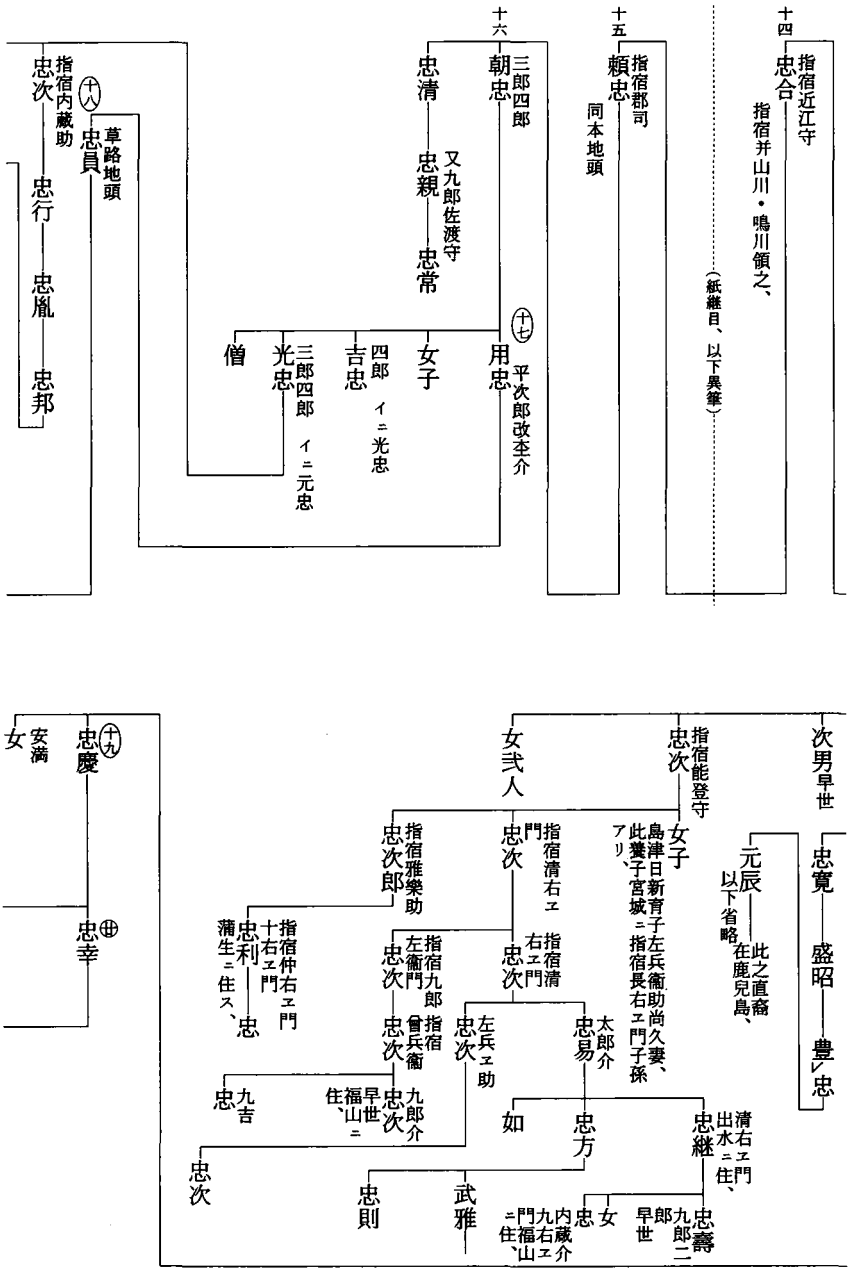
- 道房（為舎弟平權守忠景被討早、）
  - 道平（号平次郎、河邊本地頭）
    - 道綱（号平太、）
      - 久道（頼朝大將殿御時、打從貴賀嶋畢、）
        - 信道（承久兵乱之時、依令京方蒙御勘當、河邊沒收、）
      - 女
      - 女
      - 二男（号平二郎、死去早、）
      - 道秀（号平三郎、男一人女人）
- 有道（多祢平次）
  - 有平
    - 俊平
      - 信道（新平太）
      - 俊平
  - 道高
- 景道（二郎）
- 女子（豊後新左衛門尉妻）
- 安通（三郎）
- 女子
- 僧
- 女子（鹿児嶋五郎時祐妻）
- 女子（字五郎女子）
- 忠隆（忠継養い子）


「二」
頴娃三郎
忠永
此代頴娃・指宿・智覧・給黎・薩广郡等知之、
忠景 下野權守 三ケ國住人等召仕、
忠明 号別府五郎、為舎弟忠綱被打早、
嫡子 太郎次郎 忠真イニ
忠綱 為信隆被打、（澄カ）別府女房
女子
信忠 字別府心平五
女
忠綱
忠光 散位 石見守
忠能 李助
女子 河辺新平太妻
女子 日向國土持左衛門太郎秀綱妻
女子 豊後國
女子 頴娃太郎妻
僧明賀 山指宿秋次 并觀音寺院
僧俊忠 同
忠元 女四人
能久
資忠 女二人 アネハ 阿多弥二郎妻
忠康
女
忠吉 号鹿児嶋太郎、
女子 依為兄忠景養子、号太郎、讓鹿児嶋郡、
号久目二郎 渡貴賀嶋死去、
忠幸
忠重 号久目三郎、鹿児嶋主
嫡女
「三」
号太郎、 頴娃本地頭
忠方
家近 号二郎、
忠保
忠房 後ハ忠次
益山太郎生女 女子
忠澄 忠次養子 頴娃本地頭
号次郎、イニ五郎トモアリ、
忠光 指宿本地頭
忠行 薩广國ニ王代同押使 平イ
忠信 号四郎、 智覧本地頭
忠益 号二郎、同本地頭
忠家 号四郎、同本地頭
忠能 号平二郎、同本地頭 元イ
忠俊 号小二郎、
信忠
忠光 同次郎
忠合
忠義
肥後國菊池四郎恒遠妻
嫡女 伊作郡司地頭知行、養子二郎遠秀ニ讓、其後和田八郎親澄ハ彼ノ女子ニ為契之上養子トシ親澄ニ伊作ヲ讓、
女
肥前彼杵三郎久澄女 三女
秋澄 塩田三郎
光澄 塩田太郎
兼澄 益山太郎
忠澄 頴娃弥二郎
嫡女 梶木新六妻


忠直
イニ成枝
号薩广六郎、
母栖和江之三郎大夫娘
忠友
号薩广太郎、
依致渡貴賀嶋、大将殿御教書
忠持
号薩广平次、
母伴信明女薩广郡本地頭
忠重
家光
忠平
忠本
忠近
忠泰
忠光
忠次
法名浄金
忠國
号平二郎、同本地頭
男二人
忠近
忠弘
掃部助
女子
忠成
女三人
助左衛門尉
玄蕃允
女三人
忠時
平次郎
僧湛西
式部房
忠重
号若松四郎、羽嶋并若松知行
忠澄
号平十郎、男一人
忠継
号平九郎、串木野・若松知行男三人
嫡女
沙弥向佛妻
二女
肥後國久松六郎大蔵種能妻
三女
智覧次郎平忠光妻
四女


忠元
号太郎、同地頭
忠恒
号平三郎、
伊作實澄妻有澄母
忠秀
嫡女
忠俊
二女
火俣大郎弘安妻
忠宗
号山口三郎、
イニ是枝本左木二郎左衛門
忠光
後入道極樂
忠成
号平太、男一人
忠重
号弥平三、
忠善
忠重
女二人
忠道
号串木野三郎、
嫡子死去
女
平忠光妻
忠行
号串木野太郎、
忠頼
号上野平四郎、
忠高
号上野太郎、
忠員
号上野平二郎、
僧
忠
忠
忠
忠家
号六、太郎丸知行
有慶
女
女


四
号次郎、
忠助
式部卿伊賀守忠助婿養子、御父平維衡子也、奈良京屈居、日州財部下向、平家代寶物、法花經財部重安形渡、其後指宿ニ下向、指宿忠元殿配分宰田・寺山・鳥瀬崎・給黎下名此四ヶ所所賜
宰田伊賀守
忠衡
郡司指宿平三
忠季
平太
忠清
平二郎也、後号宰田伊賀守、是宰田先祖也、幕ノ紋ハ十五夜月三骨扇也、五布ニ懸也、亀子ハ三段ニ懸也、氏神嶋明神也、
忠行
平八岩本
道忠
八平次
忠清
女
平八
忠綱
平次
忠治
後家定阿
平九郎
道高
小牧五郎
忠信
【四】
指宿五郎
忠村
忠正
忠平
忠時
比丘九郎房
二娘
【五】
平四郎
忠秀
【六】
郡司小二郎
忠成
法名成心
法名本阿
女子
山崎平二郎
重秀
山崎四郎
忠直
【七】
郡司又次郎　始宗忠
忠連
法名賢成
【八】
指宿　号彦二郎、幼名彦鶴丸
忠篤
法名成榮
【九】
号次郎、
忠泰
正慶二年五月廿五日、武蔵修理亮英時城塀押寄到分捕畢、延元二年三月十七日、数十ヶ度合戦、討死仕了、
【十】
能登守　指宿郡司并多祢嶋領主
忠勝
法名了成
左京亮
忠之
掃部助
忠平
【十一】
指宿郡司　イ将忠
正忠
女子
師犬
指宿本地頭
十三


十四
指宿近江守
忠合
指宿并山川・鳴川領之、
（紙継目、以下異筆）
十五
指宿郡司
頼忠
同本地頭
十六
三郎四郎
朝忠
忠清
又九郎佐渡守
忠親
忠常
十七
用忠
平次郎改本介
女子
四郎
吉忠
イニ光忠
三郎四郎
光忠
イニ元忠
僧
十八
草路地頭
忠員
指宿内蔵助
忠次
忠行
忠胤
忠邦
次男早世
忠寛
盛昭
豊ゝ忠
元辰
此之直裔
以下省略
在鹿兒島、
指宿能登守
忠次
女子
島津日新育子左兵衛助尚久妻、
此糞子宮城ニ指宿長右ヱ門子孫
アリ、
女弐人
指宿清右ヱ
右ヱ門
忠次
指宿雅樂助
忠次郎
指宿九郎
左衛門
指宿
曾兵衛
忠次
指宿清
忠次
太郎介
忠易
左兵ヱ助
忠次
忠方
如
忠継
清右ヱ門
出水ニ住、
忠次
九郎介
忠次
早世
福山ニ
住、
九吉
忠
指宿仲右ヱ門
十右ヱ門
忠利
蒲生ニ住ス、
忠
武雅
忠則
忠次
忠喬
九郎二
早世
女
忠
内蔵介
九右ヱ門
福山ニ
住、
十九
忠慶
安満
女
廿
忠幸

忠次

廿一
- 指宿右馬允　后丹后守
- 忠家　弘治元年乙卯正月廿二日夜、為嶋津貴久被討早、利円常貞
- 指宿摂津守
- 忠

廿二
- 指宿右ヱ門兵衛　後丹後守
- 忠常　法名養山宗功
- 指宿勘解兵衛
- 忠次　於身津ノ山討死、
- 指宿刑部左ヱ門
- 忠次
- 指宿平次郎　養子
- 忠盛　百次ニ住、
- 指宿傳兵衛
- 忠清　指宿長左ヱ門
- 女子
- 太郎右ヱ門
- 狩野介イニ義又能賀之助
- 忠満
- 忠十　諸左ヱ門
- 忠易　福山ニ住、
- 帖所仁左ヱ門成養子仁左ヱ門ト子孫在栗野ニ、

廿三
- 指宿右ヱ門兵衛　後ニ左近兵ヱ尉
- 忠廣　法名松庵永椿庵主
- 指宿權之介
- 忠賢　法名常栄

廿四
- 指宿四郎次郎　改十郎右ヱ門尉　母者箕輪伊賀守女
- 忠利　朝鮮国殿仕畢、法名傑心昌英大居士
- 重隆　軍四郎　後改字都弥七左ヱ門
- 重成　伊地知狩野介　幼名八郎次郎　箕輪伊賀守養子
- 女子　面高祐泉妻　母者勝目　女
- 女子　有屋田右ヱ門尉久氏妻　母者川野才左ヱ門通次女

廿五
- 指宿左近兵ヱ尉　母者同　幼名長千代丸
- 忠眞

廿六
- 指宿四郎次郎　幼名長鶴丸　母者米良九兵ヱ尉女
- 忠尭

廿七
- 指宿長四郎　改十郎右ヱ門尉　母者大脇孫兵ヱ尉女
- 忠　母者右同

指宿四郎七
忠
田原弥次郎妻
女子
母者中山勘右ェ尉女
指宿長四郎　改四郎次郎
元慶
母者中馬仁右ェ門尉女
土橋伊右ェ門尉妻
女子
母ハ谷口与右ェ門尉女
指宿長四郎　惣領おひの
元跡取、
早世　四郎次郎元方

廿八
指宿鉄之助　鉄左ェ尉　改四郎次郎
元方
母者中馬仁右ェ門女
有屋田治兵ェ妻
女子
母ハ田原十右ェ門尉女

廿九
指宿茂平太　改十郎右ェ門尉
元武
母ハ長井七兵ェ尉
河上笹右ェ門尉妻　離別
女子
母ハ右同、
指宿彦次郎　后ニ十郎右ェ門　四郎次郎　組頭・年寄ニ
補ス、母ハ轟木為右ェ門女、妻ハ中村源太左ェ門娘ヲ娶、

三十
文化十二乙亥正月十二日卒、法名春山道栄居士
元貞
光明和四丁亥年九月廿八己丑日未ノ刻誕生、
初メ鉄之助　后十助　母ハ右同、妻ハ有屋田仲右ェ門娘
ヲ娶、
光智
明和七年七月誕生、天保二辛卯九月十一日卒、法名自
本自性居士
母ハ有屋田仲右ェ門娘
女子
比志島三右ェ門江嫁入、
光房
寛政十一甲申四月十五日誕生、母ハ右同、妻ハ面高真
性院娘娶、元貞依无直子養子家督ス、

卅一
初メ彦治　后十郎右ェ門　母ハ右仝、組頭・普請見舞ニ
補、
元房
天保五甲午年十月、先祖忠利・忠貞高麗ニ陣立いたし
候、鎧其外品々等致分取持傳候、四季之絵拾弐枚民部
御用ニ相成、元房持参仕御預リ、御地頭御家老島津但
馬殿御方へ差出候処、則御前江被差出候、然処此節迄
者御用ニ不成来、當人江被御預置段申聞置様、その旨
致承知持帰致格護候旦、
初代忠利ヨリ当代元房迄、世代并役職次第取調候処、
八代ニ相成候、尤役職之儀ハ略ス、

女子
面高真壽院ニ嫁、

卅二 元治
初メ彦次郎　後ニ鉄左エ門四郎次郎　組頭ニ補ス、
文政七申六月十七日誕生、
母ハ面高真性院娘　妻ハ玉利周助娘ヲ娶、

三十三 元東
幼名鉄千代　后ニ李之助　嘉永五子六月廿九日子刻誕生、
母ハ玉利周助ノ娘
明治元年戊辰一月、討幕ノ勤王派タル島津久光仝茂久ノ軍ニ従テ東北マデ轉戦ス、戊辰役后ニ朝廷ヨリ米六石ヲ下賜セラル、仝十年役ノ際ハ、薩軍ニ参加シテ田原坂激戦ニ臨ミ傷ヲ負フ、戦后ニ宮崎縣巡査ヲ拜命シテ宮崎清武ニ勤務シ辞職ス、尓来養蚕業ニ志シ、之カ教師トシテ鹿児島縣肝属郡高山村ニ招聘サルレル、彼地ニ此ノ為メ往クコト七箇年ニ亘レリ、
妻イク子ハ高岡村内山ノ士族野元　ノ娘
昭和十三年三月一日、高山町ノ有志津曲喜太郎、日高勇之介両氏ノ直話ニ「往年本縣ノ紹介ニ依リテ、当町ヘ養蚕教師トシテ来任サレツ、アリシ元東氏ハ、古武士ノ典型トモ云フベキ風格ヲ備ヘタル、有能ノ士デアツタ」云ヘト熊本人沢田延音ニ伝ヘタリト云フ、高山町ノ両氏ノ邸内ニ現存セル元東密柑木ノ起源モマタ以テ知ルベシ、

幼名　鉄之助　后ニ壽助　安政二辰正月元旦誕生、母ハ右仝
元超
高岡村字尾谷ノ士族兒玉庄右エ門ノ養嗣子トナリテ入ル、明治十年役ノ破リニ、兄元東ト共ニ此ノ役ニ出テ奮戦シ、熊本縣飽託郡ミカンニ於テ戦歿ス、

鶴恵
木脇村字堂ケ峰ノ人中山信太郎ニ入嫁ス、
タケ

（紙継目、以下異筆）

ミツル
明治　年九月廿一日、元東長女トシテ誕生、
明治　年四月九日卒、

三十四 朔郎
明治二十九年十二月一日、高岡村字
内山長野安ニ長男トシテ誕生、

○三一　指宿氏勲功書上（巻子）

忠家度々分捕ス

●指宿忠常カ息右馬允忠家ハ、出水ヨリ薩摩ノ吉田ヲモ格護ノ折節ナルニ、吉田衆弟子丸幡摩（ママ）守居城ヘ夜中ニ切岸ヲ忍上リ、彼弟子丸カ家内ニ忍入、幡摩息寝間ニ入テ彼子ヲ起シ、御方父幡摩守殿ヘ所用有トソサヽヤギケル、然ル間則父方ヘ告タリケル、幡州モ是ヲ聞テ具足仕合テ出合ケル間、右馬允申ケルハ、世ノフリニ随ツテ當時出水方ヘ成セラレ侍ル、併鹿児嶋ヘ御奉公

被成度御存分モヤ候ハン、然ハ御屋形ヱ指宿取合セ余儀有間敷ノ条、弟子丸殿於納得者、吉田ノ亘同心ニ可被成カ、為和談ニ忠家忍参ルトソ申ケル、弟子丸聞テ、其儀本意ニテハ侍共、此中御屋形様ヘ雖致御奉公、所ノナリニ随イ、出水エ罷出ル、然處ニ亦鹿児嶋ヘ出テ、三度主人ヲ可見奉亘偏ニ難叶、其上指宿殿故ニ幡摩腹ヲ伐侍ラン亘不及了簡通ヲ被申ケル、忠家其時申ハ、夫ハ何亘ソト尋ル、弟子丸被申ケルハ、指宿殿ヲカヘシテハ、幡摩身命難遁カルヘキトソ被申ケル、右馬允答テ云、吉田ノ城ノ亘ハ人間ノ忍入亘ニハ非サレ共、是迄不思議ニ忍参ルナリ、角参ルヨリハ迚モ遁ルヘキ道ニ非ス、忠家カ命惜ニ非ス、急キ首ヲ刎テ出水ヘ被為持参ヨト無據申シカハ、弟子丸聞テ必シモ左様ニ比興ヲ構ヘキニモ非ス、此度ハ是非被歸レトシキリニ云ケル間、夫ヨリ彼鰐ノ口ヲ遁レテ歸リケルニ、幡州モ塀ノキワマテ被送ケル間、城ノ岸ヲ下シカ、亦立返リ弟子丸ニ申ケルハ、我難所ノ岸ヲ下リナハ、明日ニ跡見得テ幡摩殿御為宜シカラシト申キ、弟子丸夫ハ心得タリ、ハヤ夜モ明方ナリ、急キ歸レト被申ケル間、漸難所ヲ凌テ帰ル、

●其以後吉田城ヘ人数ヲ被押寄攻玉フ剋、右馬允忠家亘河上上野守・中馬大蔵丞両人同心ヲ以テ發向ス、於城口数剋火花ヲ散シテ手痛ク攻戦フ、然ルニ忠家刀疵ヲ十三ケ所迄蒙リテ堀底ニ切落サレ、已ニ身命ヲ失シカ、亦運ヤ尽サリケル、戦散シ夜ニ入シカハ少シ心ヲ取覚、脇指ヲ拔テ堀ノ岸ニツキ立テ起アカリ、誠ニ危キ身命ヲ助カルコソ不思議ナリ、

●然以後邪(祁)答院衆北村ノ城ヲ渡シ上可申ノ間、北村表ニ御發足可被遊旨ヲ申上、已ニ人質ヲ両人迄着上ル、依其　貴久公弘治元年乙卯正月廿二日ノ夜、人数ヲ被召列北村ヘ御出勢、城ノ近邊ニ御出馬アル否ニ城ノ番屋ヲ燒タリケル、是ハ何タル亘ニヤト申所ニ、両人ノ人質共逃散タリ、然ルヲ爰カシコト尋ル騒動ノ紛レナレハ、御馬廻人少ナリシカハ、是ヲ兼テ巧謀シ企ナレハ、邪答院・菱刈衆一度ニドツト伏草ヲ起ス間、御馬廻ノ少人数ニテ難成其功カリシ亘ナレハ、御引退玉フ処ニ

敵競来リ、高牧ニ付上テ御馬ノ鼻ヲ狩俣ニテ射割タリ、御難儀ニ及シカハ、右馬允忠家亃、其比ハ丹後守ト申セシカ、甲ヲ拔テ申上ケルハ、今宵ノ御引足已ニ危ク罷成間、於忠家者菱刈・邪答院ノ衆能存タルノ条、彼高牧坂ノロニ返シ合セ家名ヲ名乗テ相防カハ、定テ敵無左右近付得シ、然ラハ心易モ御引執有ランカ、御暇ヲ玉ワリテ御奉公ヲ遂侍ラント申上シカハ、　貴久公被聞召、是非於此儀ハ思ヒ留テ御供ヲ申ヘシ、又ハ能キ行モ侍ラント、返スカヘスモ御上意重カリシカトモ、シキリニ御暇ヲ申上テ、高牧坂ノロニ馳向フ所ニ、御中間家村早左衞門尉モ追付供ス、去間大音ヲ挙テ申ケルハ、指宿丹後守忠家坂ノロニアリ、吾ト思ワン人々ハ寄テ打捕レ者共ト旬リケル、菱刈・邪答院ノ人々モ兼テ手並ヲ知タル亃ナレハ、左右ナク不近付、去共寄懸〻〻已ニ七ケ度迄相戦、其折節御中間黒田番左衞門尉ト申者ニテ御上意有ケルハ、慕可参由辱趣シキリニ有シカトモ、御暇申上テ向シ上ハ、戸ヲ坂中ニ曝サンコト社望ナレト申切テソ戦ケル、河内山田ノ地頭村尾肥前守ナト、名乗テ、其外数多寄付〻〻戦ケルホトニ、十八度目ノ戦イ夜明方ニ及テ、終ニ忠死ヲ遂タリケル、家村早左衞門尉モ戦死ス、然ル間　貴久公無難其場ヲ御引退玉フ、其時御供衆ハ伊集院下野守父子・上原長門守、御中間ニハ黒田番左衞門尉ト申也、

忠常両度粉骨之亃

●指宿右馬允忠家カ嫡子ヲ右衞門兵衞尉忠常ト申キ、然ルニ弘治三年丁巳卯月十五日、北村城麓百町田間麦作薙ノ折節、伊集院美作守・新納越後守父子・井尻和泉守・河野江兵衞尉彼五人、右衞門兵衞尉同心ヲ以テ城ノ腰迄攻登ル、其時忠常申ケルハ、各於被見次ハ本城ノ垂城戸ノ内ニ攻入、一戦ヲイタスヘキ旨申シカハ、五人何レモ可被見次旨返答也、忠常是ヲ幸ニ粟田口二尺三寸ノ拔以テ、遙々高キ城ニ馳登リ、垂ノ上合子ヲ押明、下ヨリクヾリ入トヒトシク、邪答院長野ノ地頭西郷宮内左衞門尉着合所ヲ、甲ノ真向ヲ切割、其侭打伏首ヲ捕、甲ヲハ取テ合子ノ上ヲ投越シカハ、落行所ヲ伊集院美作守是ヲ取ル、彼西郷カ頸ヲハ忠常手ニ持

テ、又合子ヲ押明テクヾリ出テ引退ケル、誠ニ邪(祁)答院衆又ハ長野ノ地頭衆、衆中、其外岡村圖書頭ナト、云剛ノ者共立並テ戦シ中ヨリ不思議ナル哉、鰐ノ口ヲ遁テ引退叉無比類、然以後彼衆御幕下ニ属セシ時、何モ被申シハ、其剋敵味方互ニ見物シテ後仰天有ツル由、邪答院衆又ハ岡村ナトモ度々物語ヲ申セシナリ、忠常叉後ニハ丹後守ト申也、

●其以後永禄六年(五カ)癸亥六月三日、横川城ヲ被攻折節、彼横河ニ無双平河筑後守ト云シ者、三尺七寸大刀ヲ拔以テ、名乗懸テ伐テ出ル、此イキヲイニヤ恐ケル、敢テ近付人モナシ、然ル間丹後守忠常板城戸口ニ馳向ヒ、二尺三寸ノ禅門染河ト云刀ヲ以テ鎧ノ袖頭ヲ切、即時打伏テ頭ヲ取、其外武者二人打捕ル、今一人北原新助ト云シ城主ヲ伐シカトモ、本田因幡(親貞)守先鑓ニツカセラレタルニヨリテ、彼頸因幡守ノ打捕ニ成ニケリ、角方々所々ニテ合戦分捕忠常高名ヲ挙タリケル、

忠廣於所々高名之叉

●指宿忠常カ嫡子左近兵衛尉忠廣叉、天正二年甲戌正月、肝付衆對　義久公御敵ヲ被申、伊東方ト引合、日向表ヲ相催シ下大隅・鹿児嶋ヘ兵船ヲ以テ相鮥、其説相聞エシカハ、帖佐ヨリ小船壱艘ニ勝目加賀守・敷根越中守・南雲殿以上六人、同心ヲ以相續ク、然所ニダキカ水ニテ兵船ニ行合、彼ハ大勢ニテ相戦シニ、忠廣一人ナキサニヲリクタリ相防、然ニ田ノ上二介ト書印タル矢三筋被射付、已ニ危リシ所ニ南雲・勝目・敷根彼三人衆モ汀ニヲリ下リ、忠廣ヲ退取リシ故ニ、誠危所ヲ遁レタリキ、

●其以後天正モ五年ニナル丁丑年六月十九日、伊東三位(義祐)入道飫肥ヨリ櫛間ヘサシ懸リ、河崎紀伊守ニ人数ヲ相付、櫛間ノ内湊村ヲ打破リ放火シ被引退折節、忠廣叉本庄ト云所ニ有合夫ヨリ馳續ク、然ハ伊知地(マヽ)治部左衛門尉ニ行合、忠廣申ケルハ、御方於見次ハ敵ニ付送見侍ラント申キ、治部左衛門尉モ同意ス、去間忠廣其侭付懸リ、殿ニテ調退キシ河崎紀伊守ニ馳懸リ、無比類鑓ヲ合セ相戦、則紀伊守ヲ打捕、伊地知治部左衛門尉モ同前ニ相働、敵ヲ数打捕、就其伊東勢敗軍スル故、

大勢追懸数百人被打捕、其比嶋津圖書頭串良表ニ御座有、然ルニ夜中ヨリ貝ヲ吹續キシカハ、其日十三里ノ道ヲ懸付被成、御大将ヲ被成也、則新納縫殿助役者ニテ、河崎カ頸ヲ装束ニテ軍敗ヲ被成シナリ、其後鹿児嶋ヨリ　義久公為御使平田豊前守被着越、伊地知治部左衛門尉・指宿左近兵衛尉方ヘ御禮ヲ被仰、誠難有御感也、

●然以後天正八年庚辰四月九日、於肥州建軍八町馬場、御船ノ主甲斐ノ宗運カ人数数百人ノ其中ニ、忠廣一人馳入相戦、敵餘多ツキ伏セケル所ニ、西田和泉守被見次、然間両人同心ニテ無比類働ヲ遂シ所ニ、味方ニハ海老原次右衛門尉見次来ルト云ヘ共、彼ハ早速戦死ス、依之カ和泉守ハ引退、忠廣叉ハ大勢ニ逢テ防戦シカ見次勢ハナシ、居テハ悪カリナント思イ、漸其場ヲ調、本ノ如ク引退ク、然ル所ニ忠廣カ郎等源介弓矢ヲ以テ物影ニ有シカ馳来リ、主従二人テ相防、敵尚勝ニノツテ跡ヲ慕来ルト云ヘ共、無子細シテ不盧ノ所ヲ遁シ也、

●其明天正九年辛巳十二月三日、肥州カタシタ城ヲ攻玉フ時、於城内忠廣粉骨ヲ尽シ相戦フ、其時同心人数新納勘解由・山内市兵衛尉・寺師主馬首、此衆モ一同ニ被相働シナリ、

●其以後天正十四年十月、豊後表ヘ御出勢アリ、緒方ノ城ヲ被攻シ時忠廣致合戦、甲ノ真向眉ノ上ニ鑓疵ヲ受テ引退、然ニ良郎等ノ源介馳来テ手負玉フカ、其場ニ不有合叉無念ノ次第也ト申ケル、然折節忠廣叉甲ヲ拔テ持セシニ、彼源介何トカ思イケル、其侭甲ヲ着シテ敵大勢ノ中ニ割入テ、無比類忠死ヲ申也、

●其後利光ノ城ヲ被攻シ時モ忠廣叉相働、既ニ鑓ヲ損サシカトモ粉骨ヲ尽シ申ナリ、

●去程ニ薩州ヨリ豊後為追討御出勢被成以来、豊後大略御手裏ニ参ル、今少相残ル所ニ、羽柴筑前守秀吉公其時天下ノ主タリキ、大友ノ急難ヲ救玉ワン為ニ、義統ヘ為御加勢四国ノ長宗我部弥三郎信親・仙石權兵衛秀久尉御馬廻衆豊州ヱ被着下、比ハ天正十四年十二月十二日ニ豊州衆同心ニテ於利光麓薩州勢ト京勢決勝負トスル所ニ、彼ハ大勢、此方ハ日州衆迄ニテ少人数ナリ、然ルニ左

近兵衛尉忠廣立廻リ、是ヲ見テ思ヒケルハ、京勢ノ大軍ニテ馬ヲ入ラレナハ薩軍タマリカタシト思ヒ、跡ノ味方ヲマねキ寄セ、早速忠廣鑓ヲ携テ京勢ニ渡シ合、大勢ノ中ヨリ指物サシタル侍馬ヨリヲリ立チ、鑓ヲ取テ指合ヒ、互ニ勝負ヲ争、忠廣則太刀始ニ敵ヲ討捕得勝利、カヽル折節二番ニ冨山将監、三番ニ箕匂符野介、四番寺師主馬首、五番山内市兵衛尉、以上五六人敵ニ指合所ニ、敵モ一人ツヽ互ニ鑓ヲ合テセリ合ケルカ、何モ運ヤ強カリケン、皆敵ヲ討捕、然ル時節一同ニ味方大勢ニ伐懸ル間、薩广ノ軍兵我ヲトラント追懸テ攻戦フ、京勢ノ大勢モ敗軍ニテ引退間、府内表迄追イ討ニスル程ニ、薩摩方ニ討捕敵ハ数不知、長宗我部殿ヲモ討捕シカハ、千石殿ハ漸々身命ヲ助リ船ニテ歸国ト聞ヱケル、サアレハ　秀吉公天正十五年三月朔日御出馬有、日本ノ諸勢ヲ引卒シ、則時ニ御下被成ニヨツテ三ケ国ノ人数豊州ヲ引退、将軍　秀吉公ハ肥後表ヨリ坊ノ河内ヘ御着陣被成、太平寺ヘ御宿陣、日向表ヨリハ諸大名新納ノ高城ヲ取巻大勢ニテ着陣ス、然所ニ義久公彼着陣ノ敵ヲ為可被追破ニ都於郡ヘ御進發有カ、先根白ノ陣ヲ攻破リ玉ワントテ夜中ニ押懸ル、其節忠廣モ早々城ノ岸ニ付、塀ヲ取破リ互ニ鑓ヲ取、忠廣カ鑓モ柄口ヨリ本迄ネヂマワシ相戦フ、彼陣破レス守ル間味方モ引退、根白ノ大将ハ因幡ノ善祥坊ト云人也、夫ヨリ人数ヲ被付出、矢軍ニ成、三ケ国衆モ難成其功都於郡ヘ引歸ル、然間天下ニ為可被申入、　義久公ハ秀吉公ノ御陣所泰平寺ヘ御打立有、然所ニ連々蒙御恩威勢ノ諸侍、御国危成立躰ヲ見、我在所ヘ引退、去間義久公御供衆コレナキ間少々被召列、其比忠廣夏ハ串間ノ在所ヘ老躰ノ二親妻子ヲ召置シニモ不構、都於郡ヨリ直ニ太平寺ヘモ御供ヲ申也、角テ　秀吉公ヘ　義久公御出仕有テ、夫ヨリ和睦トナリ鹿児嶋ヘ御歸館有シ時モ、忠廣夏御供ヲ申ナリ、

●去程ニ伊集院右衛門大夫入道幸侃、三州為家老八萬石ノ知行ヲ給、庄内居所ニシテ被召置、然所ニ逆心ヲ企由被及聞食、於伏見幸侃ヲ御誅伐アル、其子源二郎庄内都ノ城ヘ楯篭、同外城ヲ睦構ヘ、致篭城弓箭トナル

故、山田ノ城ヲ先被召捕、御國衆大名小名大略被着集、慶長四年己亥七月十三日ニ志和知ヘ諸軍衆為打廻、野首ノ河畑迄被着揃衆タマリ候折節、河向ヘ敵城近ク鉄放ノ音シキリニ有シカハ、忠廣是ヲ聞、平田太郎左衞門尉方ヘ申ハ、若キ者共城近ク鉄放打ニカ参リ候如何ト尋ル、平田殿被仰ハ、何モ若キ者共計鉄放打ニ遣シタリ、何ソ念遣ハ有マシトアリ、重テ忠廣申ハ、此儀不可然、皆伏草ト見ヘテ候、急キ退玉ワテハト申、早速馳行各ヲ相退、河ヲ渡ト否ニ、案ノコトク庄内衆大勢ノ伏草ヲ一度ニドット起ス、味方是ヲ見テ我先ニト馬ニ取乗リ、足ヲミタシテ皆々引退、庄内衆悉出合、志和知表・野々美谷・安永ヨリ着出テ、志和知ヨリ山田ノ間一里餘ノ道ヲ横ニ跡先ヲ指切、鉄放ヲ打懸相戦シカハ、味方無正躰敗軍ニ成ヘキト見得ケル間、指宿左近兵衞尉忠廣叉、跡ヲ可調ト心懸、福永宮内少輔ヲ曳留メ、可被見次由申ト云共、福永叉ハ難成ト引退、菱刈孫兵衞尉ト申人行合タリ、彼人連々ロヲ聞方ナレハ、是ヲ留メ見侍レ共、聞モ敢ス引退、其外大身衆ヲモ数々留メ見シカトモ、早大事トヤ被見及、山田ヲサシテ被引歸、忠廣叉ハ不及是非馬ヨリヲリ、彼馬ヲハ諸人並ニ相返シ、則手鑓ヲ取、志和知ノ河ノ上下ヨリ付登ル敵ニ指向フ處ニ、岩次善左衞門尉ト申老武者一人、忠廣ヲ見次来鑓ノ石ツキヲ取、是非相返シ候ヘト曳返シ〻〻被申間ニ、岩次方モ痛手ヲ負テ引退、忠廣ハ指懸ル敵ニ鑓ヲサシムケ〳〵戦シカハ、敵モイ方々ヨリ鉄炮ヲ打懸ルト云ヘ共運ヤ強カリキ、一ツモ身ニアタラス、然折節阿多長壽院五六十人ノ間ニテ、忠廣有シ所ヨリ一町餘間遠ニ指コタヘ少矢軍有ル故、敵二三百餘計ニテ長壽院ニ一度ニトット押懸タリ、多勢ニ少勢難叶而長壽院モ如何ヲホシケン、山田城ヘ退玉イナハ、被押篭テ悪カリナント思慮ヲワシマスカ、妻霧嶋ノ如ク足ヲ乱シテ落玉フ、敵是ヲ見テ猛勢ノ者共カ黒煙ヲ蹴立テ追懸ル間、定テ人数モ多分ニ討レスラント思ヒシニ、サモナク只一時ニ落玉フナリ、誠ニ危カリシ事共也、ケ様ノ仕合ニヨツテ忠廣ヘ押懸ル敵少々ニ成シカハ、足ヲ乱サスソロ〳〵ト相退折節、帖佐ノ

御旗ト見得テ十文字ノ幡ヲ指シ来ル、彼旗指ト同前ニ竹内備前守モ馳来ル所ニ、彼旗指ヲ射伏タリ、然ル間忠廣申ハ、急キ彼旗サシヲ退ケ玉ヘト申、備前カ云、山田ハイマタ遠シ、夫ヨリ此方ニハ人モナシ如何ト申ス、更ハ山田ヨリ人ヲ列来玉ヘ、其内ハ彼者討セマジキト云、夫ハ餘ニ無正躰哉トテ、御旗計備前請取テ引歸ル間、忠廣夫ヨリ薄ノタント云所迄相退所ニ、旗指八兵衞尉ト云者薄ノタンニ指答ヘ、忠廣ヲ待請、少シ退キテハ指宿ヲ待合セ〳〵相退所ニ、綾衆二三人、帖佐・蒲生・隈野城衆四五人宛、此衆高篠ノ内ヲ忍ヒヨリ、野々美谷・安永ヨリ横ニ通路ヲ指切、敵ニ鉄炮ヲ打、忠廣退来レハ替合〻〻クリノキニ引退、然所ニ忠廣次男指宿軍四郎哉、忠廣跡ニ一人殿ニテ辛労ヲ聞付テ為見次馳来、敵ヲ相防所ニ痛手ヲ負テ漸々引退、忠廣哉朝ノ五ツ時分ヨリ晩ノ酉剋迄ニ、終日志和知ヨリ山田ノ城ノ垂口迄殿ヲ仕、手ヲモ不負粉骨ヲ尽ス故、二千餘ノ人数安穏ヲ被成也、誠ニ前代未聞ノ働也、夫ヨリ平田太郎左衞門尉ヘ申ハ、人数ヲ御出勢候ヘ、今日終日働、相労タル敵ニ付送リ追崩シ、庄内ヲ可被召取哉今日ニテ可有ト再三申ケレ共同意ナシ、然間漸若キ衆二三十人申合セ付懸テ見シカトモ、軍法ヲ能調、三手ニ分テ引退間、中ニ付レハ左右ヨリ引返ス、左ニ慕ヘハ右ヨリ付ナトスル故、中々小勢ニテ無其功シカハ引退申也、其後鹿児嶋ヨリ為御使有村次右衞門尉（ママ）罷越、其時　御上意ノ趣ハ、去十三日ノ働ニ敗軍之哉子細可被聞召上ノ由、山田陣衆ヘ雖被　仰付、敢テ口上何モ不延、然レハ敵合ノ様子亦ハ跡ノ儀、指宿ナラテハ知人ナシトテ忠廣ヲ被呼ニ、其剋軍四郎手存命不定ニ有シカハ、辞退ヲ雖申不叶、其座ニ出御使ニ對面シ、十三日ノ働ノ趣不替申達シカハ、夫ヨリ有間次右衞門尉歸府ヲ被申也、

忠利度々尽粉骨哉

●忠廣息四郎次郎忠利哉、慶長二年丁酉三月上旬ニ朝鮮国加徳嶋ヱ令着船在番ヲ相勤ケル、然ルニ同年七月十四日酉ノ剋ヨリ、為番船破　義弘公　家久公唐嶋陸地ノ働ヲ殿下御奉行ヨリ御承ニテ、唐嶋ヘ船ニテ御打立

被成、其夜寅ノ時程ニ、唐嶋ノ碁石濱ト云所ニ致御供着船ス、三千餘人陸路ヲ相續ク、日本衆何レモ於海上番船可被破用意也、敵陸ニアカリナハ、嶋津殿ナラテハ成マシキ由ニテ、陸ヲ十八里程難所ヲ御續キ被成、前ノ日申ノ刻程ニ、上下共ニ誘タル侭ニテ、十五日ニハ御食ヲモ不参、　御両殿御馬ニテ、其外諸侍衆并忠利馬船イマタ日本ヨリ着サル故皆々草伏、何レモ可罷通叉難成カリシ所ニ、　御両殿仰ニハ、一人成共急キテ番船破ニ参合可然旨承故、本田助左衞門尉兄弟・川村七郎左衞門尉・本田勝五郎・久永与三・指宿四郎次郎以上五六人、十八里ノ道ヲ走届、番船破ノ筈ニ相、「逢之」字船ヨリ陸ニ上ル敵ヲ討捕也、其後　御両殿御着陣被給ト云へ共、遠路ノ故人数不被参届、雖然野原ヘ御陣ヲ定候得共、人ナキ故、本田助左衞門尉・指宿四郎二郎両人シテ小刀ヲ以テ柴ヲ切、少シ指廻シ御坐ヲ定ル、然所ニ其地ヨリ直ニ高麗奥入タルヘキ由ニテ、於其野原備押ノ用意ニテ、同七月廿八日ヨリ全羅道ニ御入勢、コセント云高麗ノ地ニ渡リ、泗川、ハトン、コニヤン

ト云所ヲ御通リ、南原ト云大城ヲ大國江南衆結構ニコシラヘ在番ス、彼地ニ八月十二日ニ日本衆十万騎被着揃、高キ岡ニ定陣所、其夜　家久公ヨリ本田助左衞門尉・吉田大蔵丞・指宿四郎二郎以上六人被召寄、今夜日本衆着陣ノ間、敵可落行叉モ可有ト思食間、敵城近ク寄付承合セ参ト被仰付、右五六人城近ク寄付、其内本田助左衞門尉・指宿四郎二郎両人大門口ニ指寄、通夜聞合セツレ共敵不落行、夜明シカハ忠利一人城ノ内十一二間程ニ寄付忠利見廻リ引歸ル所ニ、本田助左衞門尉・吉田大蔵丞モ近ク寄可被見ト有間、案内者仕最前ノ所迄付寄ル、然間鉄炮・半弓殊外射懸ル、彼半弓矢常ニ替リテ、篦ヲ木ニテ造タル矢ニテ有シカハ、為可懸御目ニ拾集テ持参ス、同十三日ニハ、日本衆十万ニテ敵城ヲ取巻仕寄ニテ日夜被攻、嶋津殿御叉ハ大国ノ方ノ手當トテ、奥ノ通路ノ岡ニ御陣ヲ被成、同十五夜ニハ敵騒動ニテ城可レ被レ破躰ニ有シカハ、御陣ニハ敵城破ル、共一人モ馳合申ス様ニト、櫛ノ歯ヲ如引御觸稠シカリケレハ、任其法度ニ堪忍スル所ニ、礑ト騒

忍入届
見度トノ事故

動ヲビタ、シク有ケレハ、夫ヨリ忠利亘忌佛法ヲ指刀迄ニテ馬ヲモ乗アヘス、郎等ヲモ不召列、敵城ヘ馳セカ、リ行ニ、敵落ントスル者モアリ、此方彼方ニ乱合者共ヲメキ喚フ音、亦ハ鉄炮ノ音、何ニタトエン様モナシ、則大門口ノ橋桁計有ルヲ渡リ大門ニ入、敵大勢中ニ馳加リシカトモ落行ントセシ敵ナレハ、無左右渡シ合族モナシ、其中ヲ漸々通リ城内ニ入ケルニ、味方一人モイマタ見得サル所ニ、帖佐衆黒田七兵衛尉走リ来ル、則致同心大将ノ館ニツメ入ナリ、然ニ方々ヨリ十万人数攻入、終落城申也、勿論不依誰人唐人ヲ不伐者ハナシ、扨夫ヨリハテンゼウト云赤国ノ都ニ入、然所ニ敵ハ南原城落タル由ヲ聞テ奥ニ逃散故、日本衆彼城ヲ被割捨、其普請一手請取割也、日々乗馬ニテ具足・指物等ヲ仕合、唐嶋ヨリ青国迄致御供、海南ト云所ニ卅日程御逗留有テ、彼所ヲ納ノ郡ト定メ田地ヲ検地ニテ、諸侍知行高ニ應シ御支配ニテ、其納米ヲ高麗人ヲ被レ定ニ蔵役人一蔵ニ米ヲ何モ被納置テ御引出被成、泗川ノ古城ニ御在陣有、嶋津殿海南ヘ御逗留中、諸國大名泗川ニ卅日程前ニ被着揃、古城ヨリ海邊ニヨリ新城ヲ結構誘ヘ、屋形造ヲ被成、棲樓番所・塀・角矢倉ナカマヘトヲ被作置、弓・鉄炮・鑓・長刀何レモ道具ヲソコ〳〵ニ被備置、嶋津殿ニ被相渡間、御移御番也、諸国人数ハ廿町計別所ノ河原ニ被陣取所ニ、尉山加藤主計助在番アルニ、大明人詰懸ル由其聞ヘアリ、十二月廿九日ヨリ彼尉山ニ被馳續、泗川表ヘハ一人モ他国衆不有合所ニ、泗川古城近ク大明江南衆数十万騎着陣ス、然間古城ノ外野原ニ為張番薩广衆百人、相良玄番允主取、又嶋津右馬頭殿御人数百人ハ、河上六郎兵衛尉主取ニテ番ヲ勤ル折節、慶長三年九月廿四日ニハ数十万ノ江南衆可致一戦由、為案内龍涯居士ト云者ヲ以テ申遣ス、就其為加番忠利ヘ数百人相付、為番着越、然ル所ニ、夕日元新城ノ上ヘ不思議ナル気立ケルヲ、相良玄番允被見付テ忠利ヘ被申ハ、其方亘気ヲ能見知タルヤ十郎右衛門尉忠利■■不案内ノ由返亘ス、又忠利申ハ、何方ニモ気立侍ルヲ見玉フヤヤト問ヘハ其事也中々

新城ヲ見ヨト候間顧ルニ、一本杉ヲ押立タル如クノ黒（云ニ見レハ）
青キ雲立左右真直ニ立、四方ヨリ赤キ雲扇ノ骨ヲ指掛
タル様成赤キ筋アリ、不思議成シ事共也、角テ廿五日（ナリ）
ノ朝迄相待ツレ共、敵不寄来、然ルニ其日弟子丸弥八
十郎右衛門尉為替被着越間、百人番衆ヲハ相返シ、忠
利亘ハ敵ヲ待居令滞留ニ、同晩又龍涯居士ト云使又来（来而申ケルハ、加）
藤主計殿ヘ一戦イタス故ニ嶋津の方ヘノ弓箭致相違ノ由也
ル、其趣ハ可致和睦ノ由申故、其旨泗川ヘ申上シカハ、
伊集院下野入道・伊勢兵部少輔被出合、御馳走有テ互（絵尺有テ）
ニ被歸故、弟子丸方・忠利モ同前ニ罷歸也、右時龍涯
居士詩作ヲ成シテ忠利ニ得サセケル（文ヲ）アタフ、其時ノ詩ニ曰、

為國忠良一點心　經綸世務費精神
若夫海濤澄徹静　萬年傳誦播芳茗

龍涯居士為

指宿忠利将軍

然ルニ同廿七日早朝、二百人ノ番衆ノ陣ヘ敵大勢押寄（張番ノ）
セ、相良玄番允ヲ打捕、河上六郎兵衛尉ハ痛手負、其
外番衆残スクナク戦死スルニヨツテ、敵ハ直ニ泗川ノ
新城ニ二三十萬程押寄セ、城内ヘ矢ヲ放懸テ引退ナリ、
●同十月朔日ニ、泗川新城ヘ数十万ノ大明人押寄セ攻懸
ル、然共一人モ城戸ヨリ不掛出様ニト稠敷御下知有ケ
レハ、任其皆々塀ニ付鉄炮ニテ相防ク所ニ、國分衆請
取ノ方ニ押寄ル唐人ノ内、塩硝ニ火付テドツトモヘ立
音ニ、城ノ諸口ヨリ只一度ニドツト打出、大敵ニ伐懸
シカハ、次第ニ敵引退、味方ハ弥ニ勢ヲナシ追懸シ所
ニ、大敵ノ中ニ惣大将ト見ヘテ、少シ高キ所ニ廣サ五
六間計ノ黒キ指笠ノ如ク成物ヲサシタルモノ、脇ノ敗
軍ニ少モ不動指答ヘタリ、夫ヲ見ルヨリ味方ハ被引然（セリヨ）
スル故ハ敵又押懸ルニヨツテ味方皆々引退キ、敗軍ニ成立ニ（引色ニテ）
タヽスム故
付、忠利モ同前ニ引返リ度思ツレトモ鎧ヲ着、馬ニハ
離レ遠ク懸出ル亘ニテ息モツマリシカハ、引退共迎モ（追打ニ被討ナハ犬死タルヘキト敵待）
掛ルニ
城迄ハ成マシキト思ケル所ニ、桑波田利右衛門尉間近（ヌ逃ヲシテ犬死シテ）
ク見合侭、忠利申ケルハ、迎モ逃得ル亘成カタキ也、
ハ詮モナシ桑波田イカヽト申（ト返答シテ）
是ニ居留ラント申ケル、桑波田モ同意引退亘成マシキ

ト申、互ニ敵ヲ相待所ニ跡二町餘ノ坂中ヨリ、前田弥次作是ニ有ト大音ニテ申セシハ、味方モ是ニ指答ヘタル由ヨバワリシカハ、此音ニ勢ヲナシ進ケル所ニ、馬方ス、メケル上ニテ一疋ヲ乱シテ逃通リシ人有、言葉懸留テ見シカトモ聞モ入ス逃歸ル、然ニ比志嶋彦四郎見得玉フヲ、此方ニト招テ一所ニ加ル、又嶋津圖書頭入道紹益、忠利ト弥次作ト中間、長宗我部殿古陣ノ下川口ニ答給フ、夫ヨリ跡ノ岡ニ味方二人三人、十人廿人宛人数モ見次返リ来レハ、敵モ又村々ヘ引退躰ニ見得ケル、忠利思イケルハ、彼大将ヲ追崩ナハヨカリナント思ヒ、追懸ルラントセシ所ニ、藥丸壱岐守申ハ、大将ニ目ナカケソ、大勢馬ヲ一面ニ立並入来ラントスルソ、爰ヲ防ケト被申故ニ少シ達セス、又藥丸ニ云ケルハ、大将ノ居所ヲ打破ナハ、惣勢モ崩レン、若馬ヲ入ナハ、壱岐防玉ヘト申ケレハ、藥丸モ其儀可然ト申間、忠利大将ノ備所ニ責懸ル所ニ、石火矢三四十挺程構置タリシヲ一度ニ放懸ヌレ共、忠利身ニモアタラス、又見次来ル衆ニモ無其儀シテ大将ノ圓居所ヲ打破リ、吾モ人モ敵五人十人宛不討ト云コトナシ、其内ニ鎌鑓持タル唐人相働テ人ヲ寄セス、是ヲ忠利請トメ則時討捕、夫ヨリ大勢ノ敵ニ馳合数多討捕、味方モ大勢大明衆ヘ押懸シカハ、江南人立留ラス敗軍ス、チンヂウト云所迄三里ノ間ニ、大明人何十万共不知被切伏シカハ、敵モ次第ニ残スクナク成シ中ヨリ唐人一人進テ走出、味方十人餘ニ唯一人渡シ合戦ニ無勝負、還テ味方ヲ追拂ヒ、少シ小高キ所有ニ引アガリタルヲ、諸方ヨリ馳續ク千人餘ノ人数遠見スト云トモ、誰モ不討捕有所ニ、野木弥兵衛尉被利ニ云ケルハ申ハ、彼敵討ハヤト云、心得タリトテ走行、弥兵衛ハ鑓ヲ持テ五町程ノ道ヲ廻テ行、忠利モヲクレシト悪所ヲ直ニ飛下リ、彼強敵ヲ一刀ニ討捕シ時、忠利腕ニ疵ヲ負、浅手ナリシカハ無子細、去程彼唐人ノ鼻ヲ泗川御城垂口ニ相揃、頓テ日本ノ都ヘ上セ玉フ、彼敵首野モ山モミチ〳〵タルヲ、夫丸ヲ以テ召寄ル、頸百ニ一ツ、十ニ一ツモ集ルヤ不知、則頸墓ハ方六十間ニ地ヲ掘セ首ヲ入、其上ヲ六十間方ニツキ立シニ、寒中トハ

云ヘ共虫涌出テ塚ヲ持崩ス、数度普請有テ其上ニ卒都婆ヲ立、大明人戦死ト大慈寺ノ書玉フナリ（慈寺供養アリテ卒都婆ノ文ニ曰、大明名々戦死ト有ツル、）

●大國人数十万ノ内逃延シ者共、頓テ嶋津殿ヘ致和睦、然共海上ハ大明衆番船ヲ南海（ナンハイ）表ニ着置間、日本ノ諸大名ヨリ兵船ヲ揃ヘ出合セ可被破由有シカハ、就其嶋津手ヨリハ兵船二艘ノ賦ニテ、一艘ハ上乗ハ澁谷四郎左衛門尉、又一艘ハ指宿十郎右衛門尉ヘ被仰付間、時分ヲ待居所ニ、彼モ又致和睦故ニ両船モ不参シニ、慶長三年戊戌霜月十五日ヨリ、日本ヘ御引陣トテ御打立被成、チヤグセント云迄御引被成ニ、小西攝津守殿順天ト云所ヨリ被引出ヲ、　御両殿チヤグセンニ御待有ケルニ、同十七日ノ酉ノ剋程ニ、小西殿ハヤ爰許ヘ被退出様ニ被着ト見得候由被聞召□ハ　義弘公些ト打迎ト存テ御出船有ルニ、帖佐方衆御供ニテ被参、其夜無御歸、然ハ何タル亥共不知故、危被思召ツルヤ　家久公為御聞召、同十八日朝御座船一艘、御雑事船一艘ニ上井仲五郎乗、今一艘ハ本田助左衛門尉歸朝船ニ乗リ御供ニテ有シ所ニ、忠利本田助左衛門尉船ヲマねキ寄セ御乗セ玉ワレト申ケレハ、御法度ノ間成間敷トノ儀■是非共乗■■■達セ給リ候ヘト再三ニ及ニ付テ申入シカハ、更ハ本田勝五郎ヲモ同心ニテ乗候ヘト被申故、勝五郎方ヲ誘引、彼船ニ乗致御供参シニ、夜前右ノ番船　義弘公ヘ御人数押懸相戦フ、然ニ彼番船前々和睦有ルニヨツテ弓箭ノ無御用意、御歸國ノ様子迄ニテ、荷船ノ足入ニ皆々被乗シカハ、御供船悉燒沈メ、勿論人数モ大略戦死スル所ニ、　家久公致御供参合トイヘトモ、只今戦互ニ止シ故ニヨリ、　御両殿御供シチヤクセン嶋ニ入相時分ニ御引取玉フ、則夫ヨリ又唐嶋迄御引取有ヘキ由有シカハ、忠利亥モ本船ニ乗移リ罷有シニ、　家久公ヨリ以御使我々乗船ニ被仰付ハ、殊外大船ニテ乗延亥可難成間、何レモ小船ニ乗移リ、彼大船ハ捨候テ可然旨被仰聞シカトモ、乗合鹿児嶋衆其外ノ衆モ兎角ノ儀不被申上故、忠利申上ケルハ、此船ニ御心遣ハ入申マシク候、乗合人数餘多ノ事ニテ候マヽ、櫓ヲモ檝ヲモ取容易可乗延ノ由御返答ヲ申上ル、又御使ヲ以テ承ルハ、於其儀ハ先ニ船ヲ出セヨ、

御覧有テ御出船可被遊旨御上意也、雖然忠利又罷出申上ハ、辱キ御上意ニテハ候ヘトモ、此船ニ御念遣入申マシ、御船ヲ跡ニヲキ申、御先ニ退申儀難成存上ル間、早々御出船被遊ナハ、御供可仕旨申上ル故、則御出船ヲ被成間、御座船ニ乗付致御供、次日唐嶋迄御引出玉フ、然所ニ去ル十八日朝、　義弘公御前ニテ番船ニ合、船ヲ被燒沈人数ノ内、椛山權左衛門尉（久高）ナトヲ始トシテ、以上五百餘人南海ト云戦場ノ嶋ニアカリ存命有ル由其聞ヘ有ルニ付、為迎取同廿日巳ノ剋ヨリ未ノ間迄ニ人数餘多被仰付、早船十艘ニ伊勢兵部少輔（大身之士）頭取ニテ唐嶋ヨリ出船也、又其日ノ入相時分ニ、御觸ヲ以テ海上ノ諸船ニ被仰渡ケルハ、誰ソ南海ニ望申人コレアラハ、今一艘可被遣通承ル、其時忠利可参由望シカハ、入佐助八郎モ同前ニ被望故、可然旨任　御上意、則時ニ可打立由申上シカトモ、船ナクシテ荷船ノ足入、殊ニ大船ヲ其夜亥ノ剋過ニ給ナリ、雖然櫓又ハ水夫共、前番船戦ノ時廃故、櫓ハ諸船ヨリ借集タル故船ニ不似合、水夫ハ船ノ道不知、夫丸ヲ六人被乗セ、去共俄ニ別ニ取替ヘキ櫓・水夫ナカリシカハ、不及力出船スル所ニ則時ニ向風ノ大風ナリ、船ノ道不案内ノヤツバラニ押セシカトモ、敢テ船不働、殊ニ日本国衆一人モ不残被引出、敵路ナリシカハ（レハ）、船頭モ水夫モ是非ニ成間敷由ヲ申ト云ヘ共（ス）、サスカニ理トハ思ヘトモ無子細引歸ル（御託宣ソト思ナシニモヲヨハス）急キ乗ケル程ニ、其夜ノ明方ニ昨日廿日ニ被遣兵部少輔兵船トモ皆々走リ戻ルニ行合シ間、様子ヲ問シ時、誰トハ不知彼嶋ノ衆迎取ナラサル由ヨバワリシマ、唯一艘押通リ行程ニ、廿一日ノ酉ノ剋程（計）ニ小船一艘走来ル、夫ヲ見レハ對馬ノ人数南海（ナンカイ）ニテ船ニ乗後、對馬殿被捨衆少々乗シ内ニ、薩广衆深野掃部兵衛尉父子・長崎六郎左衛門尉ナト被乗合ケル間、嶋ヘタスカラリシ（居ル）人々ノ様ヲ尋ルニ、彼船ノ跡ニ皆々打果ス様ニ見得シ、其故ハ番船ニ被燒破シ時、命ヲタスカリシ人南海ニアリシカ、彼嶋ハ對馬ノ屋形妻子共ニ召列移居在陣ノ所ニテ有シガ、三日前ノ番船戦ニ驚キ、廣海方ヘ出船ニテ何ヲモ不取敢被引退シ跡ナレハ、飯米兵具衣裳其外諸邊被捨置故自由ニ有シカハ、暫ハ存

命ヘシ、已ニ五百餘人ノ内、鍛冶大工又ハ諸細工人餘多有之侭、彼地ニテ船ヲ造リ日本ヘ可渡ト談合ス、然ルニ一昨夜海上ヨリヨバワラレシハ、為迎船十艘餘伊勢兵部少輔主取ニテ参タル由也喚シカハ、嶋ノ人数迎船ト聞ヨリ其侭礒ヘ取リ出ル、見レハ敵千艘カ、リ居故汀ハ番船数々有シカハ遙々沖ヨリ右旨喚タル計ニテ、其侭一艘モ不残引返ス、然ニ海上ノ敵共對馬殿古陣ニ火ヲ懸燒崩ス故、彼嶋崎ノ山ヘ被隠居所ニ、此小船ヲ見付、右ノ人数ヲチヤクセン嶋迄漕送リ有ヘキ談合ニテ、我々上乗仕、對馬衆少々乗セ出船ヲセシ跡ニ、鉄放ノ音コト〳〵シク有シ間、何モ討果シ□イツラン、指宿方各被越テモ何ヲ可迎取哉、則歸リ玉ヘト被申、忠利申ハ、於其儀ハ各為被留由可被申上カト申シカハ、夫ハ成間敷由也通ヲ被申、サテサアハラハ留ヌ難成、忠利ハ可参ト夫ヨリ敵路ヲ凌行其日モ暮、木綿嶋ト云所ヘ入江アリ、是ニ碇ヲオロシ、ニ、夜半過汀近ク、ヨイニナキ不思議ナル夢火有リ、廻ヲ見ルニ人ノ様ナル者共取廻シ居侍ト見ヘシ間、水夫ヲ起シテ見セケルニ、彼カ目ニモ不違、又日本人ノ音ノ如クシテ物ヲ云ルカ聞エシ間、碇ヲ起シテ押懸テ見ヨトテ押セケルニ、彼明火則橋舟ノ如クナルモノニ乗リ、沖ヲ指テ出ル間、是ニ付テ押バ彼モイソク、押ねハ是モ不動故、是非ニ押セトテ押懸ル、廣海ノ方ヘ嶋崎ヲ押廻ルト、夜モ明シカハ彼明火失テナシ、不思議難晴又傍ヲ見テアレハ、前々ノ迎船十艘ノ内一艘何トシテカハ乗後隠居ルヲ見付、是ヲモ召列内海ノ方ニ押廻シ、急ク程ニ廿二日酉剋計ニチヤクセン嶋近ク漕行シカハ、敵船如何程トモ不知彼嶋ヲ取巻、碇トカ、リ居ル間、中々彼ヲ可除様モナシ、又忠利乗船ハ櫓・水使ナキ船ナリシカハ、迚モ遁ルマシキ侭、敵船ノ間ヲ押通リシニカ共、彼敵敢テ少シモ心ヲ不付、カマワサル躰ナリシカハ、船ヲ陸ニ押付サス、雖然彼嶋ヲ一日二日尋テモ人数ニ尋逢ヘキ夜可難成ト思ヒシニ、案ニ相違シ礒山ノ内ヨリ黒田用右衛門尉・四位大蔵丞被着出、彼両人今朝ヨリ海上ニ船見得来ルヲ遠見シ居タルト喜テ、未五百餘人モ彼嶋ニ存命由被申間、忠利申ハ、於其儀ハ此舟荷ヲ打レヨ、人数ノ有所ヘ不行先ニ此方ヨリ打セヘケレ共各ヘ不取合内

ニ荷ヲ打亥不届ト思イ如此ナリ、其方ナト可被乗ト被思ナハ荷ヲ打レヨト申ケレハ、彼衆両人ニテ悉ク荷ヲ海ニ取入、夫ヨリ忠利同心ニテ船ヨリ岡ヘ登リ、岡ヲ二ツ通リシニ、山中ニ火ヲ燒、山深隠居衆ニ尋逢シカハ、喜悦ノ眉ヲ開キ、落涙ハ誠ニ何可喩様モナシ、其時忠利申ケルハ、二艘乗来ル船ニ五百餘人ハ乗間敷由椛山殿ヘ申シカハ、更ハ先夫丸ヲ木綿嶋迄漕送リ、又其船ヲ漕戻シ、侍衆ヲ乗セ歸朝有テ、日本ヨリ木綿嶋ヘ食置夫丸ヘハ迎船ヲ遣スヘシ、忠利漕送ヲ被頼由承ル、如其談合セシニ、夜中ノコトニテ有シカハ、礒ノ大岩ノ影ニ火ヲ燒、夫丸ヲ乗セントシケレ共、中途迄先ニ行、又日本ヨリノ迎船ヲ可待亥、其迄存命如何ト思ニヤ存候ヤ、船ニ乗兼シ間時移リ、夜更モテ行ニ、又為迎船小西攝津守殿ヘ早船十二艘御借被成遣シ玉フ、然ハ中途ニテ行合シ兵部少輔一手ノ船ノ者共其外中途ニテ行合シ方忠利ヘハ乗通シ参タル由申ニ付而、十二艘ノ被遣シカハ、彼船共跡ヲ慕来リ、又夜中ノ亥ニテナリ、敵船取巻有シヲモ不知、岩ノ影ニ火ヲ燒シヲ見懸船ヲ燒シ大カ、リ

押寄、其時敵船ノ中ニ有シヲ見付、驚キサワギ敵船ソト云程コソアレ、船漕出セ引出ヨトテンデニ喚リ立テ悉ク引歸ル間、櫓ナトニ取付一艘ニハ二三人乗ル船モアリ、又一人モ乗セス引歸ルモ有故、結句取乱シ人数ノ取分モナラス取マセシ間、不及力忠利乗船ニ限リナク乗也、海上ハ悉ク番船ニテ有故、人ヲモ不恥海ニソカリ船ニ取乗故、我乗船計罷居ル、其時敵船モ少サワギシカハ、敵船ヨリ沖ニ遙々漕出シ、忠利ノ相侍十郎右衛門尉儀ハ、橋舟一艘ニ水夫一人、櫓一挺持セ、水夫ノ手ヲトラヘ陸ニ罷居テ、手負病者ナト迄一人モ不残皆舟ニ乗セ、又陸ニアカリ、山中迄人ヲ尋廻リシニ、勿論残タル者ナカリシカハ、諸人船元迄持来ル鑓其外道具等捨置シヲ、一々ニ取集燒捨ケルヲ、黒田用右衛門尉一人忠利ヲ被見届、彼是仕調橋船ニ乗、敵船ノ間ヲ漕出シ（付紙アリ）、本船ニ追付乗ウツリ、唐嶋ト云所ニ至リ見ルニ日本国衆ハヤ引拂フ、加徳嶋其外諸津ヲ尋来ルニ皆々被引出故不尋合、同廿四日晩鐘時分ニ釜山浦ト申所、是日本ヘ出船津也、彼地ニ漕付シカハ、其夜中ニ

漕入

日本へ可被渡用意ニテ、湊口ニ船ヲ漕浮ベラレシ所ニ追付、夫ヨリ諸船ニ人数ヲ賦リ乗セ移シ、夜半前ヨリ不残御歸朝也、忠利船今少遅カリナハ味方釜山浦ヲ引拂ハン間、大人数ハ乗タリ日本へ渡ヌ中々及カタシ、高麗ニ居留ルヘキニ不慮ニ来ル、誠ニ天道ノ加護▨故カ奇特也トノ事共ナリ、同廿五日ニハ對馬ニ着岸、廿六日ニ壱岐ニ着、於彼津ニ　義弘公・家久公ヨリ椛山權左衛門尉ヲ以被食寄、御直ニ被仰下趣ハ、今度敵路ニ癈数百人ノ者共、一身ノ手柄ヲ以テ皆々迎取ヌ、御感深重忠ニ被思召上間、於御国元一廉御褒美可有由被仰下、雖然其節方々御弓箭出合、世上不静謐有シカハ御取紛ニヤ、其後程延、為御加増知行致拜領也、

●伊集院右衛門大夫（忠棟）入道庄内ヲ被下置剋、逆心ヲ依被構御成敗ヲ被成ナリ、其息源次郎庄内ノ諸城ヲ誘テ被楯籠ニ付御弓箭有シ中ニ、忠利儀ハ京都ノ御使アタリ、鹿児嶋ヘ聢ト有シ所ニ、庄内御陣ニ親忠廣罷居ルニ付、時々為見廻彼地ニ越侍リシ剋、高木町ニ伏草ヲ千二百人ニテ仕、通夜并居ル所ニ、夜明方ニ一人モ不残驚キ逃散ル、然所ニ忠利一人居所ヲ不去、諸人ヲ留メシカハ、夫ヨリ立歸リ又少別所ニ直リ被伏、其日酉剋迄伏草ニ居ル所ニ、高城口ヘ敵着出ト見得ケレハ、皆々懸出シ城近ク攻ヨリシニ鉄炮ヲ放テ防ク所、町口ヘ追入垂二重攻入、町ヨリ奥ノ垂立ケルニ走付破ケルヲ、曾木源左衛門尉・黒田七兵衛尉被見次、又四重目ノ垂ニ敵答ヘ、鑓ヲ揃ヘ待懸ル所ニ走付防戦フ、城内ヨリ白支度ノ法師武者青貝ノ鑓ヲ以テ忠利ト数度鑓ヲ合スルヲモ防キノクル、是ニモ彼両人、其外ニ一両人被見次久其垂ヲ破リ内ニ入シニ、曾木・黒田両人モ跡ヨリ付送リ被参、又五重目ノ垂ノ内ニ入、小路ノ中迄破リ入シニ、其時ハ曾木方計廿間程跡迄被見次、夫ヨリ引出ルニ又右両人待合セ〳〵ノキ出ラレタリ、如此破リ入間ニ、町ハ海ヨリ被参人数ニテ被燒拂、然ルニ五重ノ垂ヲ引出見ルニ、町頭ノ口ヨリ田ニ敵指出、味方ノ人数ト鉄炮軍ニテ有シ間、敵近ク相懸リシニ、市来兵部左衛門尉ナト、云人四五人見次来ト云ヘ共、鉄炮稠故頓テ引退、其後黒田用右衛門尉・和田伴十郎・白濱七（重

助(安)・中嶋次郎助・川口孫二郎ナト走来被見次、是モ鉄炮打懸ル故引退、其衆内中嶋二郎助一人忠利ヲ待合セラレケレ共、早々相ノケト申故味方ニ退入ル、然間忠利一人居ケル所ニ宅万与三兄弟見次来ル、角有シ内ニ晩ニ成故三人同心ニ引退シナリ、

●十月十日ニハ、諸軍衆野々見谷・安永表ヘ指懸リ、北郷殿人数ヲ都ノ城近ク着通シ、敵ヲツラレシ所ニ、都城ヨリ源次郎人数ヲ召列被討懸間、北郷殿人数多々手負ニ成、被及難儀シカハ、人数召列忠利見次可参由平田太郎左衛門尉ヘ是非申ト云ヘ共不被遣、誰モ加勢不被成間、夫ヨリ幡指ニ申ケルハ、旗ヲサシ候ヘ、見次ニ忠利可参由申聞シカハ、彼旗指進立テ旗ヲ指ケル間、走行敵味方ノ間ニ入シカハ、跡ヨリモ人数次第ニ馳續キ、北郷殿人数モ輒被引取シナリ、

●同庄内陣ノ中、慶長五年庚子ノ正月元日ニ志和知ノ城ヘ鉄炮ヲ可被為打由ニテ、堀ヨリ此方ノ田ニ少々被寄鉄炮ヲ打セラレシ間、定テ城戸口ニハ一行モ有ヘキカト思ヒ、一人堀ヲ馳渡リ城ノ口近ク走懸リシ所ニ、伊集院市右衛門尉追付テ鑓ヲトラヘ、シキリニ被留、其間ニ忠利ハヤ手負シカハ、依其弥引退可然ト被申所ニ、市右衛門尉鎧甲ニ鉄炮アタリシ間、市右衛門尉任被申引退シナリ、

●同年二月十四日、山ノ口城ヘ人数三百程、後ノ山ヘ下河内ヲ夜中ニ廻リ人数ヲ指通シ、山ノ口城ノ後ニ伏草アリテ、高城表ヘハ大勢指寄セ鉄炮ヲ打セシカハ、山ノ口ヨリ人数可着出間、夫ヲ懸ラルヘキ談合ニテ有ツレ共、山ノ口ヨリ敵不出故引退キ、高城原迄何モ引退ク所ニ、山ノ口城可レ被レ破通承、左近兵衛尉親子、又山ノ口麓迄サシ下リ見ルニ、本田助左衛門尉・三原諸右衛門尉其外一両人麓ニ走アツマル、彼衆ニ申ハ、城ヲ可被攻カト尋シニ、則可被攻ト返答也、雖レ然人数ハイマタ来ラサリシカトモ、忠利父子両人走出、城ノ石牆ニ付、亦モカリ垣ヲ押破リ外垂ニ有合敵ヲ親子ニテ追篭、又二ノ垂ニ走付相戦シニ、暫味方勢不得懸所ニ、本田助左衛門尉ヲ先トシテ、人数一二十人程外垂ト二ノ垂トノ間ニ被相懸城ヲ被攻、夫ヨリ又二ノ垂ヲ

破リ、板城戸ニ親子攻入相戦折節、隈城衆山口八郎走付相見次、其後清敷衆母袋川小右衛門尉・井口主水佐・米良勝右衛門尉、二ノ垂ト板城戸中間迄走入テ見次、其後鈴木猪ノ助跡ノ垂迄走入云ケルハ、外ニ被ㇾ着軍衆悉クノイタルソ、引退玉ヘトテ鈴木猪ノ助モ引歸ル、其次清敷衆モ引退、雖然山口八郎聢ト忠利親子ヲ見次居ケル間、引退ヨト申ニ付是モ引歸ル、夫ヨリ親子二人城中ニ在之故、敵左右ヨリ大勢ヨセ懸戦間、左近兵衛尉深手ヲ二ケ所負ニケル、忠利引立ノケヘキ亙ニテ有シカトモ、於其儀ハ敵責懸リ可討捕ノ間、一人ノキ玉ヘトテ忠利ハ敵ヲ防キ留ル、其間ニ忠廣垂二重河ヲノキ渡リ、河ムカイノ田ニ人衆被退集シ所迄退行ケル、夫ヨリ忠利ハ板城戸口ヨリ引歸リ、二ノ垂ニシハラク居テ見合スル中ニ、矢餘多射懸シカハ、両ノ手ニ取集メ外垂ヲ出、河ヲ渡リ、夫ヨリ忠廣ニ取合手所ヲ見ルニ、何モ深手ニテ、中ニモ股ノ手ハ骨ヲ股半分ニ過程切ル、、歩行成マシキ間、先人ニ負セヘキヨシ是非云ケレトモ、敵路ノ亙ニテ又敵合ニセヲワレナハ足叶マシトテ、山ノ口ヨリ高城ノ河畑迄アユマレシナリ、漸夫ヨリ手輿ヲ調ヘ、森田ノ陣所ヘ搔付養生ヲ仕立申セシナリ、

●同子年、於美濃国大牆　家康公ト石田殿防戦ニ付世上サワカシキ折節、　武庫様（義弘）上方ニ御坐有シ間、忠利可罷登ノ由申上シカハ、従京泊出船セヨト被仰付、鹿児嶋船ヲ可被遣通承ル故、彼船ヲ相待シニ、漸九月十六日ニ彼船京泊ニ着津ス、同十七日ニ致出船、罷登リシニ、ハヤ九月十五日ニ大牆ノ防戦アリ、然間世上サワガシク成立、加藤・黒田・七嶋衆其外諸勢出水表ヲ可被破催ニテ被押寄セ間、出水城ヲ取構、御番被成ニ付、左近兵衛尉亙ハ庄内ニテ深手ヲ負、未其手不調シテ手足不行歩ニ有シカトモ、出水表ヘ可罷立旨就被仰付罷立ニ、敵大勢サシムカイシ米津ノ番ヲ仕レトテ、人数少々一日一夜宛被入替番ニテ有シニ、其番ノ主取トシテ牆ノ一重モナキ所ノ番ヲ申届、敵皆々引退シ以後、霜月廿五日ニ罷歸也、誠ニ一大事ノ番所ヲ被相調由、諸人モ被仰シナリ、

（本記事中ノ「●」印ハ朱書ナリ）

○三二　内裏勤番帖写

内裏勤番帖

一番

少輔三郎　戸次丹後守

渋谷河内検守（ママ）　井本大在房

田中備前房

二番

大宰小貳　常陸守

武藤豊前守　依田右衞門尉

郷良（憂）庭修理入道　飯川縫殿允入道

指宿郡司入道

三番

大友式部丞　出羽左近蔵（ママ）入道

渋谷下總太郎　飯尾隼人佐

安藤新三郎　山城兵庫入道

斉藤弥二郎

（本文書ハ宰府勤番帖カ）

○三三　指宿内蔵助覚書

覚

御系圖一通并文書数通之寫、多年以懇望、此節頂戴仕候、永々致秘蔵、神文之旨ニまかせ、雖為親類披見為仕間敷候、以上、

同性（姓）内蔵助（花押）

（花押ノ上ニ角朱印ヲ捺ス）

延寶二寅

八月拾七日

指宿左近兵衞尉（忠眞）殿

○三四　本心鏡智流鍵鎗曲尺合極意書

（三四の一）

右極意曲尺合之條々、口傳之趣相傳申候而茂、急に其侭事能なり申にてハ無之候、乍然数百度稽古候得者、事理ともに手足に能染付申候、左候得者、如何様成剛敵にも勝候事也、

梅田九左衞門

寛政十戊午年
七月吉日
指宿鐵之助殿

（名字ノ上ニ朱印ヲ捺ス）
盛香（花押）

（三四の2）
相續依信仰令傳授之者也、

梅田九左衞門

（名字ノ上ニ朱印ヲ捺ス）
明教（花押）

文政元戊寅年
八月吉日
指宿十郎右衞門殿

（紙継目）

（三四の3）
（前欠カ）

壱尺ノ曲尺をねらひ、箭を以甲を射貫と思を志にて仕掛突へし、口傳、

第四　十文字・薙刀・小太刀・無刀、このしな〳〵皆以一圓宗取上ケの仕掛、壱尺の曲尺を志し、突かけ突へし、

第五　間積の心得口傳有之、但シいまた間遠キとおもふ時、はやくとりあけ曲尺江突込事、口傳、

第六　身の曲尺、釣合掛引稽古なるへき事、口傳、

第七　位突に仕掛、後のせり付仕寄仕掛やうの事、口傳、

第八　連懸に仕かけ時節心もち大事有之、口傳、左右の掛出シ曲尺合附リ鍵を押候時仕拂、口傳、

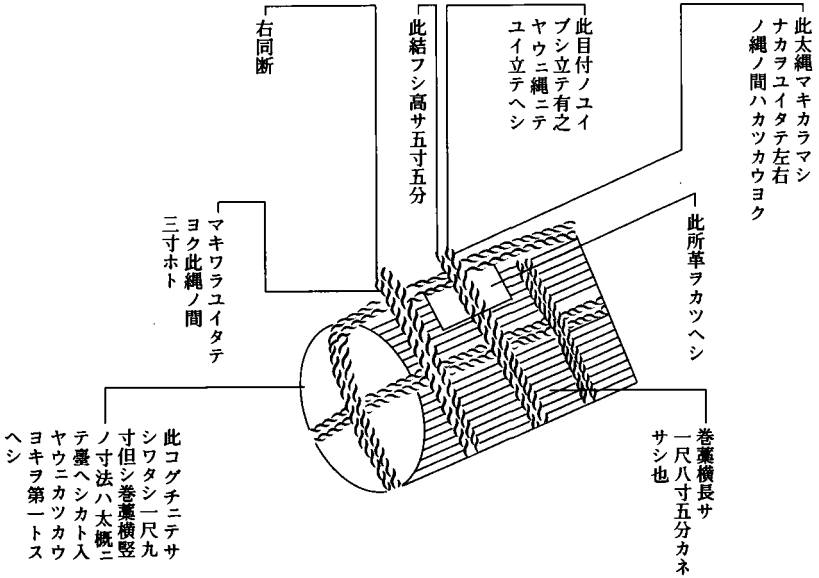
第九　前後の張同摺、手のうち并に足の蹈込出稽古の事、口傳、

第十　鍵鎗・直鑓にても、十文字・薙刀・小太刀・無刀、突様仕掛色〻有リ、稽古なるへき事、口傳、

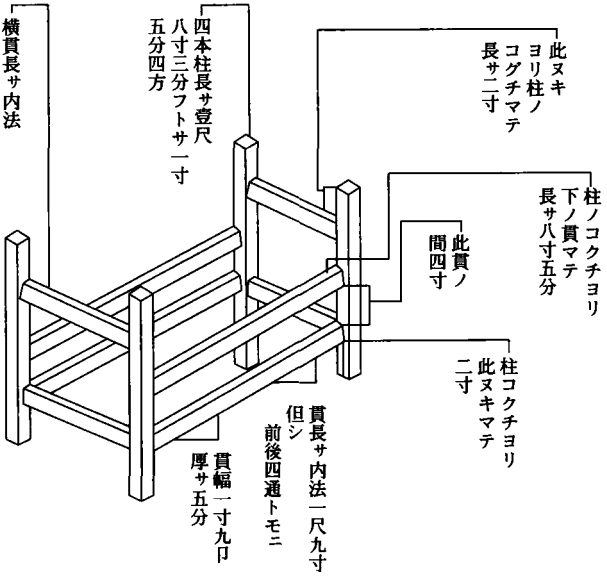
以上

（紙継目）

（三四の4）

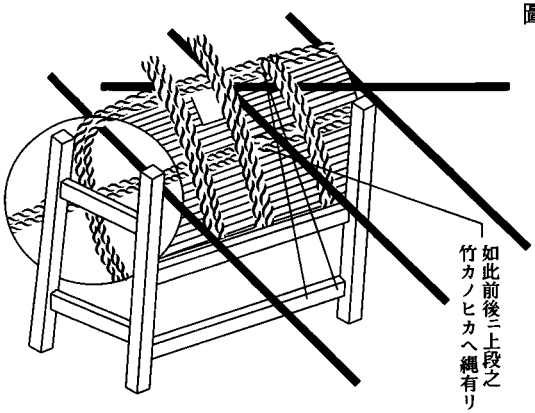


巻藁臺之圖



右、何レモ寸法曲尺サシ

巻藁仕立之圖



晴天　春の日の夕をかけてくりかへし

遊絲　はれたる空にあそふ糸ゆふ　齊宣

奉納　文化五年閏六月六日　法華嶽寺

○三六　指宿忠利関係記事

為國ノ忠良ト一點心
經ニ論シテ世務ニ費ツイヤス精神ヲ
若夫海濤澄徹静　費ツイヤス
萬年傳誦シテ播ニ芳茗ヲ　徹通トヲル
龍涯居士為下　徹スム水澄
指宿忠利将軍上　濤ハイカルミナ
播ハヒコル
ホトコス

（本記事ハ二点アリ、省略ス）

○三七　太守御巡見ニ付覚

（本文書ハ省略ス）

（本文書ハ「旧記雑録拾遺家わけ七」本田文書六六・六七号文書トホボ同文ナリ）

○三五　島津斉宣和歌（短冊）

毎夜　偽りとおもひなからも夜な〳〵ハ
待戀　たえぬ心にまたれもそする　齊宣

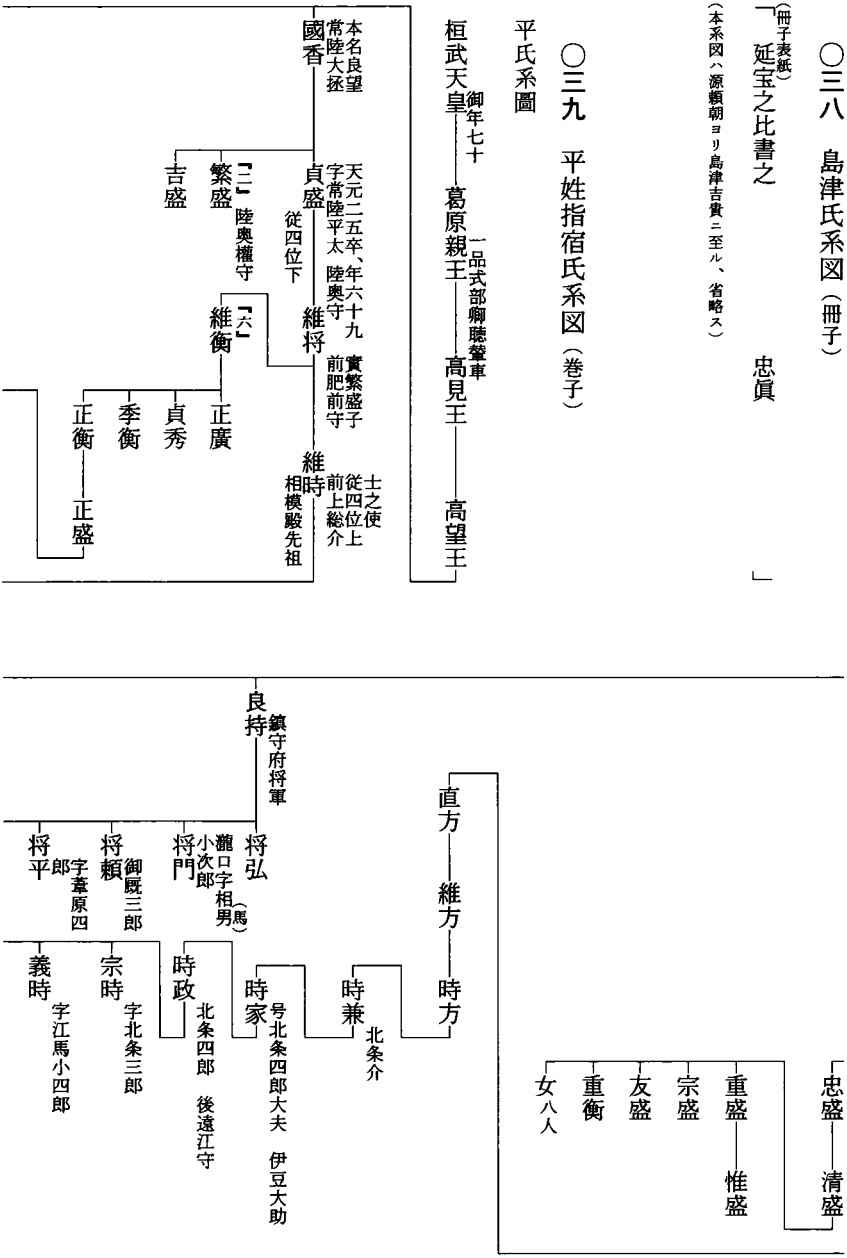
○三八　島津氏系図（冊子）

（冊子表紙）「延宝之比書之　　忠眞」

（本系図ハ源頼朝ヨリ島津吉貴ニ至ル、省略ス）

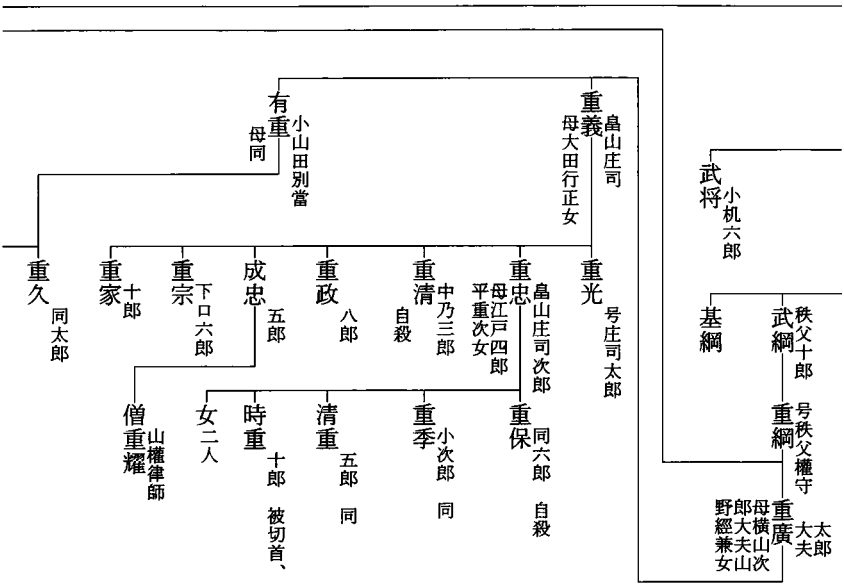
○三九　平姓指宿氏系図（巻子）

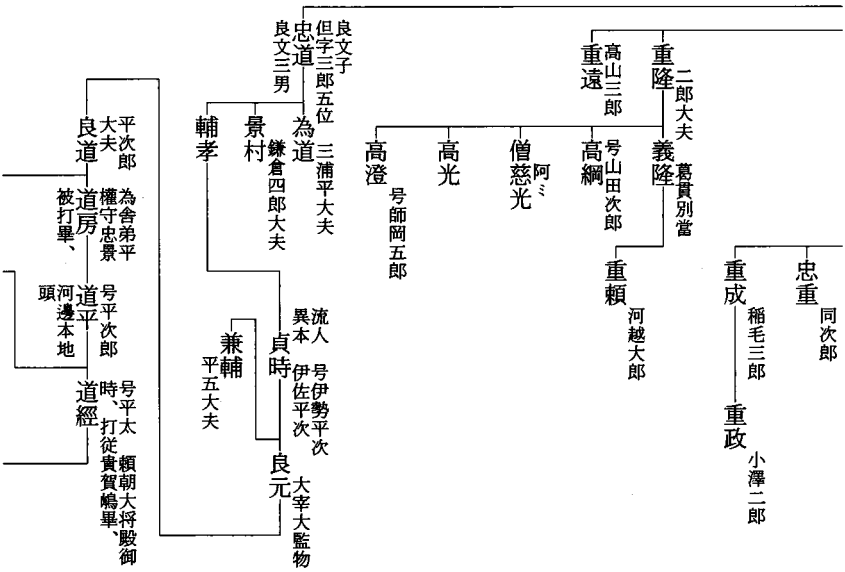
平氏系圖

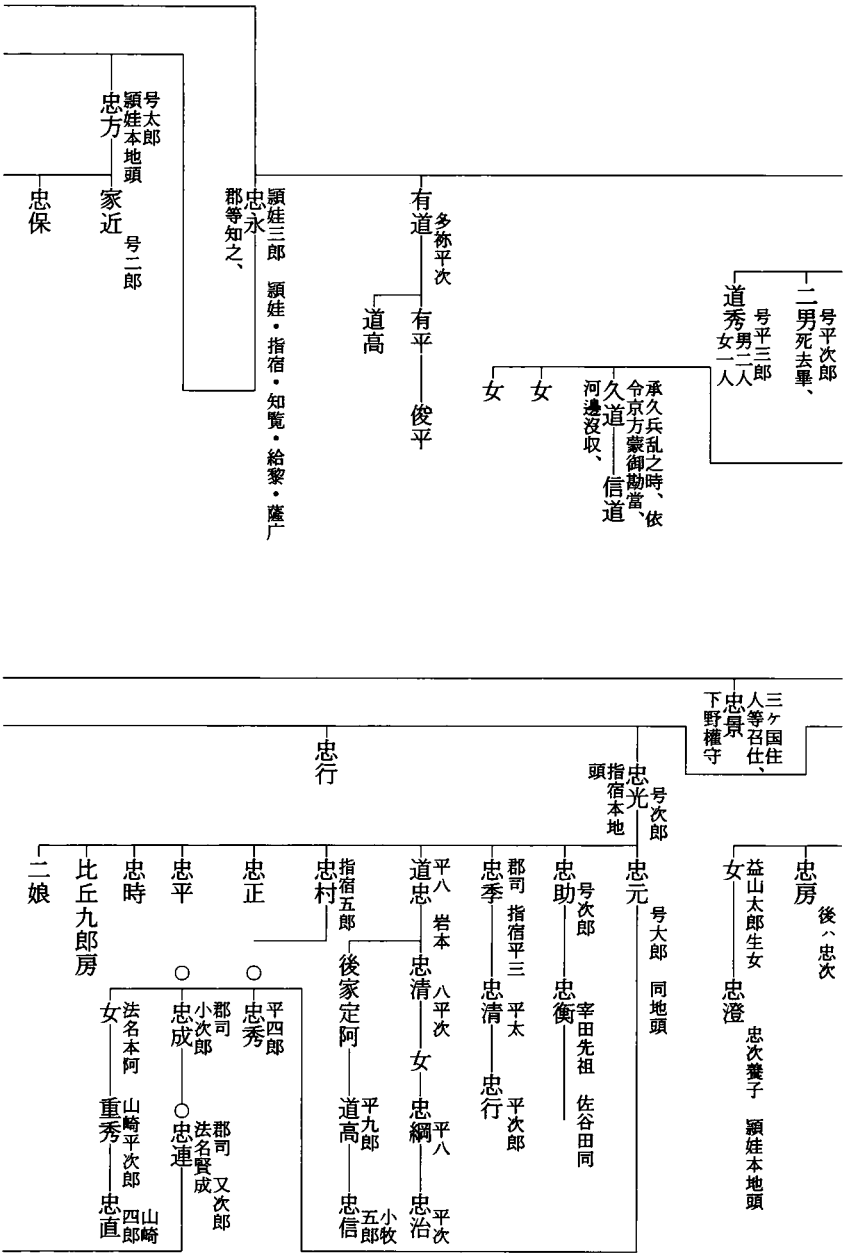


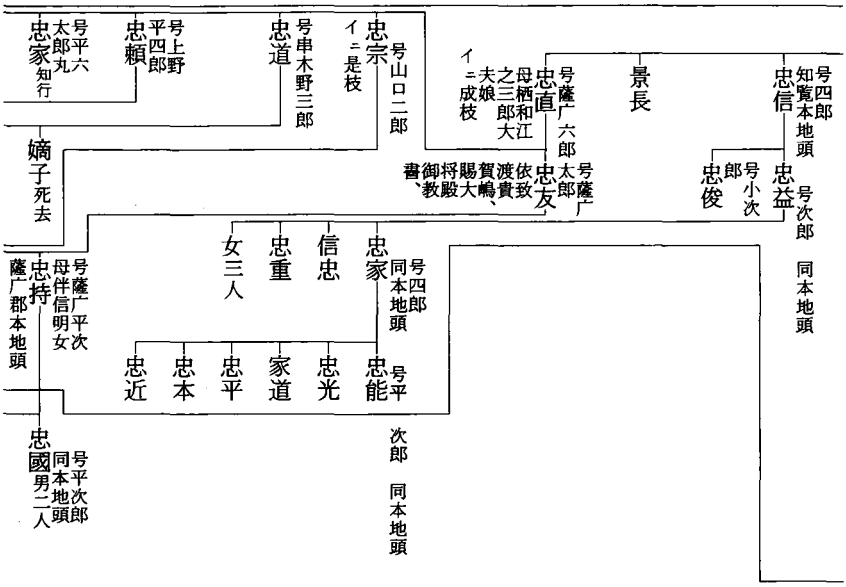
良正 下総介
良兼 『三』 陸奥大拯 従五位上
公雅 『一』 字六郎大夫 前武蔵守 従五位上
公連
公元
将種
将風
将文 相摸介
将兼 号八郎君
将武 号九郎君
将成
将柄
将為
時房 字北条五郎
政範 修理權大夫
女 右大将頼朝室 頼家實朝母 号二位家（ママ）
女 武蔵右衛門佐源朝政室
女 足利上総介室
女 阿野法橋全成妻
女 畠山重忠室
女 稲毛三郎重成法師妻
女 宇津宮弥三郎頼經 法師室
女 大納言實宣室
女 大岡判官時親妻
女 河野四郎通信妻

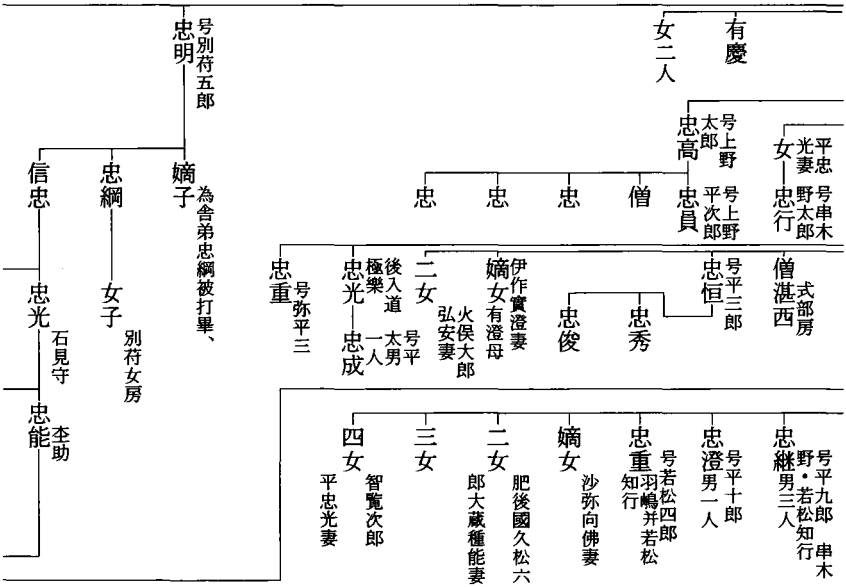
良氏 『七』
良文 字邑岡五郎 高望王子 『一』
良廉 『五』 下総介 五位 武蔵權守
経邦
良繇 『四』 従五位上 鎮守府将軍
忠輔
忠頼 『二』 陸奥介
忠恒 前上総介 武蔵押領使
将恒 従五位 武蔵權守
武基 従五位 字秩父別當
武家 与父合戦為重綱被打畢、殆荒大夫
家綱
恒将 上総介
恒親 『三』 安房押領使
恒益 『一』
恒仲 『二』 字安房七郎
僧頼尊 『四』 字山野 山邊 邊禅師
常永 五位 字千葉太郎
恒直 字垣生次郎 承暦四年為兄常永被殺害、
常家 坂太郎
常包 従五位下
致遠 従五位下 元近江拯
僧覺連 阿〻 東寺
致 五位大宰大監 『六』
致仕
致秋 出羽守 従五位下 『一』
致成 元瀧口 従五位下 『四』
致頼 『五』 元備中拯 長保元年 依与維衡、合戦事、配流壹岐、國寛徳八年、六十八
公致
致道
公親
公經
公範
致經 『一』 左衛門尉 字大夫前
致俊
親致 左衛門尉

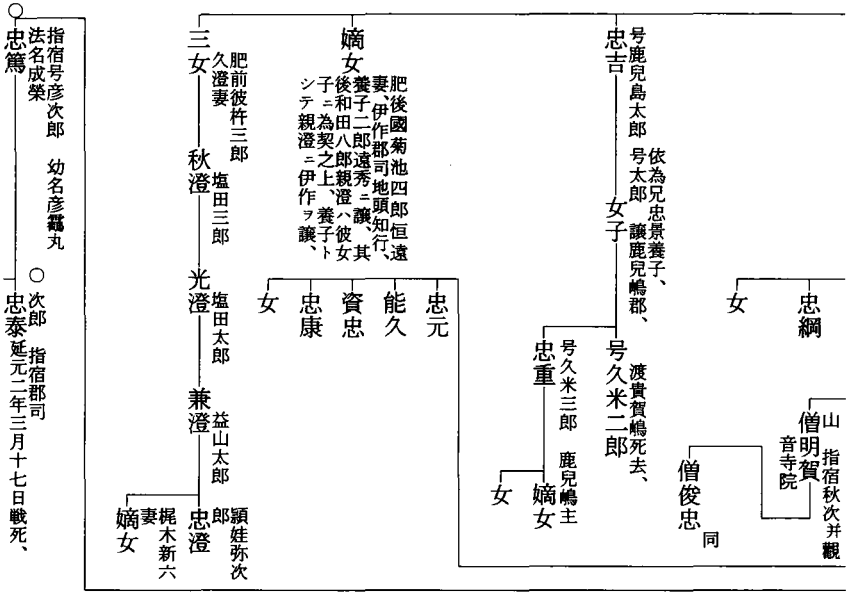

武将 小机六郎
基綱
武綱 秩父十郎
重綱 号秩父權守
重廣 太郎大夫 母横山次郎大夫山野經兼女
重義 畠山庄司 母大田行正女
重光 号庄司太郎
重忠 畠山庄司次郎 母江戸四郎平重次女
重保 同六郎 自殺
重季 小次郎 同
重清 中乃三郎 自殺
重政 八郎
成忠 五郎
重宗 下口六郎
重家 十郎
重久 同太郎
有重 小山田別當 母同
僧重耀 山權律師
女二人
時重 十郎 被切首、
清重 五郎 同


重隆 二郎大夫
重遠 高山三郎
義隆 葛貫別當
高綱 号山田次郎
僧慈光 阿ミ
高光
高澄 号師岡五郎
重頼 河越大郎
忠重 同次郎
重成 稲毛三郎
重政 小澤二郎
忠道 良文子但字三郎五位 良文三男
為道 三浦平大夫
景村 鎌倉四郎大夫
輔孝
貞時 流人異本 号伊勢平次 伊佐平次
兼輔 平五大夫
良元 大宰大監物
良道 平次郎大夫
道房 為舍弟平權守忠景 被打畢、
道平 号平次郎 河邊本地 頭
道經 号平太時、打從賀鳴畢、頼朝大將殿御


忠保
忠方 号太郎 頴娃本地頭
家近 号二郎
忠永 郡等知之、
頴娃三郎 頴娃・指宿・知覧・給黎・薩广
有道 多禰平次
道高
有平
俊平
女
女
久道 承久兵乱之時、依令京方蒙御勘當、河邊没収、
信道
道秀 号平三郎 男二人 女一人
二男 号平次郎 死去畢、
忠景 三ヶ国住人等召仕、下野權守
忠行
忠光 号次郎 指宿本地頭
忠元 号大郎 同地頭
忠助 号次郎
忠衡 宰田先祖 佐谷田同
忠季 郡司 指宿平三
忠清 平太
忠行 平次郎
道忠 平八 岩本
忠清 八平次
女
忠綱 平八
忠治 平次
忠村 指宿五郎
後家定阿
道高 平九郎
忠信 小牧五郎
忠正
忠平
忠時
比丘九郎房
二娘
忠秀 平四郎
忠成 郡司 小次郎
忠連 郡司 法名賢成 又次郎
女 法名本阿
重秀 山崎平次郎
忠直 山崎四郎
女 益山太郎生女
忠澄 忠次養子 頴娃本地頭
忠房 後ハ忠次


忠家 号平六太郎丸 知行
忠頼 号上野平四郎
忠道 号串木野三郎
忠宗 号山口二郎 イ＝是枝
忠直 母栖和江之三郎大夫娘 イ＝成枝
景長
忠信 号四郎 知覧本地頭
忠友 号薩广六郎太郎 依致渡貴賀嶋、賜大将殿御教書、
忠俊 号小次郎
忠益 号次郎 同本地頭
嫡子 死去
忠持 号薩广平次 母伴信明女 薩广郡本地頭
女三人
忠重
信忠
忠家 号四郎 同本地頭
忠近
忠本
忠平
家道
忠光
忠能 号平次郎 同本地頭
忠國 号平次郎 同本地頭 男二人


有慶
女二人
忠明 号別符五郎
嫡子 為舎弟忠綱被打畢、
忠綱
信忠
忠光 石見守
女子 別符女房
忠能 李助
忠高 号上野太郎
女 光妻 平忠 号串木野太郎
忠行
忠員 号上野平次郎
僧
忠
忠
忠
僧湛西 式部房
忠恒 号平三郎
忠秀
忠俊
二女 後入道 号平極樂 太男一人
嫡女 伊作實澄妻 有澄母
火俣大郎弘安妻
忠光
忠成
忠重 号弥平三
忠継 号平九郎 野・若松知行 男三人 串木
忠澄 号平十郎 男一人
忠重 号若松四郎 羽嶋并若松 知行
嫡女 沙弥向佛妻
二女 肥後國久松六郎大蔵種能妻
三女
四女 智覧次郎 平忠光妻


指宿号彦次郎　幼名彦鶴丸
法名成榮
忠篤
○次郎　指宿郡司
忠泰延元二年三月十七日戦死、
三女
肥前彼杵三郎
久澄妻
秋澄
塩田三郎
光澄
塩田太郎
兼澄
益山太郎
忠澄
頴娃弥次郎
梶木新六
妻
嫡女
嫡女
肥後國菊池四郎恒遠
妻、伊作郡司地頭知行、
養子二郎遠秀ニ譲、其
後和田八郎親澄ハ彼女
子ニ為契之上、養子ト
シテ親澄ニ伊作ヲ譲、
能久
資忠
忠康
忠元
女
号鹿兒島太郎
号太郎
依為兄忠景養子、
譲鹿兒嶋郡、
忠吉
女子
号久米二郎
渡貴賀嶋死去、
号久米三郎
鹿兒嶋主
忠重
嫡女
女
忠綱
女
僧明賀
山
指宿秋次并觀
音寺院
僧俊忠
同
号能登守
法名了成
忠勝
指宿郡司并多祢嶋領主
左京助
忠之
掃部助
忠平
正忠
指宿郡司
女子
指宿郡司
師犬
指宿近江守
忠合
指宿并山川・鳴河領之、
頼忠
指宿郡司
三郎四郎　後木工介
朝忠
嶋津武久同薩摩守國久ト合戦、文明七年六月廿六日申剋於伊
作丹土尾打死、生年五十五才、子息平次郎次男四郎同時致合
戦早、三男三郎四郎ハ阿多ノ手向ニ加ル、同合戦仕早、
先彦衛門尉
後号源右衛門尉
忠清
先号又九郎
佐渡守
忠親

忠常

用忠
（ハリ紙）『自是新筆』
先号平次郎　改本介
女子　伊集院弥左衛門尉妻
光忠　四郎　イニ吉忠
元忠※　三郎四郎　光忠イニ
※（ハリ紙）「能登守―清右衛門―清左衛門忠政―内蔵助忠能清右衛門忠能」
僧　号丞麟

忠員　草路地頭

忠慶
女　安満

忠幸

忠家　指宿右馬允　丹後守
弘治元年乙卯正月廿二日夜、為嶋津貴久討死、利圓常貞

忠　指宿摂（ママ）河守

忠常　指宿丹後守　法名宗胡

忠次　指宿勘解由兵衛尉
於三山討死、

忠廣　指宿右衛門兵衛尉　改左近兵衛尉
法名松庵永椿庵主

忠賢　指宿權之介
法名常栄

忠利　指宿四郎次郎　改十郎右衛門尉　母ハ箕匂伊賀守女
朝鮮國殿仕畢、法名傑心昌英大居士

重隆
軍四郎　後改宇都弥七左衛門

- 重成　伊地知狩野介　幼名八郎次郎　箕匂伊賀守養子
- 女子
- 女子
- 指宿左近兵衛尉　幼名長千代丸　母者川野才左衛門通次女
- 忠眞
  - 四郎次郎　幼名長鶴丸　母者米良九兵衛尉女
  - 忠元堯（ママ）
- 忠　長四郎　改十郎右衛門尉　母者大脇孫兵衛尉女
- 忠　四郎七　母者右同
- 女子　田原弥次郎妻　母者中山勘右衛門尉女
- 元慶　長四郎　改四郎次郎　母者中馬仁右衛門尉女
  - 女子　土橋伊右衛門尉妻　母者谷口與右衛門尉女
  - 元　長四郎　早世　母ハ右同
- 元方　鐵之助　鐵左衛尉　四郎次郎　依長四郎早世養子、實ハ十郎右衛門尉二男　母ハ中馬仁右衛門尉女（ママ）

- 女子　有屋田治兵衛尉妻　母者田原十右衛門尉女
- 元武　茂平太　十右衛門尉　母ハ長井七兵衛尉女
- 女子　河上笹右衛門　妻　離別　母ハ右同
- 元貞　文化十二乙亥正月十二日卒、法名春山道榮居士
  - 彦次郎　后十右衛門　四郎次郎　組頭　年寄補、明和四亥九月廿八日誕生、母ハ轟木為右衛門女　妻ハ中村源大左衛門女
- 光智　天保二卯九月十一日卒ス、法名淨本自性居士　七寅七月　明和四丁亥九月廿八日誕生、母ハ右同　妻ハ有屋田仲右衛門女
  - 女子　母ハ有屋田氏女　比志島三右衛門妻
  - 元房　性院女　寛政十一甲申四月十五日誕生、母ハ右同　妻ハ面高真元貞依無直子養子、
- 元房　彦治　十郎右衛門　實ハ十郎光智之嫡子也、
- 女子　面高真壽院妻　母ハ右同　面高氏女

彦次郎　鎮左衛門　補組頭

元治　文政七申六月十七日誕生、母ハ右同
妻ハ玉利周助女

元東　彦千代（ナツ）　本之介　嘉永五子六月廿九日誕生
母ハ玉利氏女

元超　鎮之助　壽助　安政二辰正月元日誕生、母ハ右同

（本系図ノ野線及ビ「〇」印ハ朱書ナリ）

（本系図ハ現在指宿市考古博物館ニ所蔵サル）

笠間文書

○　一　島津久通書状

尚〻馬之儀者六ヶ敷候ハんすれ共頼存度候、以上、
新年之御慶珎重候、然者昨日子息喜兵衛殿　弾正様（島津久慶）　御
使として被差越候処ニ、致他行不能向顔儀、遺恨ニ令存
候、何様貴老前より心得頼存候、御書之御請も持せ候間、
慥ニ御受取尤候、随而者、前ニ頼候馬も今少頼申度候、
隙之時分引せ可申候、恐〻謹言、

正月五日　　圖書頭
　　久通（花押）

笠間主計助殿
　御宿所

○　二　島津久通書状

猶〻今日者天氣悪候而千万残多存候、此中我等可罷
登由候而、御鹿倉御立させ候由、辱存候、已上、
一書申入候、然者藤川浦御狩倉ニ犬山へ可罷越之旨申入
候処ニ、于今御立させ之様ニ承、昨日不圖打立、罷登候
へ共、天氣悪候故先罷帰候、前ニも若衆も御登之由御大
儀ニ存候、今日者致滞留、明日之天氣見合度存候へ共、
母此十日程氣色悪候、三日者些度快氣申候へ共、未晴〻
とも無之候間、左様成ニ付罷帰候、将又近日中ニ麑嶋へ
可致参上候間、帰来之刻罷登可申承候、恐〻謹言、

三月四日　　圖書頭
　　久通（花押）

笠間主計助殿
　御宿所

○　三　北郷久盛（久精）書状

猶〳〵我等も親類煩ニ付御暇申、今月初より平佐ニ
罷在候、頓而鹿児嶋へ可致参上覚悟にて候、
態用一書候、然者貴所事落馬之由傳承候、笑止千萬ニ存
候、此比如何御座候哉、為可承書中如此候、将又此度鹿
児嶋にて又〻御犬追物可有之由、下〻致風聞候ニ付、手
前然〻之無馬にて方〻相尋躰ニ候、如何様近日中ニ以面
上細〻可申合候、恐〻謹言、

北郷作左衛門
　　久盛（花押）

卯月廿八日

笠間主計助殿

御宿所

○ 四　喜入忠続書状

以上

懇書披見申候、如来状、當分　大膳正様（久豫・久憲）其地へ被成逗留、目出度存候、玄養送、其以後者安藝守様向田へ御座候故、方々へ見廻共候て殊外御大儀と存事候、無事遊之由承、満足申候、弥其地被入念、御ひゐなくあふなき御遊ひ共無之様可被申上候、爰元湯治ニ身も心安成て一段事候、仍後日可致帰宅間、従彼方可申入候、佳事、謹言、

五月一日　　喜摂津守忠續（花押）

笠間主計助殿　返報

○ 五　桂忠増書状

猶以鑓之ゐ無御失念御持せ預候事、御礼難申盡候、

以上、

御状忝令披見候、仍而頼存候鑓之ゐ五本、態遠方まて御持せ、何共忝存入候、御帰宅之時分、於此方ニ細々御礼可申入候、右御返弁之儀、御用之刻以前ヲ可被仰聞せ候、少も別儀有間敷候、此旨兵具奉行中へも御方より可被仰渡候、恐々謹言、

桂大外記

九月五日　　忠増（花押）

笠間主計助殿

○ 六　川上久慶書状

三日者不懸御目候、昨日者　弾正様より御用之由候て、御使被下候得とも、犬之馬場ニ罷出ニ付祗候不申候、然者志摩守ヲ節々被召寄之由傳承候、彼者事ハ　殿様御打立之砌仕違申候、吾等も中違為申事、無其隠候、然処ニ細々被召寄事、無御心元存候、左様成ニ付、御用御座候時分祗候申ましく候間、以時分可然様ニ御申被成可給候、恐惶謹言、

神無月廿六日　　久慶（黒印）

（端裏ウハ書）

「　　川上十郎左衛門入道
（墨引）笠間主計助殿　　久慶　」
人々御中
（本文書裏書アリ）

○七　島津久慶書状

猶々道□（智ニカ）申付、藥調合させ相越候、以上、

氣色悪敷由申来、無心元候、先日眼色労衰之様ニ見及候ニ付而、脉を取候処ニ不應老人ニ脉盛候キ、不食候由咲止ニ候、兼而養生可入候、連々分限ニ不相應ニ手まハりをも誘、何より白髪者家中之かさりニ而候、今少無病ニ可有之様ニ内々保養専要候、かしく、

二月七日　　久慶（花押）

（墨引）

○八　島津久慶書状

覚

○一馬をしづむる事

右は我心をしつめたるがよく候、

大坪百首之秘歌之内に

過物に心手の内くらの下鐙をふむも女房ぞよき

右逸歌也、心も手の内もくらの下も鐙も也、此もの字一ッにて知へし、秘へし〳〵、

○一馬をいさむる事

右は我こゝろをいさむるへし、めるとはつ（っ脱カ）との二ッにて候、他に求むへからす、心の所用也、

一心の踏をかけてのる事

右ハ山路ほそ道なとにて、石のあハひ〳〵に馬の足をふミ入させて、無油断乗ゆけば爪をも不損との習也、さして右両條ニは不混、誰も知たる事ながら、山舎のかよひハ石おほく候故、當時可入と書付候、已下、

慶安二年
二月彼岸　　久慶（花押）

笠間伊織とのへ

○九　島津久慶書状

(前欠カ)
肝要候、此比此表殊之外大キ成ロ事有之候、題目之御
衆御ひいき□一方ハ非にて理ニ成、一方ハ以理埋候
を北郷佐州(久加)なと内々申合、頴左馬(頴娃久政)殿同心にて御ひいき
ノ御衆之前にて有筋を申候へハ、此ロ事被聞□衆皆々
一同ニ被申合、今ハ直ニ成さうニ候、一昨夜　御□
□利ロを申候哉と御尋候間、主人より別ニおそろし
き人ハ持不申候、乍去世上ハ憎□も縮意も昔よりお
そろしくは申傳候へ共、主人をよそニなし申候而脇ニ
つくろい申たると申事、いつれの言部ニもほめて置不
申候間、存ル所不残出ル詞(イダシコトハヲ)申候由申上候、無隔心候間、
かやうの儀申習以他言有間敷候、
一百姓ロ事出来候而及喧嘩候由申来、仲元寺よりも□(存カ)分
共有之由候、今少致工夫可申哉と存候、此状即火中□
□返書ハ尤半助あて書越候、かしく、
(十カ)
□月十六日　　(島津久慶)(花押)
笠間主計とのへ

○一〇　笠間良秀書状

猶々造次顚沛にも於爰元ニ忝さ無忘失難謝奉存候、
次ニ私儀にて六月以来不行歩罷成候而、杖にても隣
家之見廻不罷成候、様子ハ四十年前膝に鉄炮之玉あ
たり申候、其玉か鈴にて御座候つる哉、鉄にて候哉、
知不申候、其疵之辺より腫申、足のうら迄腫申候、
内藥之法を左近所へ哀〳〵被　仰下候へかし、誠に
おしからぬ身上にて恐多申上事ニ候へ共、此旨以御
機嫌可預御披露候、以上、
去々年以来ハ不思儀之御縁にて御下國被遊、誠々御窮屈
之御様躰ニ候処ニ、弾正被成御保養、過半被得験氣、家
中之者共満足大慶不可過之候、偏〳〵御影難有奉存候、
吾々式迄不似合推参のミにて忝尊情共且又不奉忘失候、
あまりの御なつかしさに
月の入山のは近き身なからも
心は花の都にそすむ
又嶋津主計公と御契り之ほとをうけ給及候而
ちきり置し言のはいかに都人

かへりて花の宿に忘るな
久松かもとの心を
月日はやなかれ行とも水かきの
久松（ヒサンキ）の木陰わするな

さて〳〵さし出かましく候へ共、老耄言語道断、万般被成御免可被下候〻〻〻、書中恐入候、来夏ハ御下國、乍恐奉待候、大膳儀も無事にて爰許へ罷在候、山野海川之慰迄にて、学文無沙汰候、従尊方も被思召出候時分ハ、以御状学文可仕旨被仰遣可被下候、とかく幾久向後ハ被懸御意候ハて不叶儀ニ御座候間、万〻不顧憚如此候、貴様御事を菊の花によそへ奉候と大膳へ申聞候へハ笑被申候、いく久しくとそゆハひぬる藥と菊の花の御影を大笑〻〻、恐惶百拝、

笠間主計助
良秀

七月廿三日

謹上
玄養院御□

御近習中

○一一　島津久慶達書

笠間主計助へ申聞條〻

一我幼少之時、側へ可召置小姓共無之而誰人へ雖申付、若輩之主人をあなとり、おもひ〳〵に侘言を申取不應其意、近習も不参候處、二男休七事差出候、神妙之至ニ候事、

一先年御犬追物有之而、初而公役相勤候時分、連〻馬を嗜候、直用ニ立候、并此節も為御軍役不應知行馬共餘多求候、是又神妙候事、

一自前〻指南奉公不惜其身、遮而侘言不申相問目申候事、右之外少〻差過たる不足分別儀も雖可有之候、左様成者弥可相嗜候、此等之旨為可申、少加増遣候、堅可被申渡候者也、本田喜左衛門尉・肥後十左衛門尉ニ東郷形（刑）部少輔を相添可被申聞候也、

已上、

霜月十日　申

冠嶽頂峯院文書

（冊子表紙）
「冠嶽山鎮國寺頂峯院文書並縁起写
冠嶽山鎮國寺頂峯院来由記〔I〕」

（中表紙）
冠嶽山鎮國寺頂峯院文書並縁起写
串木野

○一　地頭大前某下文

『此所文字闕ル歟』冠武（嶽）住僧等所
可早東谷山主職事
右、以成賀聖人、補任件職畢、仍山内住僧等、随彼命、月並恒例佛事懃行之次、可奉祈國吏荘方并地頭息災安穏之由、（加カ）如之於開發田之所當者、充行五節供料畢、後々将来全不可相違之状如件、
壽永二年八月　日
地頭掾大前宿祢在判

（本文書ハ「旧記雑録前編一」七五号文書ト同一文書ナルベシ）

○二　口宣案

上卿　中御門中納言
文明十四年十二月十一日
宣『宣字ノ下旨字摺テ不見』
大法師澄久
宜（任）権律師
蔵人頭右中辨藤原元長『長字歟』『欠テ不見』
右二通一巻

○三　島津忠宗施行状

異國降伏御祈事、去十月廿七日関東御教書今月廿日到来、

案文如此、如状者、薩摩國一宮國分寺宗寺(為脱カ)社、殊可致精勤之由相觸之、可令執進巻数早者、任被仰下之旨、可被致御祈禱忠候、仍執達如件、

正應五年十二月廿一日　『四代太守忠宗公』左衛門尉御判

冠嶽別當住僧御中

（本文書ハ「旧記雑録前編一」九六四号文書ト同一文書ナルベシ）

○ 四　島津道義忠宗書下

冠嶽霊山寺別當代賢賀申、於社頭致狩猟、乱入神領成煩(旧本ノ)由事、訴状副具書、如此、事實者、甚無其謂、早任先度奉免状、不可成違乱、次甲乙人等狼藉(藉)事、可加制止也、向後有違犯之輩者、可處罪料(科)之状如件、

嘉元三年後十二月十五日　『忠宗公御法号』道義御判

中條平内左衛門入道殿

（本文書ハ「旧記雑録前編一」一〇九九号文書ト同一文書ナルベシ）

○ 五　島津師久補任状

補任

薩摩郡内先達職事

右、於彼職者、充行所冠嶽榮永也、早任先例、可令補任状如件、

康安弐年八月廿五日　『六代太守師久公』師久御判

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一〇八号文書ト同一文書ナルベシ）

○ 六　島津氏久立願文

冠嶽權現御寶殿修理事

右、為凶徒退治、立願如件、

貞治六年七月廿四日　『六代太守氏久公』修理亮氏久御判

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一七八号文書ト同一文書ナルベシ）

○ 七　島津玄久氏久書状

御札委細承候畢、抑去夏被入見参候之条、悦存候、便宜時者、連々可申候、兼又承候奉加事、進之候、巨細御使申候之間、令省略候、恐々敬白、

九月廿四日　『氏久公御法号』沙彌玄久御判

謹上　冠嶽別當御坊
御中

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一七九号文書ト同一文書ナルベシ）

○八　冠嶽権現領坪付

権現領　坪付

薩摩郡之内

大牟田　一町
数余木　一町
鴉田々　一町

右志趣、為子孫繁昌也、
（至徳）
正應元年十二月　日　　（島津氏久）沙彌玄久御判

『包紙』
謹上　冠嶽別當御坊
御中

（本文書ハ「旧記雑録前編二」九〇九号文書ト同一文書ナルベシ）

○九　栄永置文

『張紙ニテ「氏久御夢想御書物ニ付御判在」』

権現領　坪就

島津修理亮氏久至徳元年ニ依夢想、正應元年ト薄紙半枚書付申、于社頭納ラル、後日之不審タメニ付置ナリ、

至徳元年十二月　日　　栄永在判

（本文書ハ「旧記雑録前編二」四三二号文書ト同一文書ナルベシ）

○一〇　島津孝久（元久）寄進状

奉加　冠嶽山社壇
馬一疋

右、為彼御寶殿造營、奉加如件、

至徳二年十月十一日　　『樺山家四代美濃守』藤原孝久在判

『元久公初ノ御名ナルヘシ』（伊地知季通筆カ）

（本文書ハ「旧記雑録前編二」四三八号文書ト同一文書ナルベシ）

○一一　大江景遠・沙弥道意・又六連署奉免状

奉免
薩摩郡串木野村内冠嶽両山神領田畠山野等事

右、當所者、熊野垂跡之砌、大權薩埵之栖、為長日不退御祈禱所之間、於件田畠山野等、領家御方地利物以下者、任先例、依仰所奉免如件、

永仁五年十月廿八日　『姓名不詳』又六判在

『忠宗公御代守護代』『本田左衛門次郎入道道意歟』沙彌道意判在

『姓名不詳』大江景遠判在

（本文書ハ「旧記雑録前編一」一〇一七号文書ト同一文書ナルベシ）

○一一二　島津伊久補任状

補任

薩摩國串木野村内冠嶽東谷西嶽▽(支)両山△別當職事

右、於職者、所(支)充行榮永也、早任先例、可令補任之状如件、

應安六年三月十二日　『師久公御子上総介伊久』伊久判在

（本文書ハ「旧記雑録前編二」二五一号文書ト同一文書ナルベシ）

○一一三　島津忠朝寄進状

敬白

奉寄進冠嶽山三所權現、限永代薩摩郡内天辰谷口参段亘右、寄進志趣、偏只為天長地久御願圓満、且為家、且為當代弓箭、且為子々孫々、或郷内安穏、或諸人快樂、為取分息災延命、恒受安全、朝夕之祈禱奉憑故也、依志趣如件、

應永十四天ひのとの亥二月九日　『上総介伊久二男』嶋津山城守藤原忠朝在判

（本文書ハ「旧記雑録前編二」七六〇号文書ト同一文書ナルベシ）

○一一四　島津忠朝立願文

敬白

冠嶽山三所こんけんにりうくわんの事

右、こんとの世上目出度候て、弓箭のうんをひらき候ハヽ、よせ田しほ入の本寄進の事かへし申へく候、かさね候て一所(支)寄奇進申へく候、せい〳〵の御きたうをいたされ候へく候、仍くわん書如斯、

應永十四年ひのとの亥八月廿一日　島津山城守藤原忠朝在判

（本文書ハ「旧記雑録前編二」七六四・七六九号文書ト同一文書ナルベシ）

○一五　島津道世忠朝安堵状

冠嶽權現御供田

薩摩國薩摩郡之内勝目迫壱町如本返付申候了、

右、件在所者、早守先例、可有領知（支状）如件、

應永十九年二月廿八日　『山城守忠朝法号』島津道世判在

（本文書ハ「旧記雑録前編二」八七一号文書ト同一文書ナルベシ）

○一六　伊集院熙久寄進状

敬白　冠嶽權現

奉寄進

薩摩國伊集院大田之内一町、次粟（支栗）毛馬一牽

奉寄所也、

右意趣者、敵悉退治為本願、立願如件、

長禄三年八月六日　『伊集院家七代大隅守』伊集院熙久判在

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一三七八号文書ト同一文書ナルベシ）

右十三通一巻

○一七　平忠道寄進状

薩摩國薩万郡内串木野村領主平忠道謹辞

奉寄冠嶽新別墅霊山寺『本書坐字ニ作ル誤歟』被暁持（朱線）『被暁持三字不詳』當居住之私地壹曲事

但四至如城（ママ）也、

右、尋彼山者、彦山權現御本山、既送七百餘歳之星霜、遠者本朝奇異霊地、近者當國无雙勝地也、抑此嶽為躰、四明霧晴、生死長夜忽曉、谷霊水清澄、煩悩塵垢早被洗、『本書塵字歟不詳』實極樂東門、為西方便道云々、爰一人聖人隠居既卅年、偏望西方浄刹、而間齢及八旬、建立一宇伽藍、号云霊山寺、安置之彌陀佛像、勤修之、毎月十五日一晝夜不断念佛、爰忠道随喜之哀之、為末代佛事相續、停止万雑公事地利物、莫大功徳何事如之哉、且為正朝外朝國吏泰平、且為忠道現當二世悉地成就圓満、限永代寄進畢、仍於彼聖人趾跡、相継弟子同法者、敢至于子々孫々、不可致其妨之状如件、

承久弐年庚辰八月　日

「串木野三郎殿」平在判

『串木野三郎平忠道』

（本文書ハ「旧記雑録前編一」二六七号文書ト同一文書ナルベシ）

○一八　成阿申状

鎮西九州薩摩國薩摩郡内冠峯靈山院大檀那成阿彌陀佛敬白、

中峯并靈山院興隆佛法子細事

夫以、釋尊者、早隱壇戒之質、示涅槃、慈尊者、更疊智弁之衣、幽億劫、流轉生死之習、電光朝露之悲有待、依身寧難遁者乎、爰今予遁世之志銘於心肝、念佛之懃切於九廻、倩案事情、任入於深山、思惟佛道誠説、随寂莫无人聲、讀誦此經典金言、去以文治五年己酉九月二十八日、入中峯之靈崛、聊結草菴門戸之形、雖企堂舎土木之營、一鉢空底、三衣該寒、誰人尋之、何類訪之、雖然仰三寶『本書也字歟』冥助、馮護法善神許也、依之建立一間四面堂舎也、同年二月十六日隱居于當山、然間感應至時、縁熟應節、同年以十月二十七日、奉迎金色彌陀三尊、彌修念佛三昧之行、所欣日夜彌陀浄土、所厭寤寐娑婆世界、始自年齒四十、不下藜落、敢不宿在家之荘、『。本書荘ニ作ル誤歟』前後合四十三年之山籠也、承久一年（ママ）庚辰、依大佛殿詣之志上洛、以後改中峯舊室、大冠中腰卜居、志趣何者、臨蒼海、凌波、修日想觀、早諍肉髻光、入瑜伽道場、凝月輪觀、翫心中佛性、然而高城郡領主伴信康朝臣、依為竹馬入室師弟、以嘉禄二年、奉寄當山紙宿浦、子細具于彼状也、以寛喜元年己丑、建立一間四面堂舎、安置金色彌陀三尊、同二年庚寅十一月十六日、供養遂之、所以屈无縁浄侶、『本書嵶字誤歟』二季轉讀大般若者、殊當國　國吏并下総守經秀朝臣致御祈禱、兼生涯不斷念佛効驗寔可量哉、彼浦自然雖有、新開田地、非愚分度世以上分米、弁備佛性燈油、或令支配不退念佛衆、全不及一塵已用者也、

哀哉慈覺大師常行三昧者、七晝夜當山念佛一生中、此則興隆佛法、廣作佛事、所願成弁慈尊覺悟故也、仍為明光跡、建立粗大略縁起如件、

○一九　惣地頭所下文

惣地頭所下　　先達延慶所
奉免峯(旧冠嶽)權現御寶前
　　薩摩郡内所々事
一所　成永名内せりか野壱曲
一所　太郎丸名内那良原壱曲
一所　本若松名内加治妻迫壱曲
一所　冨永名内川骨山常荒壱曲
右、件所々者、或依本領主奉寄之状、或任故惣地頭之免判之旨、所令奉免也、住僧等宜致式日之勤、可奉祈請天長地久由之状如件、以下、
　　寛元四年二月八日
　　惣地頭兼郷地頭〔代〕(旧ナシ)左兵衛尉『姓名不詳』在判

（本文書ハ「旧記雑録前編一」四三一号文書ト同一文書ナルベシ）

○二〇　源某奉免状

『是ヨリ口切レテ不見』
状欤、奉祈禱　聖朝外朝天長地久、殊國吏在廳官人等安穏泰平也、永止國衙之煩、以榮英之流、至于将来、無向後違乱、可令師資相承也、綺也、佛事也、後司争令後悔哉、仍奉免如件、
　　正應元年六月廿八日　　左衛門尉『姓名不詳』源在判
　　永仁弐年正月　日
　　従五位下行河内權守『高城氏』平朝臣重郷法名本佛

（本文書ハ「旧記雑録前編一」八九九号文書ト同一文書ナルベシ）

○二一　栄英・英海連署譲状

譲渡　冠嶽霊山寺領寄田浦内塩入壹町事
　　出羽阿闍梨榮増所
　　合水田壱町内早田五段荒田五段者
右、於水田者、往古霊山領也、仍榮英彼塩入壹(旧町)所於方々申立之處、雑掌用途於巨多榮増被助成之間、限永代所譲與也、然者停止万雑公事、至于子々孫々、無向違乱可被『後ノ字脱カ』領知也、但　朝家御祈禱大般若經轉讀之時、一季春季僧餞料米許於可被備進當山別當也、爰彼水田仁於致違乱之輩者、不可令知行別當職、仍無自門他門之違乱、限永代可

被領掌也、讓状如件、

正應元年十月五日　　冠嶽霊山別當榮英在判

僧榮海在判

（本文書ハ「旧記雑録前編一」九〇八号文書ト同一文書ナルベシ）

○二二　渋谷重門寄進状

『是ヨリ口切レテ不見』一町、数余木一町、以上弐町、為此之堺之合戦之祈禱、奉寄進冠嶽權現也、其外於山中可被止地頭之妨、宜可被存知此之旨之状如件、

正平廿一年九月二日　　『入来院氏』弾正少弼重門在判

冠嶽院主御房

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一六五号文書ト同一文書ナルベシ）

○二三　平忠資補任状

『口切レ物歟』御願圓満并忠資同子孫繁昌祈、可被致丁寧也、仍補『任字ノ誤歟』仁状（㊀領内）如件、

観應弐年四月廿日　　平忠資在判

『指宿太郎平忠資歟』

（本文書ハ「旧記雑録前編一」二三四五号文書ト同一文書ナルベシ）

○二四　能登守基久寄進状

奉加　冠嶽山社壇

馬一疋

右、為彼御寶殿造営、奉加如件、

至徳二年十月十一日　　『姓氏不詳』能登守基久在判

（本文書ハ「旧記雑録前編二」四三七号文書ト同一文書ナルベシ）

○二五　泰朝書状

依無題目候、久不申承候、心外之至候、聊非疎略之儀候、御同心候者本望ニ候、兼又此際無沙汰之通為申候、岩野對馬進之候、定而委細可申候、恐惶謹言、

六月十一日　　泰朝在判『姓名不詳』

冠嶽座主御坊

（本文書ハ「旧記雑録附録一」二五五号文書ト同一文書ナルベシ）

右九通一巻

○二六　冠嶽山之次第

冠嶽山之次第　　為後々置文

開發之事
地景之事
行法之事
院宣之事
檀那崇敬之事
被停止万雑公事叉
於于熊野山沙汰之事
串木野地頭名先達職之事
於于彦山沙汰之事
當山諸方雑務之事
寺中罪過人之事
座主職之譲状依志ニ可被任心進退之事

抑當山建立當初　忝人皇三十二代用明天皇御宇馬子宿祢親王御願所草創也云々、星霜年積至文安六年八百五十余歳也、薩摩郡串木野内也、東入来院、南市来院、四至境之事者文書有之、西者霊山寺、号上宮、南之麓雖雙坊舎、建久五年甲寅年造營之外無之、今成荒野、残礎計、或依神領所職之捍妨、或依人力衰癈之辛疲、残所大底檐傾哉、見之孰不可不悲、東興隆寺、号本坊、可謂四神相應之地景、北後玄武霊巌高聳、頂在不増不減之水、幼童酌之習手之間号硯水、仍能書数輩出来、今依疎学之拙心螢雪之窓、勞臂無携翰墨、然處自明徳以来、山之名擧、頭我身之徳人無之、口惜哉、東左青龍水流、朝夕要之、南前朱雀河流、濺煩悩之垢之間、号解除河、西右白虎有大道、諸人往復是輒、亦花河自北南流出、取此水数百年之行法、真言不思議、闕伽水漲落有様、雖及濁世澆季、利益深厚而可謂八功徳水、於在々岩頭洞、白山・西嶽・大岩戸・材木嶽・折橋、何言語道断、當國無双之霊地也、中大岩戸建久之造営、昔慈見切岩通鼻綜、鏁鐵為旋子、繫彼懸作籠所、其時柱一本有于今、當時中嶽云、昔号西嶽、延應暦仁之比、坊舎峙軒、行法勤修之香煙出戸、餘薫之風搖諸方、家業依之、人之為人子入彼門室、雙修学之窓、稽古諸藝、剰拂山招眺望、春詠遠山花、秋見巌洞月清光、無何處令澄心、管絃蹴鞠會、歌道舞樂之嗜、的射流鏑馬

之奔走在之、馬場桜朽残昔並木見得、亦南在山的庭、餘云付名、床敷事也哉、傳聞其古風、殊勝無如佛法之行儀、壇上佛具鮮瑩、銅筥中疊数流聖教定時不退、勤聲答谷與水下、後夜晨朝鈴聲響谷與雲昇、参詣道俗継踵、十方檀那帰敬惟重、權現霊験弥新、院主徳行弥太、遙及上聽、被成院宣下、在〻推圓云、國山共冠嶽山共申也、代〻守護判形、加之十方檀那之寄進當山知行事拘焉也、『灼欽』串木野村依為本檀那、彦山・熊野山参詣之時者、先達職之事定法也、城麓・河崎名・分濱塩形・萩原・平井・野本・網屋・島平・別府、此等之侍百姓等、當山為先達可被引導也、去應永十一年甲申、我等老父沙弥真祐熊野参詣時、於橋本、伊集院中原代官播磨房、串木野事、侍様老名人被知仁奉弊(幣カ)之事、可支之由依申、既及諍論之間、老父擲金鞠、始我等而串木野仁等冠嶽之外不可有先達之由堅〻被申、三社奉弊無事故被遂了、其後中原不綺之由被申、注連黒目精進事、座主弘舜為計有勤行處也、就中如此自中原就當山之事嗷訴被申、懸子細及度〻、先師弘舜常有物語、去貞治比哉、我等其比廿才計之時、永榮當所之地頭引導而彦参詣之時、中原登山而支披(被支カ)奉弊之間、一山宿老参合而及沙汰、宿老被申云、何鐵槌論也、可被出證文云〻、永榮被申云、串木野為冠嶽之間、不可入文書之由被番、中原展文書、其状云、文治五年此人〻引導仕了被申、雖然文書有限、詞無真、被支奉弊之間、地頭沙弥真了流涙被下向了、口惜哉、文治之比者大将頼朝御代也、此人〻其比相模三浦被居住、争自中原可引導之哉、建保合戦被下人〻也、既ニ百年計以前之文書也、此謂、自當山被番、中原謀書之罪科、可有物乎、腹雖被掻、無其甲斐、是當山無麗文筆人故也、弘舜後悔度〻也、猶起沙汰、熊野、播磨房、雖支奉弊擲鰐口、老父依被論、奉弊無相違之由、下向之時有物語、弘舜悦喜無極、其比可有永榮譲披露、時人新座主申、亦自総州有蒙仰子細、顕娃開門之事、雖思配申、為遠所之間有了見、冠嶽事、為近所之間急用可申也、以天辰肥前入道殿、當山一跡之事不可有相違、可被持身堅之由被承、弘舜直ニ被越山、我等ニ所承者、持八十有餘之父、明日者雖行塔原、老父難顕此儀、御邊之事者、乍云同弟子、真切存之間所知之也、理哉、膝上髪

撫之親恩不珎、異姓他人取立可被成人、其志自山海高深、左可思其恩、然則翌年己酉(ママ)年、當山一圓被相續、永榮讓壇方儀有皆當目出、座主職之事、不依親族他家、依志一跡相續之事、所被任心也、代ニ一度之勘料員数有定法、檀那登山之時引物、年初歳末之振舞、佳例為先、奔走可有之、當山之事異他ニ之間、守護國司領主為神載契状、雖有登山、於坊中肉食無之、公役之事、先年朝山出雲守師綱為上使下向之時、動國大綱之段、別雖被神社佛寺領懸、當山之事被停止万雑公事之間、一切無其沙汰、次神領罪科之事、殺害人雖為他所之仁、雖為寺領仁、不可被拘之、雑務之事、自他所被懸沙汰者、任所之法可被渡也、汰之物者可留山也、次ニ竊盗之事、及他所之沙汰者、既為露顕哉否、彼ノ盗族等有寺領者、先物ヲ於可被尋糺返、於于彼仁者、為寺中者、領内挿野心、致不忠者、可被行死罪、不可成領主ノ非道ニ、次神領之者、寺中ノ物ヲ盗ミ取時者、罪科者可為院主計、如此之沙汰、無領主綺也、其證據之謂、先規惟多、次ニ醉狂之事、縱雖覆血無死去者沙汰之限也、彼犯過人自砌令遂電者、其妻子并ニ名頭等不可懸科、亦四ヶ村之者不可上狩、不及寺中者、申見籠跡切侍鹿穴可被停止者也、餘不遑毛擧、座主弘全依所望ニ當山法様先例ノ率法之状一通、所書進處也、但憚神慮ヲ處ハ實言也、正直ヲ為先、戯人世處狂言寄語也、願者為讃佛乗縁之哉、

于時寶徳元年十一月三日　　當座主歡澄

天文七年戊戌十月中旬、本書破候間、為後日如形書付ソヘヲキ申候、右筆弘全

右一通一巻

（別紙）

「一冠嶽之次第　　為後ゝ置文

巻末ニ

于時寶徳元年十一月三日　　当座主觀證(ママ)

天文七年戊戌十月中旬、本書破候付、為後日

如形書付ソヘヲキ申候、

右筆　弘全と有之候、

右壱軸　」

○二七　冠嶽山鎮国寺頂峯院来由記

（二七の1）

冠嶽山鎮國寺頂峰院来由記

稽古、當山人皇三十二代用明天皇御宇馬子王子所草創也、曩昔熊野權現分光於東嶽・中嶽・西嶽三所、以弥陀・藥師・觀音為本地身而留此、鎮（ママ）護國家由来尚矣、惜哉、開基以降歴千有餘歳星霜、不能詳其記録矣、近二三四百年之間、或再建、或寄附田薗文書十餘片雖蔵箱底、以之不足為記録、寶徳之始、先師弘舜對弟子永榮口説、先軌永栄筆之書、以遺後世、其詞云、

薩摩國薩摩郡串木野村冠嶽山置文事、開基之事、地景之事、行法之事、院宣事、檀那崇敬事、被停止萬雑公事事、於熊野山沙汰之事、串木野地頭名先達職之事、於彦山沙汰事、當山諸方雑務之事、寺中罪科人之事、座主職之譲状依志可被任意進退之事、右取條目以載此、委悉文義在永栄記録、今略之、爾乃東嶽末社并堂宇共計十有七所、中嶽末社堂宇共四所、西嶽末社堂宇十所、今現在其祭祀日則、正月元日、東嶽・中嶽・西嶽・本堂・大岩戸・白山、惣六所也、三月三日一所、五月五日一所、八月朔日一所、九月九日大岩戸・西嶽・白山惣三所、十九日東嶽・中嶽・稼穡神右三所、廿日鎮守一所、十月丑日山神、十一月十五日觀音堂、惣計十八所也、皆共出當院粟米所辨也、其門徒寺院則才學院・長泉坊・林蔵坊・中之坊・正福寺・長福寺・来福寺・青蓮寺、惣計八箇所也、堂舎安置弥陀・藥師・不動三尊、晨夕念誦無怠于今、寛永二十年東嶽・中嶽乃至末社再興之、正保四年西嶽・大岩戸・白山或末社等皆共施官庫之米銭營之、古昔営構無其記録、為使後人易知略記之、

寛文九己酉年林鐘初二莫

權大僧都法印秀盛

置之

冠嶽山鎮國寺頂峰院来由

抑當山者阿子丸仙人開基、而熊野權現扶桑初降霊地、因茲所々仙崛今儼然、以故當院者忝人皇三十二代　用明天皇勅願所、其旨趣縁起并置文等委悉、恐繁略此、自用明天皇至貞享五歳一千一百三年矣、雖考開基時節、神代而不分明、且又成眞言寺傳来由、人皇六十二代　村上天皇御宇天暦元丁未年改台家、蒙　勅洛陽東寺院家法輪院僧正宗壽為真言開山、自爾以降至貞享五戊辰歳七百四十二年也、

當山御本地御安置之事

一無量壽尊壹軀（長一尺五寸金佛）

右、御當家御元祖　忠久公承久元年御安置、御年四十一之御時申傳也、

右御本尊、護國院開山全有江戸御供之節、　光久尊君御厨子御再興被遊、只今御城中御看經所ニ御安置有之候事、

御宸翰奉納之事

一法華法師品一品一巻

人皇九十七代　光明院御宸翰、建武四年（已上貞享五年三百五十二年）三月廿一日従東寺法輪院被成下置由相見候事、

御文書十三（ママ）通之事（恐繁年号支干御名記左、）

一正應五年十二月廿一日（御家四代太守忠宗公也、）　左衛門尉御判一通（至貞享五年三百九十七年）

一永仁五年十月廿八日（至貞享五年三百九十二年）　又六御判一通（忠宗公御舎弟伊作大隅守久長入道沙弥道意御判）　大江景遠御判（至貞享五年三百八十四年）

一嘉元（三カ）年後十二月十五日（忠宗公御法名）　道義　一通

一康安二年八月廿五日（至貞享五年三百八十四年（ママ））　師久御判一通（五代太守貞久公御子氏久公御舎弟（ママ））

一貞治六年七月廿四日（六代太守陸奥守氏久公初ノ御名）　修理亮氏久御判一通（至貞享五年三百廿二年）

一九月廿四日（氏久公御法名）　沙弥玄久御判一通

一應安六年三月十二日（師久公御子上総介）　伊久御判　一通（至貞享五年三百十六年）

七代太守陸奥守元久公初ノ御名
一至徳二年十月十一日　藤原孝久御判一通
至貞享五年三百四年

伊久公ノ二男
一應永十四年丁亥二月九日　嶋津山城守藤原忠朝御判
至貞享五年二百八十二年

一同年八月廿一日　御同仁御判一通
右同

忠朝法名
一應永十九年二月廿八日　嶋津道世御判一通
至貞享五年二百七十二年

伊集院家六代ノ家督
一長禄三年八月六日　伊集院熙久御判一通
至貞享五年二百卅年

已上御文書十二通

右外有之文書記左、

一承久二年庚辰八月　日　串木野三郎　一通
至貞享五年四百六十九年

一壽永二年八月　日　地頭掾大前判一通
至貞享五年五百六年

一寛元四年二月八日　惣地頭兼郷地頭代
至貞享五年四百四十三年　左兵衛尉判一通

一永仁貳年正月　日　從五位下行河内守一通
至貞享五年三百九十二年

平朝臣重郷法名本尊（佛）

一正應元年十月五日　冠嶽霊山別當榮英判一通
至貞享五年四百一年

一觀應二年四月廿日　平忠資判　一通
至貞享五年三百卅八年

是ハ吉野時代ノ年号二ツニ分時節
一正平廿一年九月二日　弾正少弼重門判一通

一至徳二年十月十一日　能登守基久判　一通
至貞享五年三百四年

一六月十一日　泰朝判　一通

已上九通也、

（二七の2）
院宣之事
上卿中御門中納言
文明十四年十二月十一日　宣

大法師澄久

宜任權律師

蔵人頭右中辨藤原元〇判「此一字不見」

（本文書ハ二号ト同文ナリ）

寺領古目録之事

（二七の3）
知行目録　鳥子二枚續

薩州　川内　山田

高二拾石一升何合不分明　市来永里村

高八石一升何合何杓不分明　同浮免

高拾四石四斗三升一合三杓

惣合四拾三石五升

一此知行毎年於鹿兒嶋御屋形為可被修長日之御護摩被宛行所也、

一被擇守戒碩學之仁、被号御祈願所候上者、縦直之雖弟子、初行末學之輩、被讓寺家間敷候事、

一御護摩所勤之送迎等之儀、勿論可為自力候、月並次第之儀者、於大乗院各以相談可被定候、至役所不可有其沙汰候事、

右条々、於被相背者、可其沙汰者也、

慶長五年十二月廿一日　　鎌田出雲守　政近判

比志嶋紀伊守　國貞

冠嶽寺

已上一通

（二七の4）
知行目録

薩州串木野上名村之内

高拾七石貳斗七合　宇都之門

高拾三石五斗貳升七合　田代屋敷

高拾壹石七斗八升壹合　井之上屋敷

高拾五石一斗三升一合三夕　久木野之屋敷

高五斗一升四合一杓　内窪屋敷

高三石貳斗貳升五合八夕　中尾屋敷

高拾三石一斗三升三合七夕　上窪屋敷

高拾五石貳斗六升　田尻田屋敷

右同二王堂ノ内并門前

高拾石五斗一合四杓　浮免

平田太郎左衛門　増宗

圖書頭　忠長

合高百石貳斗八升壹合三杓

右之知行、此中應公役之高被宛行者也、

慶長十九稔八月五日　　三原諸右衛門尉（重種）判

比志嶋紀伊守（国貞）判

伊勢兵部少輔（貞昌）判

町田勝兵衛（久幸）

冠嶽寺

已上一通

御分國中勸化御免證文一紙「但杉原横折」

串木野冠嶽山權現御宮作就再興、御分國中勸進可申由候（二七の5）

間、諸人志次第可致馳走者也、仍状如件、

寛永貳年丑十月廿日

（比志島国隆）比宮内少輔判

（喜入忠政）喜攝津守判

（島津久元）下野守判

諸所地頭衆

（冊子表紙）「冠嶽鎮國寺頂峯院

由来記〔II〕」

○二八　冠嶽山鎮国寺頂峯院由緒調書

一冠嶽山　鎮國寺　祈願所　頂峯院

但

鹿児嶋より拾里三拾五丁餘亥之方

仁皇三拾弐代用明天皇之勅願所与前代より之校割帳ニ

書記有之、元来天台宗ニ而開山阿子丸親王与申候、弐

拾壱代台家相續、其後京都法輪院權僧正宗壽□（勅）□（真）□（住ニ而カ）

言宗中興開□（山）□（當住カ）相續仕申候、

一本尊無量壽佛　壱躰（農且金佛）

後光裏書写

（二八の1）奉安置

無量壽尊　壹軀（農且金佛）

右、奉為　護持篤信(田心)大檀越　忠久公御子孫、永保
國泰民安、怨敵退散、君臣和睦故也、仍旨趣如件、
承久元年己卯正月吉日

（本文書ハ「旧記雑録前編一」二六〇号文書ト同一文書ナルベシ）

右壱躰、御元祖　忠久公四拾壱之御時被遊御建立、
當時全有代　光久公厨子御再興之節、御城内御看經
所江御安置為替本尊、當時左之通御座候、

一本尊無量壽佛　壱躰　立木像高サ壱尺八寸五ㅁ
　但恵心僧都作
一観音勢至（右脇立）　弐躰　立木像高サ八寸五ㅁッ、
　但作者同断
　右、光久公御安置
一御肖像御位牌
　但無御座候、
一藥師　壱躰　厨子入
　但秘佛
一不動　弐躰　共ニ厨子入　立木像
　但壱躰者覺鑁之作　壱躰高サ五寸五ㅁ　壱躰同八寸三ㅁ面形破損
一誕生之釈迦　壱躰　立木像　高サ三寸
一両寶童子　壱躰　座木像　高サ弐寸八ㅁ
一聖天　弐躰　弐重厨子入
　但秘佛
一大黒天　弐躰　座木像　高サ四寸三ㅁッ、
一毘沙門天　壱躰　厨子入　唐金立像高サ三寸
一大師　壱躰　厨子入　座木像高サ壱尺
　右八行持佛堂ニ安置有之候、
一東嶽熊野大權現（本宮證誠殿　本地阿彌陀秘佛）
　祭日　正月元日　三月三日　五月五日　九月九日
　九月十九日　十二月廿九日
　當寺住持より神供相備祭来申候、
一不動　立木像　高サ弐尺四寸五ㅁ
一金伽羅勢多伽（右脇立）　立木像　高サ弐尺三寸八ㅁ
一御正躰　壱面　八尺八寸廻り
　但弥陀藥□(師)觀音像有り、

一同三拾面餘

右古書ニ相見得申候得共、粉失ニ而も候哉、當分四面御座候、

内壱面　差渡シ七寸五ㅁ

壱面　同　六寸

壱面　同　四寸八ㅁ

壱面　同　三寸弐ㅁ

一地蔵　立木像　高サ弐尺七寸

但足破損

外ニ木佛四像都而破損、

一大黒天　座木像　高サ壱尺六寸

一布袋　土像

但破損ニ而寸尺相知不申候、

右七行東嶽宝殿内ニ安置有之候、

一乙護宮　立木像　高サ六寸九ㅁ

一三郎宮　立木像　高サ六寸九ㅁ

一山王宮　唐金座像　高サ三寸九ㅁ八寸ゝゝ

一稲荷大明神　立木像　高サ八寸

但左之方半身焼焦有之候、朝鮮入之御時、塩焔蔵江附火被成候神躰之由ニて、右之通り焼焦御座候由申傳候、舊記に無御座候、

一四拾八伽藍天道門守拾八伽藍

一善神王　弐社　座木像　高サ壱尺四寸五ㅁッゝ

一不動明王　唐金立像

但七丈餘高キ岩崛ニ安置有之、難登候付寸尺相知不申候、

一虚空蔵（岩屋）　座木像　高サ八寸五ㅁ

但三丈餘高キ岩崛ニ安置、梯子有之候、

一山之神　石躰

一山之神（宇都久木野ゝ村）　石躰

一同　右同

一一王子　右同

一二王子　右同

一鎮守宮　右同

一山王廿一社宮

一瀧觀音拾壱面　座木像　高サ五寸五ㅁ

一弁才天　座木像　高サ五寸五ㅁ

一王面　　弐ツ
一獅子駒　　弐ツ左右ニ有り、
一中嶽熊野大權現　本地藥師　座木像　高サ三寸五□(卩)
祭日
正月元日　三月三日　五月五日　九月九日
九月廿九日　十二月廿九日
当寺住持より神供相備祭来候、
一御正躰　壱面　差渡シ八寸計
一不動　三躰
但破損ニ而當分無御座候、
一金胎両部万荼羅堂
但同断
一大岩戸權現　觀音座木像　高サ壱尺
但三丈餘高キ岩崛ニ安置、小祠有之候、
右彦山開門山霧嶋山三所權現
但破損ニ付、當分觀音壱躰再興御座候、
一石佛不動
但高キ巖不動与名付候、
一材木嶽權現　四天王厨子共石躰
一經之塚　石躰
一白山權現　立木像　高サ九寸五卩
一西嶽熊野大權現　本地千手觀音
座木像　高サ壱尺弐寸五卩
祭日
正月元日　三月三日　五月五日　九月九日
九月十九日　十二月廿九日
當寺住持より神供相備祭来候、
一御正躰　壱面
但延宝六年午十月四日晩炎上有之候ニ付、燒失ニ而も
候や、當分無御座候、
一不動明王　座木像　高サ壱尺弐寸
一金伽羅勢多伽　立木像　同　壱尺弐寸五卩
一大黒天　當分無御座候、
一王面　弐ツ　同断
一善神王　弐躰　同断
一天道門守四拾八伽藍　石躰
一本地堂阿弥陀　座石像　高サ六尺
一壱王子　當分無之候、

一二王子　　祠石野々村ニ有之候、

右ヶ条之内不足相見得、延宝六年午十月炎上有之付、

焼失ニ而も候や、

右、東嶽中嶽西嶽三社大權現其外末社人皇三拾弐代用

明天王勅願所ニ而、馬子之宿祢建立之由相見得候、

光明院御宸翰

一法華法師品之一品

人王九拾七代光明院御宸翰、建武四年三月廿一日従

東寺法輪院被成下置候由相見得申候、

右壱軸、寛政二年　齊宣公(斉)被遊御覧、表具御改有之

候、

一正應五年十二月廿一日　左衛門尉御判壱通

一嘉元三年後十二月十五日　道義御判壱通

一康安二年八月廿五日　師久御判壱通

一貞治六年七月廿四日　修理亮氏久御判壱通

一九月廿四日　沙弥玄久御判壱通

一正應(至徳)元年十二月　日　沙弥玄久御判壱通

一至徳元年十二月　日　栄永壱通

一至徳二年十月十一日　藤原貴(孝)久御判壱通

一永仁五年十月廿八日　又六御判　沙弥道意判　大江景遠判　壱通

一應安六年三月十二日　伊久御判壱通

一應永十四年丁亥二月九日　嶋津山城守藤原忠朝　御判壱通

一正應(マヽ)元年十二月(マヽ)廿一日　八月　沙弥玄久御判(マヽ)壱通(マヽ)

一應永十九年二月廿八日　嶋津道世御判壱通

一長録(緑)三年八月六日　伊集院熙久御判壱通

右拾四通壱軸、寛政二年　齊宣公(斉)被遊御覧、表具御

改有之候、

(二八の2)

上卿中御門中納言

一文明十四日十二月十一日宣(年)　薄墨地紙一紙

大法師澄久

宜任權律師

蔵人頭右中辨藤原元□判

(本文書八二・二七の2号ト同文ナリ)

一壽永二年八月　日　地頭掾大前判壱通

右弐通壱軸、寛政二年　齊宣公(斉)被遊御覧、表具御改

有之、

一承久二年庚辰八月　日　　串木野三郎壱通

一中峯并霊山院興隆佛法子細之事　壱通

但年鑑名印相知不申候、

一寛元四年二月八日　　惣地頭兼郷地頭代左兵衛尉判壱通

一正應元年六月廿八日　　左衛門尉源□（判カ）

一永仁二年正月　日　　従五位下行河内權守平朝臣重郷壱通　法名本佛トアリ

一正應元年十月五日　　冠嶽霊山別當栄英判　僧栄海判

一觀應二年四月廿日　　平忠資判壱通

一正平廿壱年九月二日　　弾正少弼重門判壱通

一至徳二年十月十一日　　能登守基久判壱通

一六月十一日　　泰朝判壱通

右九通壱軸、寛政二年　齋宣（斉）公被遊御覧、表具御改有之候、

一文書之写　壱冊

右、寛政二年　齋宣（斉）公御覧、表具御改有之、御記録方より被召渡置候、

一御分國中奉加御免状　壱通

一知行古目録　六通

一同　新目録　貳通

一三社并末社等訴訟留帳　壱冊

右、御前御用相成、寺社方江差出候段、相見得申候、

但何年鑑差出候訳相知不申候、

一冠嶽山棟札之写

抑當山者熊野大權現降臨鎮坐之靈跡也、頼之四来之祭祀仰憑、

此棟札者別帳ニ而書写べし、

一唐こす（具須）之御酒壺　七ッ　蓋有り、

一同　御酒壺　七ッ　壱ッ蓋なし、

一くわんにうすせひし御酒壺　弐ッ　蓋取合物有り、

一高麗焼御酒壺　壱ッ　蓋なし、

一肥前焼小壺　三ッ　三角ニ墨絵有り、

一朝日焼小壺　壱ッ

一引木地御酒入　拾八　當分弐ッ有之、

一御供器引物　四拾

一三方　　四拾　當分三ッ有之、

以上九行、長持弐竿ニ入付有之候、

右、従　公義之御寄進物ニ而、東嶽御祭用之御器物ニ而御座候、

但損失ニ而も候や、當分不足之物も有之候、

一御供器　三拾壱　箱入

一三方　三拾壱　箱入　當分三ッ有之候、

一御水入　三拾壱　箱入

一瓶子　三双　箱入　當分無之候、

右、西嶽御祭用之器物ニ而、上代より為有之由御座候得共、不足相見得、延宝六年午十月炎上有之候付、焼失ニ而も候や、

一大ぼらの貝　壱ッ

一大金燈爐

延宝六年十月炎上之節焼失ニ而も候や、當分無御座候、

一鰐口　弐ッ　三尺□

内壱ッ宝徳年鑑住持長永寄附

壱ッ無銘

右、東嶽西嶽両社拜殿ニ有之候、

一唐純子七条之袈裟　壱ッ

但横尾并修陀羅尼桧扇子有之、大破、

右、義久公御息女亀壽様御寄進、

右裏書ニ、此法衣者都大佛殿供養真言天台千人職衆郡(部カ)立候節、三州大守嶋津義久公御息女亀壽公御寄附也、

慶長三年戊戌八月十四日

初延久綱貴公御筆

一御掛物　達广繪　壱幅　箱入

綱久公御筆

一同　山水繪　壱幅　箱入

右弐幅、住持秀盛江戸御供之節拜領ニ而寄附候、

齋(斉)宣公御詠御筆御寄附

一御短尺　弐枚　箱入

(斉)齊興公御寄附
一普門品　壱折　箱入
信證院様御寄附
一本尊戸張　壱流
但今織赤地金入　虫付有り、
於鉄様御寄附
一香爐　壱ッ
一花瓶　壱ッ
但弐ッ共御紋付立野燒、當分大破、形迄有之候、
巖様御寄附
一對花瓶　弐ッ
但同断、
一西嶽山戸張　弐流　壱流者緋綸子　壱流者紗綾
一東嶽山戸張　弐流　壱流者緋綸子　壱流者紗綾
右戸張四流、前々より御寄進有之候処、相損ッ貞享元年甲子九月、亦々　光久公御改易御寄進之由、戸張銘書ニ相見得候、
但當分大破、
一高四拾三石八斗弐升八夕
内高拾六石七斗六升八合八夕五才　上名村田代屋敷
高拾三石壱斗九升九合八夕七才　自作高
同拾三石八斗五升弐合八才
右、何年鑑何方より御寄附之訳相知不申候得共、慶長年鑑御目録弐通、高百四拾石ニ而御座候、然共何そニ付御減少之訳も有之、引残候御寄附之高ニ而も可有御座哉与奉存候、
一祠堂銭百拾八もん
一銀幣　壱流　少々切有り　箱入
右、芹ヶ野金山より寄進奉加帳壱冊　燒杉箱入
一銀燒付幣　壱流　箱入
右、當濱村より寄進、
一東嶽中嶽西嶽三社宝殿拝殿寺社方御修甫所
一末社仁王門上葺所修甫所
一持佛堂客殿御合力御修甫所
一鐘樓堂
右、綱貴公御寄附ニ而御合力御修甫所、

(二八の3)
卅代

開山阿子丸仙人　傳尚　弘賢　明賢　弘淳
定玄　心澄　成賀　栄英　栄海
慶栄　栄増　成栄　弘舜　長栄
永栄　弘安　栄永　栄秀　弘全
歡澄　是迄天台、
人皇六十二代村上天王御宇天暦丁未真言中興開山宗壽
權僧正勅住、是ヨリ成真言奇、
永仙　弘叺　澄叺　俊海
歡久　鑁久　長之　實永
可久　頼継　歡重　政増
頼重　杲久　元瑜　盛重
政翁　宥全　覺有　全有
快泉　秀盛　亮奮　盛亮
實有　覺盈　慈範　亮昌
梁玄　照海　寛洲　盛興
覺玄　覺寶　快阿　快超
覺恩　實賢　實全　覺眞

覺紹　當住快道
開山より當住快道迄六拾三世相成申候、

一大檀那
御元祖忠久公ニ而御座候、
一梵鐘　壱口　無銘
右、綱貴公御寄附ニ而御座候、
一半鐘
但無御座候、

右者、此節御寺由緒等取しらへ、申出候様被仰渡趣奉畏候、當寺右之通ニ而、外ニ慥成書留無御座候間、此段申上候、以上、

万延元年申五月廿五日　住持　快道

當番
御郷士年寄衆

○二九　串木野上名村下名村神社調帳

一宗社上名村之内宮之原
猪日田大明神　饒速日命　天香山命　石一躰　鹿児嶋より亥ノ方九里九町拾九間余

往古奥州膽澤郡より私先祖入枝志广之丞為負下由申傳候、　御文書等為有之由候得共、右社前代炎上有之、悉致燒失、由来勸請之訳委相知不申候、

正月元日　二月三日　同彼岸　三月三日　五月五日　八月彼岸　九月九日　霜月三日

右祭日、嶋津中務太夫家久公御領地之時、寄附高跡、右祭銘々江分而被召付置候得共、佐土原江御移後、上地ニ相成候由申傳候、其後二月三日　九月八日　十一月三日、氏子中より出米を以祭来候、

但宝殿拜殿共ニ御合力御修甫所ニ而御座候、

鰐口　無銘

一末社
若宮　石躰

一右同
山之神　石躰

一上名村亀ヶ城内
諏訪大明神　上宮健御方命　下宮事代主命　座唐金二躰

鹿児嶋より戌ノ方九里七町余

勸請之由緒相知不申候、祭日毎年七月廿八日、祭料とシテ真米三斗五升　御物より被召渡、同壱斗五升地頭より相渡候、寛文年間以前者　御代参冠嶽山住僧相勤来候處、寛文十二子年　御名代与被改、所嘱相勤候様被仰付候旨、大山主馬殿より被仰渡、于今　御名代郷士年寄、地頭代組頭相勤申候、

但
神領高寄附高無御座候、所修甫ニ而御座候、

右諏訪社脇江摩利支天堂有之、由緒建立之訳相知不申候、

奉寄進
御諏訪
鰐口一件　御詞所

明暦二年九月十六日　神主　入枝源三郎　氏子中

文録(禄)元年五月廿三日、連日有逆風無順風、于時義弘在朝鮮、以故
祈順風於串木野諏訪大明神以神樂、且復為法樂詠一首、
夕涼ミ御山おろしにさそわれて
繋しふねのいつるミなと江
右、龍伯公御詠歌之由、古書之申傳有之、
一 上名村之内 妙見社　仲哀天皇石体　鹿児嶋より戌ノ方 九里拾町余
右勸請之由緒相知不申候、
祭日十一月十三日、神供向井原屋敷名頭より相備
来申候、
一 上名村之内大六野 山神　天治玉命　石体　鹿児嶋より■ノ方 九里八丁余 〃〃〃〃 十里余
祭日初申日
一 上名村之内五反田 山神　天治玉命　乗虎燒物像　鹿児嶋より酉之方 九里八丁餘
祭日
十一月初寅日
右二社勸請之由緒相知不申候、行司役神供相備来申
候、

一 下名村之内芹ケ野 山神　天治玉命　石体　鹿児嶋より亥之方 拾里拾丁餘
右勸請之由緒相知不申候、上古金山繁栄之節者、正
五九十一月十六日、祭料真米弐斗九升、銭八百文、
毎祭　御物より被召渡候、金山御引取後迄茂被召渡
候處、何年簡比より被召上候茂相知不申候、
一 下名村之内野元 深田大明神　彦火火出見尊座木像二躰 石像十二躰　鹿児嶋より戌之方 九里三拾丁餘
祭日
二月二日　九月九日
鰐口無銘
一 下名村之内節政 天満大神　中(将殿昔原嫡子座唐カ)金像　鹿児嶋より酉之方 九里弐拾丁餘
祭日
二八月廿五日
一 同村之内濱村 伊勢大神宮　幣掛神躰　鹿児嶋より酉之方 九里八丁餘
鰐口無銘
祭日
正九月十一日
右三社勸請之訳相知不申候、氏子中より(後欠)

（冊子表紙）
「神社佛閣調帳」

（中表紙）
元治元年子五月
神社佛閣寺院『〻〻』調帳
串木野

○三〇　串木野神社仏閣調帳

一　冠嶽山（上名村之内）　鎮國寺　祈願所　頂峯院
地頭仮屋元より寅之方
西嶽道筋
弐里拾弐丁拾弐間

右同所より
本道筋
壱里三拾五丁拾八間

一　客殿
一　持佛堂
一　鐘楼堂
右三行寺社方御合力御修甫、

一　東嶽熊野大權現（本宮證誠殿　本地阿弥陀）　秘佛
右寺社方御修甫、
地頭仮屋元より寅之方
本道筋
壱里三拾五丁拾八間
山道筋
弐里拾弐丁拾弐間
正月元日　三月三日　五月五日　九月十九日　十二月
廿九日、頂峯院住持より神供相備祭来申候、

一　不動　立木像　高サ弐尺四寸五卩
一　金伽羅勢多伽（不動脇立）　立木像　高サ弐尺三寸八卩

一　御正躰　一面　　八尺八寸廻り
　　但　弥陀藥師觀音像有、
　　右壱行所修甫、
一　同三拾面余　　古書ニ相見得申候、
　　内　四面有之、
　　一面　差渡七寸五卩
　　一面　右同六寸
　　一面　右同四寸八卩
　　一面　右同三寸弐卩
一　厨子入　地蔵尊　　立木像　高サ弐尺七寸
　　但　足破損、
　　外　木佛四像大破損、
一　大黒天　　座木像　高サ壱尺六寸
一　布袋　　土像
　　但　破損故尺丈相知不申候、
　　右七行東嶽大權現宝殿内ニ御座候、
一　唐こす（具須）之御壺七ツ、共ニ蓋有、
一　同七ツ
　　内　壱ツふたなし、
一　三わん（くカ）にうすせんし御壺壱ツ、蓋なし、
一　肥前燒壺三ツ、三角ㄖ墨絵有、
一　あさひ燒小壺　壱ツ
　　以上燒物従　公義之御寄進物御祭用、
一　引木地御酒入拾八、今弐ツ有之、
一　御供器引物四拾
一　三方四拾
　　内　拾九不足、今三ツ有之、
　　以上従　公義御寄進物祭用、
　　右御寄進物之内、損失ニ而茂御座候哉、當時不足相見得申候、且讀兼候ヶ條御座候得共、古書之侭書写申候、尤燒物数、當時拾八御座候、
一　光久公御寄進　戸帳弐流　壱ツ大破　壱ツ少破
一　王面二ツ
一　獅子駒左右ニ有、
一　鰐口銘

奉施入冠嶽山願主長永
寶徳三辛未十二月吉日

一　四拾八伽羅天道門守十八伽藍
一　装束石
一　本地堂　阿弥陀　座石像　高サ弐尺弐寸
右脇立ニ破損佛多、

本地堂鰐口
片面之銘
「此八字クチ入不分明」
奉施入小河原西福寺鰐口
長禄五年辛巳十一月八日願主敬白
片面右同、
施入　薩州薩广郡向田村地蔵堂之鰐口　奉　願主敬白
文明十一天九月吉日

一宇都　山神王二社　石躰
一　乙護宮　立木像　高サ六寸九卩
一　三郎宮　立木像　高サ六寸九卩
一　山王宮　座唐金像　高サ三寸九卩
一　稲荷大明神　立木像　高サ八寸
但　左之方半身燒焦ニ而御座候、朝鮮入之御時、塩硝蔵江附火被成候神躰之由ニ而、右通燒焦御座候、于今申傳候、舊記ニ無御座候、
一　岩屋不動明王　唐金立像
但　七丈余高キ岩崛江安置有之、難登、尺長相知不申候、右頂上ニ仙人之岩崛有、于今仙之岩与相唱、其中凹ミ之所江水有之、硯の水与申候、
一　岩屋虚空蔵　座木像　高サ八寸五卩
但　三丈高キ岩崛江安置、楷子有之、
一　山神　石躰
一　一王子　石躰
一　二王子　石躰
一　瀧觀音十一面　座木像　高サ八寸
右拾壱行所修甫、
一宇都　山神　石躰
一久木野ゝ　同　石躰

一　鎮守宮　　石躰

一　山王廿一社宮

一　觀音　　座木像　高サ五寸五卩

一　弁財天　　座木像　高サ五寸五卩

一　中嶽熊野大權現　本地藥師座木像　高サ三寸五卩

右寺社方御修甫、

地頭仮屋元より寅之方

西嶽道筋

弐里三丁五拾弐間

正月元日　三月三日　五月五日　九月九日　九月廿九日

十二月廿九日、頂峯院住持より神供相備祭来申候、

一　御正躰一面　　差渡八寸計

一　不動三尊　　破損今無、

一　金胎両部万荼羅堂阿弥陀堂

但　往古ニ為有之由候得共今無、

一　石佛不動　　高ヶ巖

一　經之塚　　石体

一　大岩戸權現　觀音　　座木像　高サ壱尺

但　彦山・開聞山・雽嶋山三所大權現ニ而御座候處、

破損ニ而當分右觀音一体再興御座候、

右七丈高ヶ岩崛江小祠有之、

一　材木嶽權現四天王厨子共ニ石体

一　白山權現　　座木像　高サ九寸五卩

右三行所修甫、

一　西嶽熊野權現本地千手觀音座木像高サ壱尺弐寸五卩

右寺社方御修甫、

地頭假屋元より寅之方

壱里弐拾六丁壱間

正月元日　三月三日　五月五日　九月九日　九月十九日

九月廿九日、頂峯院住持神供相備祭来申候、

一　御正体　　今無、

一　不動明王一尊　　座木像　高サ壱尺弐寸

一　金伽羅勢多伽　　立木像　高サ壱尺弐寸五卩

一　大黒天　　今無、

一　王面弐ツ　　今無、

一　善神王二躰　　今無、

一　大ほらの貝壱ッ

一　大金燒爐（燈カ）弐ッ　光久公御寄進

一戸帳弐流　内

壱流宮殿之口　長サ長尺（ママ）六寸廣サ壱尺八寸

壱流御殿之入口　長サ五尺横四尺五寸

右戸帳、貞享元年甲子九月三日御掛替有之、

但　當時大破、

一　御供器　三拾壱箱入

一　三方　三拾壱箱入　今三ッ有、

一　御水入　三拾壱箱入

一　瓶子　三双箱入　今無、

一　鰐口壱ッ　無銘

一　天道門守四拾八伽藍

一　一王子　今無、

一　二王子

但　石野ゝ村ニ有之、

一　本地堂阿弥陀　座石佛　高サ六尺

右壱行所修甫、

右ケ條之内不足相見得、延宝六年午十月炎上有之候ニ付、燒失ニ而茂御座候哉、

（三〇の一）

西嶽社棟札寫

夫惟薩陽串木野冠嶽之三山者、曩昔熊野三所大權現垂應之霊區而、我邦君三州太守代以所尊崇之神社也、其西嶽山社頭、去延寶第六丙午冬十月四日夜、罹不意火災而、神舎佛舎佛軀一時修焉、都為灰、揚可謂天作菑乎、未可知也、時天和三辛亥秋、社頭修造功成而、盡閣壮麗、朱雀啄矣、王殿崢嶸、黄龍動矣、於越輪奐復古、今茲貞享四歳舎丁卯秋、本地千手觀自在菩薩、真容并不動尊像夾侍二軀、謀京師大佛工某令刻雕、又大黒天神及獅子駒再興之安置、因茲佛光再輝、神威重明矣、然則大檀越薩隅日太守源朝臣光久公、同綱貴公、忠竹公運命永久而鎮桿國家、孫子鬱茂而化食人民、乃至一々願望皆悉圓成耳、

貞享四歳次丁卯月日

現住沙門亮大周（育）

右、東嶽中嶽西嶽三所大權現、人王三十二代用明
天皇勅願所ニ而馬子之宿禰建立、

人皇三拾二代用明天皇之勅願所与前代より之校割帳ニ
書記有之、元来天台宗ニ而開山阿子丸親王与申候、二
十二代計茂右家相續、京都法輪院權僧正宗壽勅住ニ而
真言宗中興開山、當住覺仁迄六拾四代、

厨子入
一　藥師如来　　秘佛
一　本尊無量壽佛一体　麗旦金佛
後光裏書写

（三〇の2）
（本文番ハ二八の1号ト同文ニツキ省略ス）

右一躰、御先祖　忠久公四十一之御時被遊　御建立、
當時全有代　光久公厨子御再興之節、御城内御看經
所江御安置被遊、當時左之通御座候、
一　本尊無量壽佛　一体　立木像　高サ壱尺八寸五卩
脇立
一　觀音勢至　二体　立木像　高サ八寸五卩宛

右、光久公御安置、
一　鐘　無銘
右、綱貴公御寄附、
一　高四拾三石八斗弐升八夕
内
三拾石神領高
右、頂峯院寺高、

（三〇の3）
冠嶽山棟札写
柳（抑カ）當山者熊野大權現降臨鎮坐之靈跡也、頼之四来之祭
祀仰憑非他、昔時承久元年　忠久公御年四十一為國家豊饒
御子孫繁榮、安立本地無量壽如来之像于當院晨旦之金佛一躰、
永令奉獻四摂八供之法味矣、爾後　光久公深有崇重、
命全有法印當時四十代護国院開祖興隆、厨子移入尊像於府城為鎮矣
今見在御看經所、故今所代賜之靈像也、尓来過數代之星霜、
尊形三形等摧折尚哉、今茲癸酉奉三月提當院之来由、
啓再興於寺社之宮所、左右具開佛体之破折、且尚由来
有、重興之免許也、茲以同年四月二十一日、奉送本尊
於鹿兒府、即有司命佛工令勵営興矣、從六月上旬至十

月十三日、彩色莊厳等善美圓就矣、以同十月十九日、奉還着于當院者也、同月二十二日、請近邑之浄侶、奏入佛遷座之梵曲鳴、點眼加持之一磬而供養首尾矣、以此勝縁、太守少将重年朝臣壽城萬歳國泰民安乎、因筆記再興之歳月、為来者眙焉、

時宝暦第三龍舍癸酉十月

當時五十代住持法印梁玄誌、

嶋津十太右衛門殿久命

寺社奉行衆

宮之原甚五兵衛殿通興

一 初ハ延久綱貴公御筆 掛物 達磨絵 一幅

一 綱久公御筆 同 三水絵 一幅

一 法華經法師品 一幅

一 文書 但 御文書并諸人文書数通 四軸

一 右同之写 壱冊

右五行寛政二年 齊宣公御覧、表具御改有之、

一 唐純子七条袈裟 壱

但 横尾并修羅陀(陀羅尼カ)絵(桧カ)扇子有、

右、 義久公御息女亀壽□御寄進、

右裏書ニ、此法衣者都大佛殿供養真言天台千人職衆部立之節、 三州太守嶋津義久公御息女亀壽公御寄進也、

慶長三年戊戌八月十四日

一 齊宣公御歌短冊弐枚箱入 名所山 みこし路やいつより名とは成にけむ

たゝすふりつむ雪のしら山

一 初郭公 村雨のはれゆく峯の雲間より

はつねをもらす山ほとゝきす

一 齊興公御寄進 普門品 但 縦白木箱絹真田緒 一折

一 信證院様御寄進 本尊戸帳 一流

於鉄様御寄進
一香爐　壱

御同人様右同
一花瓶　壱

巖様御寄進
一對花瓶

龍宝寺「、」
千徳院
〃〃〃
觀音院「、」
興隆寺
正福寺「、」
正念寺「、」

頂峯院末寺
靈山寺「、」
二之坊「、」
三樂寺「、」
麓之里坊「、」
東福寺「、」
青連寺「、」
千徳院「、」
才學院「、」
長泉寺「、」
林蔵坊
中之坊「、」
花蔵坊「、」

右拾壱（ママ）ケ寺、都而破壞地ニ相成當分無之候、

禅宗曹洞派本寺備中國道祖児村永祥寺末寺

上名村之内
一岩水山　但建立之由緒相知不申候、

菩提所
良福寺

一客殿
右寺社方御合力御修甫、
外寺内所修甫、

地頭仮屋元より巳之方
壱丁五拾間

一貴久公御位牌一尊

一 同公御廟所
但 五輪御石塔石井垣有、
地頭仮屋元より
四丁八間
右者、嶋津中務太夫家久公御居城之節御建立
有之由申傳候、

一 高壱石
右、家久公御寄附之由候、

一 本尊釈迦 木座像 高サ九寸八ㅁ
脇立
文殊普賢 木座像 共ニ六寸八ㅁ

一 鎮守藥師堂

一 観音堂

一 釈迦堂

一 藥師堂
右四行住持修甫、

一 鐘銘
薩州日置郡串木野岩水山良福寺先祖梅月和尚、鑄『鰐』花『鯨』一口、以高掛堂掛前、破損後幼『幻』住温室依信檀『ゝ』助力再興之、驚万劫眠者也、
願以此功德、普及於一切、我等與衆生、皆俱我(成カ)佛道、現住温室置之、
于時寶永四丁亥林鐘吉日
治(冶)工為而親鑄山々焉、生國丹州亀山赤井金右衞門
尉利長
小工防州三田尻 野村喜兵衞

一 良福寺末寺 蓬福寺
右寺号計ニ而破壞ニ相成候得共、寺役本寺より
相勤来申候、

一 慈眼山 良福寺末寺 妙智寺
下名村之内濱浦
但 由緒記無御座候、
右檀方修甫、
地頭仮屋元より申之方
拾八丁程

一　秋葉堂

荒川村之内
一　青峯山　　良福寺末寺　安樂寺
　　但　由緒記無御座候、
　　右檀方修甫、

羽鳴村之内
一　真指山　　良福寺末寺　悟入寺
　　但　由緒記無御座候、
　　右檀方修甫、

下名村之内
一　大原山　　福昌寺末寺　松山寺
　　但　由緒記無御座候、

一　觀音堂
　　右弐行檀甫（方カ）修甫、

地頭仮屋元より申之方
拾五丁程

地頭仮屋元より子之方
壱里三丁程

地頭假屋元より亥之方
弐里八丁程

下名村之内所崎
一　福昌寺末寺　正福寺
　　但　由緒記無御座候、諸人能景之所与申觸、寛政二年亥（ママ）三月、太守　齊宣公市来温泉ニ御遊覧有之、

一　秋葉堂
　　右弐行檀方修甫、　地蔵仮屋元より巳之方（ママ）
　　三拾三丁程

下名村之内大原
一　西海山　　盲僧寺　永福寺
　　右自分修甫ニ而御座候處、嘉永四年亥二月、濱浦出火之節、逢類燒候ニ付、未建立不仕候、

宗社上名村之内宮之原
一　猪日田大明神　饒速日命　天香山命　石体　高サ弐尺弐寸　石体　高サ壱尺壱寸
　　右寺社方御合力御修甫、

　　脇立　若宮　石体　右同　高サ壱尺　右同九寸五ㅁ
　　山神　右同　右同　右同五寸　右同六寸五ㅁ
　　右同　右同　右同六寸四ㅁ　右同四寸

　　右弐行所修甫、

地頭假屋元より寅之方
九丁拾九間

往古奥州膽沢郡より入枝志广之丞先祖為負下由申傳候、御文書等為有之由候得共、右社前代炎上有之、悉致燒失、由来勸請之訳悉相知不申候、社司其子孫入枝肥前相勤来候、

正月元日　二月三日　同彼岸　三月三日　五月五日
八月彼岸　九月九日　十一月三日

右祭日、嶋津中務太夫家久公御領地之時、寄附高右銘々江分而被召付置候得共、佐土原江御移跡、上地ニ相成候由申傳候、其後二月三日　九月八日十一月三日、氏子中より出米を以祭来候、

一　鰐口無銘

一　諏訪大明神（上名村亀ヶ城）　上宮健御方命　下宮事代主命　座唐金弐躰高サ弐寸八ロ宛

一　摩利支天（諏訪脇江有之）　座木像　高サ七寸乗物馬

地頭仮屋元より寅之方

壱丁弐拾弐間

勸請之由緒不相知候、祭日毎年七月廿八日、為祭料真米三斗五升御物より被召渡、同壱斗五升地頭より相渡候、寛文年簡以前者御代参冠嶽山住僧相勤来候処、寛文十二子年　御名代与被改、所嘱相勤候様被仰付候旨、大山主馬殿より被仰渡、于今　御名代郷士年寄、地頭代組頭相勤候、社司入枝肥前相勤来候、

但
神領高寄附高無御座候、

奉寄進
御諏訪　御詞所
鰐口一件
明暦二年九月十六日

神主
入枝源三郎

文(録)元年五月廿三日、連日有逆風、無順風（于在時義弘朝鮮）、以故祈順風於串木野諏訪大明神以神樂、且復為法樂詠一首、

夕涼ミ御山おろしにさそわれて
繋しふねのいつるミなとへ

右、龍伯公御詠歌之由、古書之申傳有之、

上名村之内
一 妙見社　仲哀天皇本石体立木像一躰高サ六寸乗物亀
文久三年亥三月建立
右氏子修甫、　地頭仮屋元より寅之方
六丁四間
勸請之由緒不相知候、
祭日十一月十三日、神供向井原屋敷名頭より相
備、社司入枝肥前相勤来候、

上名村之内大六野
一 山神　天治玉命　石体
右氏子修甫、　地頭仮屋元より寅之方
弐拾八丁三間
祭日十一月初申日

上名村之内五反田
一 山神　天治玉命　乗虎燒物像　虎より高サ
壱尺弐寸四卩
右氏子修甫、　地頭仮屋元より戌之方
六丁三拾間
祭日十一月初寅日
右二社勸請之由緒不相知候、行司役より神供
相備、社司入枝肥前祭来候、

下名村之内芹ケ野
一 山神　玉治玉命（天カ）　石体
右氏子修甫、　地頭仮屋元より子之方
壱里弐丁四拾壱間
右勸請之由緒不相知候、上古金山繁榮之節者、
正五九十一月十六日、祭料真米弐斗九升、銭
八百文、毎祭　御物より被召渡候、金山御引
取後迄茂被召渡候処、何年簡比より被召上候
茂相知不申候、

下名村之内
一 深田大明神　彦火々出見尊　座木像二躰　一躰高サ八寸
一躰高サ六寸八卩
石十二体
右氏子修甫、　地頭仮屋元より酉之方
弐拾四丁拾六間
祭日二月二日　九月九日
鰐口　無銘

下名村之内節政
一 天満天神　中将殿菅原嫡子　座唐金像高サ弐尺五寸

祭日二月廿五日　　地頭仮屋元より戌之方

拾五丁拾八間

一　鰐口　無銘

一　具足

一　刀

右弐行宝物、寛政元年津波之節流失之由、

祭日九月廿八日、祠官塚田播磨相勤申候、

一　下名村之内濱浦　伊勢大神宮　幣掛神体

右氏子修甫、

地頭仮屋元より申之方

弐拾壱丁廿三間

鰐口　無銘

祭日正九月十一日

右三社勸請之訳不相知、氏子中より神供相備、

社司入枝肥前祭来候、

一　右同所之内景色宜地　驪龍巖

右往古者恐嶋与相唱候処、何年簡之比より寺嶋与唱替、文字ニ茂相用候訳不相知、能景之地与申所ニ而、先年以来信證院様、於栄様、妙心院様、嶺松院様、於千万様、市来温泉より御遊覧有之、寛政二年戌三月大守齊宣公市来温泉より被遊御光越、驪龍巖与被名附、文字其中尤(奇)寄なる石ニ書候様、侍醫河村宗膽江致彫刻候様被仰付彫刻有之、村上静馬殿より被仰渡候書付有之候、

一　下名村之内嶋平寺嶋　松尾大明神　大己貴命　座木像三体　高サ壱尺三寸　右同五寸　右同三寸五ㅁ

右氏子修甫、

地頭仮屋元より未之方

弐拾四丁五拾弐間

右勸請之由緒相知不申候、

一　獅子駒二ツ

一　下名村之内別府　稲荷大明神　大山祇女　倉稲魂大明神　座木像五躰　高サ七寸宛

地頭仮屋元より未之方

一　鰐口　無銘

祭日二月五日　九月五日

壱里弐丁五拾壱間

下名村之内所崎
一　八房大明神　孝靈天皇御子　石体

地頭仮屋元より午之方

三拾丁五拾間

一　鰐口無（銘脱カ）

祭日二月六日　九月九日

上名村之内川崎
一　諏訪大明神　上宮健御方命　下宮事代主命　幣掛神体

地頭仮屋元より丑之方

弐拾三丁五拾間

一　鰐口無銘

祭日七月廿六日

右四社勸請之由緒相知不申、氏子中より神供相備、祠官塚田播磨祭来候、

荒川村之内
一　松之尾大明神　両神三品眷属神座木像高サ壱尺五寸

右氏子修甫、

地頭仮屋元より戌之方

壱里弐拾四丁五間

一　鰐口無銘

祭日二月　九月六日

同村之内
一　諏訪大明神　上宮健御方命　下宮事代主命　座木像高サ七寸壱寸宛

右氏子修甫、

地頭仮屋元より亥之方

壱里廿九丁三拾五間

一　鰐口無銘

祭日七月廿五日

右両社勸請之由緒不相知、氏子中より神供相備祭来候、司官梅北隼人祭来候、

羽嶋村之内
一　天神宮　丞相真道（ママ）公中比御方吉祥女像無シ、

右氏子修甫、

御正躰一面　差渡七寸

地頭仮屋元より戌之方

弐里弐拾七丁七間

祭日八月廿五日

一 羽嶋村之内 諏訪大明神 上宮健御方命 下宮事代主命　座木像四体　高サ八寸宛

右氏子修甫、　地頭假屋元より戌之方　弐里拾丁三拾九間

一 鰐口無銘

祭日七月十八日

一 宇賀大明神　石躰

右氏子修甫、　地頭仮屋元より戌之方　弐里拾弐丁八間

祭日九月十五日

右三社勸請之由緒不相知、氏子中より神供相備、社司梅北左膳祭来候、

一 羽嶋村之内海士泊海邊 羽嶋崎大明神　座木像四躰高サ六寸宛

御正躰一面　差渡八寸位

右氏子修甫、　地頭仮屋元より酉之方　弐里廿八丁五拾八間

一 鰐口無銘

右頴娃開聞宮御下り之節鏡を被遺置候を致勸請、鏡大明神与相唱候処、何年簡之比より社号唱違候哉、不相知候、于今神鏡御座候、寛政四年、御記録奉行衆御廻勤之節、委御糺御座候処、和鏡ニ而以後之物之由御座候、海邊ニ造営之社ニ而、寛延元年辰八月津波之節、諸品都而致流失候由申傳候、

祭日　正月元日　二月四日　五月五日　九月九日

十一月四日、神供氏子中より相備、社司梅北左膳祭来候、

一 羽嶋村之内 若宮　鏡躰

但 差渡四寸計、取柄無、裏霧亀松竹、器地引之巣入黒塗、蓋ニ霧亀松竹之彫刻有、

右氏子修甫、　地頭仮屋元より亥之方　弐里弐拾七丁程

祭日　正月元日　二月四日　五月五日　九月九日

十一月四日

羽嶋村之内土川海邊
一甲大明神　座木像高サ壱尺六寸
右氏子修甫、
一　鰐口無銘　地頭仮屋元より亥之方
三里廿七丁三拾壱間
右開聞宮御下り之節、カモシヲ被遣置候を致勸
請候由申傳候而、于今髦大明神与茂相唱候、
祭日九月十日
右両社氏子中より供物相備、社司梅北左膳祭
来候、

上名村向井原屋敷
一阿弥陀　立木像高サ壱尺弐寸　地頭仮屋元より卯之方　拾五丁程
上名村字都屋敷
一観音堂　立木像高サ壱尺四寸　地頭仮屋元より卯之方　弐里拾六丁程
同村之内井上屋敷
一阿弥陀堂　座石佛高サ壱尺　地頭仮屋元より卯之方　壱里拾八丁程
同村之内久木野ゝ門
一地蔵　座木像高サ壱尺六寸　地頭仮屋元より卯之方　壱里拾丁程

同村之内前屋敷
一地蔵　立木像高サ壱尺六寸　地頭仮屋元より辰之方　拾八丁程
同村之内川宿田屋敷
一本山社　座木像高サ九寸　地頭仮屋元より寅之方　拾五丁程
上名村之内川崎門
一阿弥陀　立木像高サ壱尺八寸　地頭仮屋元より卯之方　拾六丁程
同村之内福薗屋敷
一阿弥陀　座石佛高サ弐尺弐寸　地頭仮屋元より卯之方　拾七丁程
同村之内坂之下門
一大日　座木像高サ壱尺　地頭仮屋元より辰之方　拾五丁程
同村之内大薗門
一観音　座木像高サ壱尺五寸　地頭假屋元より辰之方　拾三丁程
同村之内樋之口門
一観音　座木像高サ六寸　地頭仮屋元より丑之方　三丁程
上名村之内中尾屋敷
一地蔵　座木像高サ九寸五卩　地頭仮屋元より寅之方　拾弐丁程
同村之内地蔵堂屋敷
一地蔵　座石佛二躰高サ壱尺五寸宛　地頭仮屋元より丑之方　拾四丁程
同村之内長畠屋敷
一地蔵　座木像高サ九寸五卩　地頭仮屋元より酉之方　四丁程

同村之内迫門
一 觀音
座木像高サ壱尺七寸
地頭仮屋元より午之方
拾丁程

同村之内上袴田屋敷
一 虚空蔵
座木像高サ壱尺壱寸
地頭仮屋元より巳之方
八丁程

下名村之内神之薗門
一 地蔵
座木像高サ六寸
地頭仮屋元より申之方
拾六丁程

同村之内中薗門
一 薬師
座木像高サ六寸
地頭仮屋元より申之方
拾七丁程

同村之内野元屋敷
一 阿弥陀
座木像高サ九寸弐卩
地頭仮屋元より申之方
拾九丁程

同村之内久保屋敷
一 薬師
座木像高サ壱尺壱寸四卩
地頭仮屋元より酉之方
弐拾壱丁程

同村之内松木薗屋敷
一 毘沙門
立木像高サ壱尺
地頭仮屋元より申之方
拾五丁程

下名村之内内門
一 薬師
座木像高サ六寸
地頭仮屋元より未之方
弐拾三丁程

同村之内東之門
一 觀音
座木像高サ七寸
地頭仮屋元より午之方
弐拾弐丁程

同村之内西別府屋敷
一 薬師
座木像高サ八寸
地頭仮屋元より巳之方
壱里程

同村之内中別府屋敷
一 薬師
座木像高サ六寸
地頭仮屋元より巳之方
壱里程

同村之内上迫田屋敷
一 觀音
石体高サ壱尺
地頭仮屋元より巳之方
壱里程

荒川村之内別府屋敷
一 阿弥陀
立木像高サ弐尺八寸
地頭仮屋元より亥之方
壱里拾丁程

同村之内塩屋ゝ敷
一 春日
石体高サ八寸
地頭仮屋元より亥之方
壱里八丁程

同村之内羽根田門
一 觀音
立木像高サ弐尺五寸
石佛壱体高サ弐尺
地頭仮屋元より亥之方
壱里拾丁程

同村之内重田屋敷
一 薬師
立木像三体高サ弐尺五寸
石佛壱体高サ壱尺七寸
地頭仮屋元より亥之方
壱里拾三丁程

同村之内西屋敷
一 巖嶋宮
木像高サ五寸
地頭仮屋元より亥之方
壱里

□(羽)嶋村之内平石屋敷
一 山神
金幣長弐尺六寸
地頭仮屋元より戌之方
弐里拾八丁程

同村之内枇榔屋敷
一 地蔵
立木像高サ壱尺八寸五卩
地頭仮屋元より戌之方
弐里弐拾五丁程

同村之内万福屋敷
一　觀音　燒物座像高サ七寸　地頭仮屋元より戌之方　弐里拾九丁程

同村之内土川門
一　阿弥陀　燒物座像高サ七寸七ㇷ　地頭仮屋元より戌之方　三里弐拾七丁程

同村之内万造寺屋敷
一　藥師　座木像高サ壱尺七寸　地頭仮屋元より戌之方　弐里弐拾丁程

羽嶋村之内赤岩屋敷
一　阿弥陀　立木像高サ壱尺七寸　地頭仮屋元より戌之方　壱里三拾丁程

同村之内万福屋敷
一　熊野權現　金幣長サ壱尺六寸　鏡差渡三寸八ㇷ　地頭仮屋元より戌之方　弐里拾八丁程

下名村之内濱浦
一　藥師　石体二躰　地頭仮屋元より申之方　弐拾丁程

同村之内町
一　觀音　立木像高サ壱尺　地頭仮屋元より酉之方　拾九丁程

右四拾宇門附堂名頭修甫、

右者、此節寺社大小不限相糺、帳面ニ取仕立置候様被仰渡趣承知仕、相糺申候処、右之通御座候、尤御ヶ條書を以被仰渡候御廻文留、爰許古帳面之儀、先年児玉幸左衛門先祖郷士年寄居當番之節、出火差起リ燒失仕候段申傳御座候間、古年之儀者能ク相分リ不申候ニ付、此段申上候、以上、

（元治元年）
子五月

寺社方掛組頭
谷山吉十郎

寺社方掛郷士年寄
宮之原良右衛門（印）

（冊子表紙）
「古城並古戦場糺帳　」

（中表紙）
寛政十年午十一月

古城并古戦場糺帳

扣　　串木野

○三一　古城并古戦場由緒書付

一城

但亀ヶ城与相唱、上名村之内ニ有之、麓地頭仮屋元より子丑之方、仮屋元城内同前ニ御座候、

一建久年簡之比より串木野三郎忠道致領地、其子孫五代目七郎忠秋迄相續致居城候処、　道鑑公御代相亡候由申傳候、舊記等無御座候、

一道鑑公御代之節、　師久公暫御在城御座候処、所々之凶徒押寄御合戦有之、於西之手口ニ凶徒等御追伐有之候由申傳候、

但宮方凶徒之由申傳候得共、委相知不申、舊記等無御座候、

一元亀年簡之比、嶋津中務太夫家久公暫御領地、後ニ佐土原江御移轉御座候、

一古城

但古城与相唱、古堀之跡有之、當分上名村之内ニ而、麓仮屋元より寅卯之方道法五町程有之、何某居城之訳相知不申候、

一古城

但濱ヶ城与相唱、于今古堀之跡有之、當分下名村之内ニ而、仮屋元より未申之方八町程有之、何年間之比何某居城之訳相知不申候、

一古戦場

但坂之下椿与相唱、古堀之跡有之、當分上名村之内

ニ而、仮屋元より丑寅之方拾五町程有之、伊作六郎か一簇合戦いたし候跡之由申傳候、相手何某与茂相知不申、舊記等無御座候、

一古戦場

但陣之尾与相唱、要害之跡有之、當分荒川村之内ニ而、仮屋元より酉戌之方壱里程有之、何年簡之比何某陣取何某与合戦之訳相知不申候、

一古城

但城之薗と相唱、古堀之跡有之、荒川村之内ニ而、仮屋元より戌亥之方壱里弐拾町程有之、荒川太郎居城之由申傳候得共、何年簡之比何某与合戦之訳相知不申候、

一古戦場

但枯木ヶ尾与相唱、古堀之跡有之、荒川村之内ニ而、仮屋元より戌亥之方壱里弐拾六町程有之、何年簡之比何某々取合之訳相知不申候、

一古城

但椿与相唱、古堀之跡有之、羽嶋村之内ニ而、仮屋元より酉戌之方弐里拾三町程有之、何年簡之比何某居城之訳相知不申候、

一古戦場

但鳥越陣之尾与相唱、古堀之跡有之、羽嶋村之内ニ而、仮屋元より酉戌之方弐里弐拾七町程有之、何某陣取何某与合戦之訳相知不申候、

右者、古城并古戦場御糺方被仰渡趣承知仕、所中委相糺申候処、右之通御座候、以上、

（寛政十年）
午十一月十五日

郷士年寄助
加藤勇助

郷士年寄
吉武彦左衛門

御記録奉行衆
平田貞太郎殿

木場次右衛門殿

○三二　記録所覚留

仰渡之留

覚

一古城

但何城と相唱、當分何村之内有之、麓仮屋元より方角里数何程有之、且城主何某ニ而、何年簡何某与合戦有之候始末相知居候ハ、其趣書記、申傳又者書留等有之候ハ、、書写可差出候、

一古戦場

但地名何与相唱、當分何村之内ニ而、仮屋元より方角里数前条同断、上代何某と取合有之候場所之由申傳又者書留等有之候ハ、、其趣書記可差出候、

以上、

（寛政十年）
午十月

御記録方添役
木場次右衛門

伊集院より出水迄
十三ヶ所
右諸所
郷士年寄中

（冊子奥付）

郷士年寄

長次郎左衛門
加藤孫七
児玉源太夫
吉武彦左衛門
加藤勇助

○三三　記録所廻状

諸郷之内、古城古戦場之儀、嶋津世家改撰方御用見合相成候間、糺方申越候間、別紙案文之趣ニ應し、鎖細之場所迄も成たけ委敷相糺、一帳ニ取仕立、来月十五日限、無間違當座江可差出候、左候而此書付郷次ニ致順達、留之場所より便宜を以、返納可有之候、以上、

（寛政十年）
午
十月九日

御記録奉行
平田貞太郎

北村文書

○一　坪付

坪付

北村名　田平□(之)門

上　二反　山した

中　三反　中津まち

二反　ミや田

一反　□神王田

此うち二反神田　上

五反　山のくち

下　三反　くふきのうと

上　二反　おき原

四斗まき□はく地

□(ほ)りまち有、

□反

(北)□村名　迫之門

下　二反　しやうふ田

下　一反　いしさか

下　一反　柳かうと

下　一反　すゝ野かうと

中　一反　池のし□(りカ)

中　一反　八升堀かうと

上　一町一反　まへ田

一反　山の神田(つる)

上　六反　おき原

ほりま地有、

以上二町五反

『二』

北村名　なめりのかと

中　三反　ひらき田

下　一反　百む田

下　一反　なかむた

□

上　二反　山の口

一反　まへ田

ほりまち有、

□四斗まき

以上八反

畠地

二反（うきめん）　うけのその

二反　うの木

一反　大もんロ

以上五反

惣以上五町五反

天文廿三年甲寅十一月吉日

○ 二　伊集院忠棟外四名連署坪付

坪付　『三』

日州求仁郷

大崎之内

一　北方之門（假宿名）

貳反　沙汰分

一反丁　さかり松

丁堀町　日のめ

一反　大□□（田カ）

丁卩堀町　同所

壹反　永田

一反　下之園之下

貳反丁　四反田

二反　同所

丁堀町　永田

一反丁　永池

一反丁　左土原□田

一反　北橋■■

丁卩堀町　ゆのく地

一反仏免　堂免

丁卩佛免　觀音免

丁卩堀□（町カ）　□之祢

一反　堂薗之下

『四』

一反　西□
一反丁　あさか堀下
壹段卅　同所
一反　徳か久保
丁堀町　同所
丌卩井新　徳か瀬
已上貳町四反卅卩
此内神領、堀町、四反卅卩
横せ名上橋之門之内
一反　藺牟田
惣都合貳町五反卅卩
此内神領、堀町、四反卅卩
天正五年
貳月吉日

（川上忠克）意釣
（平田）光宗
（村田）經定
（書入）季久
（伊集院）忠棟

一作配當

北村拾郎（範為カ）太郎殿

○三　伊集院忠棟・本田親貞連署坪付

『五』

坪付

隅州大崎之内

一ヶ所小地之屋敷
丁堀町　しこめ
丁同　同所
丁卩年神免　あさつけ
丌　まへ田
丌　同所
卅神領　馬田

（料紙ココデ切レル）

丌　あさつけ
已上二反卅卩
此外神領、堀町
一反丁卩

浮免
横瀬名上草原門之内　小濱肥前守先
一貳反　せワ原
〃下西迫門之内　貴嶋先
一一反　中牟田
二田三反六厘
〃
都合六段
天正八年三月吉日
（本田）親貞
（伊集院）忠棟
北村拾郎（範為カ）拾郎左衛門尉殿

○ 四　新納久延書状

猶〻貴老御参候哉、御息御参にて候欤、如何候、
頃者御無音之至候、仍　又（久保）一様就御上洛、舟本迄各〻御
供之由被仰付候、先ニ以沙汰人申入候、来廿七日必定御
打立之様ニ聞え候、乍去志布志へ相尋候条、□限□
儀者夕方可申□、恐□言、
（天正十八年）正月廿五日　久延（花押）

（墨引）伊□弾守殿　御宿所　新納蔵人　久延

○ 五　川上肱枕（忠智）外二名連署坪付　『七』

薩州入来院上添田村之内
一作　茶薗屋敷
分米大豆拾八石者　餅田村之内　浮免
分米大豆七石者
高合廿五石也、
右知行惣高之内無親疎米可被配分者也、
（新納長住）旅庵
文禄五年二月廿二日□（黒印）　（伊集院久春）一雄
（印文「福」）　（川上忠智）肱枕
北村（国家）彦八郎殿

（端裏ウハ書）
「北村彦八郎殿」

○　六　本田三清親貞書状

猶〳〵普請衆逗留ハ詰五十日たるへく候、路次者のほり廿日たるへきかと申事候、陸路を可被罷上之由申候故ハ、一日も一剋も御急用之儀候まゝ如此候、彼出立之分にて十七人ハ普請衆、又三人間ニ夫丸壱人御遣有へき御談合尤候、此方之盛ニ不届事も可在之候、可然之様ニ御才覚可□、乍重言爰許之勘定ハ壱人ニ付銀子九疋五分ハかりニて、路次之分又五十日之滞留ハ可閉かと申事ニ候、五十日之分ハ七合五夕ッ、、但能米たるへく候、壱人分ニ如此欤、御談合次第ニ候、

従京都御普請衆又五拾人指上せ候へと、昨日以書状被仰下候、然者即時相盛申候分人数三十三人つもらせ候、其許ハ彼諸所之書付を以、拾七人可有御盛候、夫丸ハ御普請衆三人間ニ壱人ッ、可遣之由、京より之指圖にて候、此表ハ諸所無足衆軽き人衆と申渡候、打立は今月十五日ニ必たゝれ候へと堅申候、但二千石ニ壱人宛罷立候へと申事ニ候、出物ハ壱石役ニ鳥目壱文ッ、ニ申候、高ハ天正拾九年より前ニ御公役ニ申候差出之石役にハ不申候、為御得心所之書付を令進之候、恐〻謹言、

□月□　　本下野入
　　三清（花押）

（川上忠智）
肱枕□
人〻御中

○　七　加治木支配所坪付

加治木高井田木田村之内

一　浮免

川原田二畝四歩大ッ二斗四升ノ内　拾兵衛尉
上畠　壱畝二歩

大ッ壱斗二升

大川添壱反六畦大ッ□表五升ノ内　八左衛門尉
上畠　壱畝十五歩

大ッ壱斗六升八合

合大豆貳斗八升八合

高ニシテ三斗

（加）
□治木
御支配所□（黒印）

（端裏ウハ書）

「北村平右衛門尉殿」

○八　北村安清範為覚書

覚

一先年蒲生殿御敵被申候刻、親安藝守北村より妻子ヲ捨（城主ニ而候、然処）置申、鹿児嶋へ参申（申入）御奉公仕候、其忠として蒲生御手に参候ハヽ、本領北村之事、可被下由御約束ニて候、左様成御侘、加治木ニ而本田源右衛門尉殿（親商）・日野内膳（資顕）正殿ヲ以申上候、被成（其節被仰聞せ候ハ）御意候ハヽ、御奉公之返御存知之于今無御失念之由　御意ニて候、聞召被置之、御返事候事、

一高麗赤國入ニ　維新様御渡候刻、京都臥（伏）見之御留主番白坂周防入道殿・帖佐彦左衛門尉殿参（旅）合方へ同前、殊普請見廻被仰付七年在京申候、辛労申候通被仰聞せ、比志嶋源右衛門尉殿御使ヲ以、知行貳百石可被下由御約束共候、（其時之御證人）于今右之様子河上四郎兵衛尉殿于今御存知寄候事、

一帖佐へ　維新様被成御移候明慶長元年ノ明二月より御普請之見廻被仰付、元和三年之十二月迄（廿三年）御奉公申候、其内十九（六）年は隠居申候而御奉公申上候事、

右之様子御侘申上候間、御披露頼上候、

申二月廿一日　　北村平右衛門尉（範為・安清）入道

○九　北村範為覚書

覚

一親北村へ罷居申候時分、比志嶋美濃守殿からくり被□（仕）蒲生殿□（御カ）てき被成候ニ付、蒲生殿□仕候而取申候、御奉公可申□被仰付候処ニ、蒲□（生）殿聞付被成候ニ、仍不被成□妻子北村捨置候共、鹿児嶋へ参候時之御やくそく□に御手ニ御入被成候時分、本領□（北）村可被下之御□にて候事、

一ふし見ニて二百石可被下之　御意にて首尾不申候事、

一帖佐へ□（御カ）移之次正月より元和三年十二月迄普請奉行仕申候、殊更隠居ニて十九□（年カ）御奉公申上候事、

一我等事ハ　殿様かミ方ヨリ御渡被成□、其前之年ヨリ
■申　殿様かミ方ヨリ　御帰朝被成候、□處申
下□
御奉□(公申カ)上候事、
右此段之侘申上候、
いくつほとしらてちや□文引かゆる人のこゝろ□
おそかろし
おもひの外の
くりやう
いくつほとしらてちやとにおもひノ外入□(後欠)

○一〇　八十嶋助左衛門書状

(封紙ウハ書)
「　御さかな　」

以上

今日　秀頼様御袋様御小袖あけ申候、即御返事候条御請取ニ可有御出候、為其如此候、恐々謹言、

九月八日　　八十嶋助左衛門

義久御使
喜入大炊殿
兵庫頭殿
御使
佐竹殿
御使
衆中
まいる

○一一　某覚書

覚

一琉球無所残相濟、彼國之王諸官人當國へ相渡候事、
一○琉球之儀、自今以後□被　仰付候、可目出度事、
一王被罷上御禮可被申上候哉之事、付向後日本へ　被召置候哉、又如琉球之可被遣候哉之事、
一嶋々畫圖之事、
一我々早々可罷上候処、琉球之儀ニ付承合儀候間、少延引候事、
一琉球之様子、於委儀者我等罷上可申上候事、
一○大明國へ琉球之儀可被仰遣哉之事、

以上

○一二　某覚書留

覚　　留

一御出仕并御兄弟衆御着合、諸人へ(候ハ)も御出合被成候事、能々御たしなミニ被成、御出候ハ、、急度無之やうに連々御心得御尤ニ候、

一方々御行之時、御供衆さうたん仕、あと崎へ走見確め度候由申候事、其聞得候、左様ニ□(候カ)へハ　上ニもかろく見得申、連々御ぎやうぎもあしき様ニ人々申迄ニ而候、乍憚申上候、

一御□祠所ニ而唄ヲうたひ、番之上ヲ仕、萬さうたん申候事如何敷候、自然他之人見申、外ニも相聞得候而ハ咲止ニ存上候、乍去御とせん(徒然)ニ□座被成候ニ付、　御意も哉候間□ニ而申候へく□　御意ヲ受候、

一□被成候時御そはニ罷居候衆よこニ可有人も有之様ニ見及候、　御兄弟様(皆)御内ニもケ様成事と有之哉、如何承候、自然御ゆるしニ而候哉、御□請候、

一□御□其外萬御けいこ方之儀、大方ニ被遊候義□上候、左様ニ候而ハ御兄弟御着□被成諸事御たしなミ□御咄とも可有□時を重而御出候ハ、急度いとま申上候、

一方々御行之時□(分カ)馬ヲめし候へハ、御けいこニも罷成、其上□ニ候處ニ、此比者　御のり物ニて候、御兄弟左様ニ被遊□無之候、　薩州様聞召候而も不被可然儀ニ候、諸人も左様ニ申候由□(尤聞カ)得候、誠憚多儀ニ候へ共申上候、(後欠)

○一三　御蔵入嘱方諸法度之事

御蔵入嘱方諸法度之事

一耕作時分諸百姓へ検者可被相付之間、朝ハ日出早々作に打立、晩ハ日入時分可罷帰之事、

一知行あらしたるにおひては現作同前之可為納事、

一井手浚川よけ於致油断者、下代肝煎可為曲事之事、

一耕作、或田畠草取、あるひは収納等を差置、物詣并私之よりあひ可為停止之事、

一田畠之草可取時分、奉行可被相廻候間、油断之者於有之者、其科可被相懸事、付百姓之女房□草とるへき事、

一御蔵入之取納可為霜月限、若於致□物可被相懸之事、

一百姓手前より若於致賣地者、百姓にも買手にも稠其科可被相懸之事、

一下代肝煎若御蔵入之田畠百姓へ□ヲ作せ候ハヽ、則奉行所へ可申出候、若内談にて作候ハヽ、下代肝煎百姓□同前に其科可被相懸之事、

一下代送文并在郷へ逗留中之賄夫、定たる外に一人も不可仕之事、付取納中主従二人之野菜薪百□(姓)仕たるへき事、

一定置れたる外ニ下代衆へ百姓肝煎なと以故實夫已下其外御蔵入よりの入目於有之者、肝煎百姓へ其科可被相懸之事、

一節供〻之納物可為停止之事、

一御蔵入ハ、可被仰付儀可有之時者、奉行所よりの御判形可被仰付候、たとひ下代衆より申渡候共、奉行衆之判形於無之者、不可請付之事、

一百姓諸納方之請取堅可取置、若御算用之時、其受執不出におひては稠其科可被相懸之事、

一たハらは二重たハらたるへし、前稜に下代前より本を可出候間、如其可相調之事、

一行ゑもしれさる者其所へ来候ハヽ、奉行所へ早〻可遂披露候、為私不可拘置之事、

一奉行所之判形無之、□すにて御蔵米之取やり可為停止之事、

一諸下代衆曖所、一年きり所替たるへき事、

右條〻堅相守、不可有緩、若みたりなる者有之者、可被行罪科者也、

元和六年庚申正月十一日

(比志島国貞)(黒印)
紀伊守□

(伊勢貞昌)
兵部少輔□(黒印)

(三原重種)
諸右衛門尉□(黒印)

(喜入忠政)(黒印)
摂津守□

長里刑部左衛門尉殿

長崎佐渡守殿

北村三左衛門尉(国家カ)殿

○一四　喜入忠政外三名連署条書

（前欠）堅可為停止、若此中諸士持合之所へ、或百姓之子、或浮世すみの者被召置とも、御蔵入有時迄ハ不相迦様ニ可被申付候、後日者及沙汰、本之領主へ可被返付候、又其侭ニ御蔵所へ可被召置も、従奉行所可被相定事、

一作人従他方入来らんものハ拘置、作職可申付事、

一御蔵入之内、惣山野仕明之所者、本高之物成請合之外、相應ニ見懸候而可致上納事、付荒地之田畠仕明候ハ、其年ハ三分一之納たるへき事、

一桑・漆・茶・柿・みかん・くねふ・代々（橙）・くす・ハらび・のかね・栗・梨・枇杷・梅・桃・櫨之実・かたしの実・楮・松茸・椎茸・木くらけ可有之所ハ可有其沙汰事、

一麻苧・いちび・唐苧・木綿・紅花・紫・胡摩・荏子・なたね可有之所者可有其沙汰之事、

一諸用木可植事、付竹木可記置、并伐取間敷事、

一山海之肴、其所へ取へき品々連々相記、以日記可申上置事、

一連々被仰出候御法度之物、何色ニよらす他國被出間敷事、

一御倉入之中ニ口事篇於出合之□何時も下代衆以校量可被申濟候、若事実之儀其候ハ、可被申上事、

一其所へ有之諸職人銘々ニ可被付出事、付獵師高わなさし同前之事、

一御蔵入中、道橋之普請無緩可申付事、付當夏之麦取納之事、

一當春之草取納可被申付事、

元和六年二月九日

（比志島国貞）（黒印）
紀伊守□

（三原重種）
諸右衛門尉

（伊勢貞昌）
兵部少輔

（喜入忠政）
摂津守

永田刑部左衛門尉殿

長崎佐渡守殿

北村三左衛門尉（国家カ）殿

○一五　市来家友・鎌田政有連署書状

（端裏ウハ書）

「　　市来八左衛門
　　鎌田源左衛門
（墨引）伊東二右衛門尉（祐昌）様　　家友
　　御報　　」

猶以申候、御茶入ひらのかたつき、せ戸の御茶入、今壱ツ、合三ツ被見出候、各御存候やうニつくろいに被遣候、其外ハ何ゝ出申候首尾不存候、御数寄御道具何ゝ出申たる分不存候、とひロ水さし之儀も出申候哉、不承候、題目成御道具は皆奥へ為被召置之由候、燒跡改衆新納二右衛門尉殿・伊集院主計助殿、其外ニも餘多被仰付被改候間、右両人へ御尋候ハ、相知可申候、恐惶謹言、

九□（月）四日　　□（政）有　　家友

○一六　勘定所勘定目録

勘□（定目録カ）

加治木御臺所作事方

秋永志广允殿
四元權兵衛門尉殿
長田二左衛門尉殿
長井惣七衛門尉殿
大村次右衛門尉殿

請取方

（黒割印）一銭百五拾貫文ハ　　同
（黒割印）一真米拾八石八斗六升ハ　　同
（黒割印）一赤米三石者　　同
（黒割印）一諸雑物色ゝ　　同

（紙継目）

右拂濟

右者、寛永八年十月より同十二月七日迄加治木御臺所作事方萬請取払被差出、帳□（面カ）ヲ以算用相究候、諸證文者相返候、御用之刻ハ可被差出候、若問付より出儀□（候者）可申断候也、

寛永十九年
十二月四日

勘定所□（黒印、印文「監定」）
伊集院左京亮（久眞カ）○（黒印）
新納加賀守（忠清）

（紙継目）

平田正兵衛殿
北村平右衛門（国範）殿
白坂仲右衛門尉殿

（紙継目、裏ニ勘定所黒印ノ継目印アリ、□（継紙剝落カ））

○一七　勘定所勘定目録（黒割印）

勘定目録〉

加治木
御普請方

（黒割印）一真米五拾三石九斗三升七合五夕　請取方
（黒割印）一赤米拾壱石五斗五升ハ　同
（黒割印）一琉米壱石貳升七合五夕ハ　同
（黒割印）一銭千八百四拾七貫貳百五十七文ハ　同
（黒割印）一萬釘材木色〻ハ　同

右拂濟

右者、加治木御譜請方寛永八年□（九カ）月より同拾五年四月迄萬取拂帳今度被指出、算用相究事濟候、諸證文者相返候条、御用之刻者可被指出候、若従問付出儀候者可申断□（候）也、

（継目裏黒印）

勘定所□（黒印、印文「監定」）

正保二年八月十二日

喜入舎人佑□（黒印）
伊集院左京亮○（黒印）

北村平右衛門（国範）尉殿
平田正兵衛尉殿

〈（裏ニ勘定所黒割印アリ）

○一八　夢想歌

南呂五日之夜

夢想

はなに行道のゆきゝはとをからて

かへさわするゝなかきひくらし

同六日の夜

夢想

梅かえに咲そふはなの色よかよ

かハらぬはるのともとこそミめ

忠平

しら雲のかゝる高根の夕かつら

花に匂へる春のあけほの

忠弘

日にむかふ高根の道は長閑にて

□(神カ)のめくミや空にしるらん

あふき見る高根の霞空はれて

君かまふ(詣)てを神や守らん　大乗院

寛永四年正月二日

○一九　島津家久外和歌

(包紙ウハ書)

「

□(墨線)

○(朱線)

△(墨線)

『見合済』　『写済』

加治木

北村三左衛門　」

霧嶋参詣之時之

中納言家久

祈るより神代の春も今かよの■

恵ミもさそへ守れ國民

○二〇　島津家久外和歌

十月廿□(四カ)日

於大壽寺

家久様

花鳥の色香もいまは□ふる寺の

ひと木に残す霜の松□(か)枝

雨やミ□今日を待得し紅葉の心は□(色カ)に顕れにけり　紹嘉

古寺の苔の筵を捲替てもみちをしける木からしの風　喜庵

冬かけて残る紅葉のふりはへて□(躾カ)と□の庭　友平

頂高き嶺の松風吹落て寒まさるらん□(紅カ)葉の径　貞守

おほけなき袖を待得し古寺ハ□の□(しカ)るしとそ思ふ

■(大講寺カ)

○二一　島津家久書状並和歌

三首和歌詠　示會下■

新年之吉兆多幸〻〻、猶更不可有盡期候、仍此等之為祝儀佳札并五明□(一カ)本到来、怡悦之至候、何様諸慶永日中可申加候、恐〻謹言、

正月十一日　陸奥守家久

謹上　北郷讃岐守(忠能)殿

(黒印)……(紙継目、継書剝落カ)……(黒印)

名にめてゝ一休念裏にあつまれとひとつもやまぬ我慢情識

参しつる古則和頭もなにならすもとの心はもとの身身身身身身身にして身

人のうへ鏡にかけてみし科の我身になりてなとくもるらん　一作

(右ノ三首ハ書状行間ニ記セリ)

○二二　大迫尚純・野崎吉左衛門尉連署書状

猶〻桝之儀承□出来候間、便次第持せ可申候、以上、

芳札令披見候、仍此比ハ紀州老御氣色一入御能御坐候□之由申事ニ候、各可御心安候、然者河成帳之儀承候、椛山殿御假屋より便次第持せ可申候、茶取納之儀、先書ニ而如申候納之内三分一か□四分一欤、現之茶にて可有御請取候、其余者壱斤ニ付代銭二百文ツ、申定候、其御心得尤候、表見懸之儀者先書ニ而具ニ申渡候間、賄料之儀不及申ニ候、下知識村衆中持之分者見懸有之間敷候、本領主へ被相付之由定候、御前帳之儀承候、遠方へ被遣事御法度ニて不罷成候、河除普請之儀、御老中御状申受、椛山殿へ差遣可申候、余者追而可申承候、恐惶謹

言、

三月廿七日　　野崎吉左衛門尉

□（花押）

大迫平左衛門尉

尚純（花押）

長崎佐渡守殿

北村三左衛門尉殿　御報

（包紙ウハ書）

「　　證文　　」

（包紙ウハ書）

「　　御證文入　　」

○二三　五兵衛申渡書

北村三左衛門弟
北村十助

右者、別立成之願申出、願之通被仰付候条、可被申渡候、

（天保六年）
未閏七月八日　　五兵衛

與頭衆

○二四　加右衛門申渡書

北村長次郎

右者、北村十助直子無之、兄北村三左衛門甥右長次郎養子成、依願御免被仰付候条、可被申渡候、

（天保六年）
未八月廿八日　　加右衛門

與頭衆

○二五　安山四郎左衛門申渡書

北村十助

右者、御用之儀有之候間、麻袴着用ニ而明四ツ時當座江可被罷出候、以上、

與所
安山四郎左衛門

申三月廿三日

○二六　五兵衛申渡書

北村十助

右者、実兄北村三左衛門致病死、男子無之、右十助嫡家跡用〻〻相續之願申出趣有之、願之通被仰付候条、可被申渡候、

五兵衛

申三月廿三日

与頭衆

○二七　源右衛門申渡書

北村三左衛門

右家督

北村十助

右隠居

右、願之通被仰付候条、可被申渡候、

五月廿七日　　源右衛門

與頭衆

○二八　札方役所銀子請取証文

受取

（黒割印）

銭弐貫七百六拾弐文　（黒印）

右者去ル酉年より卯年迄出銀とシテ上納候、

札方役所（黒印）

卯三月十六日

前田喜三右衛門殿

○二九　内改札方有村銕兵衛覚

覺

一銭四拾弐文　古札壱枚ニ付

内弐拾弐文　御物上納

拾六文　諸雑用

四文　しらけ代

一銭五拾七文　新札壱枚ニ付

内弐拾弐文　御物上納

拾九文　新札代

拾六文　諸雑代

一銭三百四拾八文
家内八人分
○神宮司五左衛門
一銭四拾弐文
家内壱人
○神宮司善太郎
一銭百七拾弐文
家内四人
○神宮司新太郎
一銭八拾四文
家内弐人
前田喜三右衛門
□(一銭)四拾弐文
家内壱人
○湯地新太郎

右者、此節宗門手札御改ニ付、出銀上納右之通當月中可被致候、此段御問合申越候、以上、

但
銘〻可被次渡候、尤出銀之儀者銘〻現銭□(上)納、

内改札方
有村銕兵衛

二月□九日
湯地新太郎殿
○神宮□(司)五左衛門殿
其外

○三○　山本仁兵衛宗門改証文

証文

○家内壱人(黒割印)　禅宗前田喜三右衛門

右者、此方内ニ而御座候処、其御元江為稼方致中宿候段申出候、何そ無口能者ニ御座候間、被召置可給候、尤御法度之宗旨ニ而無御座、毎年於此方宗門相改可申候ニ付、其御方御改可被召除候、仍而證文如此御座候、以上、

伊勢亘役人
山本仁兵衛○(黒印)

天保二年

卯三月

始羅郡山田

郷士御年寄衆中

○三一　前田直恒差出留

差出

一当年七拾歳　禅宗　前田次□（右衛門）

一同六拾弐歳　同宗　前田次右衛門□（妻）

一同三拾壱歳　同宗　前田次右衛門嫡子　前田平七

一同弐拾九歳　同宗　前田次右衛門嫡子前田次右衛門平七〻〻〻〻　妻

右ハ、溝邊郷士野間七□（兵衛カ）□娘ニ而御座候処、為縁与入来□手札除證文之儀ハ先達而差上置申候、

一同三歳　前田次右衛門嫡子前田平七嫡子　前田平次郎

右、辰年札御改已後□（生子カ）、直子別条無御座段、近所證文相添差上申候、

一同三拾九歳　前田次右衛門甥　同宗　前田平右衛門

一同三拾六歳　前田次右衛門甥前田平右衛門妹　同宗　亀鶴

一同六拾三歳　前田次右衛門弟　同宗　前田平八左衛門

前田次右衛門弟前田平八左衛門

一同四拾七歳　真言宗　同　妻

一同弐拾四歳　前田次右衛門弟前田平八左衛門嫡子　禅宗　前田喜右衛門

一同弐拾弐歳　前田次右衛門弟前田平八左衛門女子　同宗　つる

一同七拾三歳　同宗　前田次右衛門　伯母

〆現人数拾弐人男六人女六人

外ニ

札年拾歳　前田次右衛門女子　禅宗　て□

右、加治木御家中寺師五郎左衛門江為縁与相除申候、□（但カ）證文之儀ハ先達而差上置申候、

札年八才　前田次右衛門女子　禅宗　乙松

右、隅州山田郷士向江伊兵衛殿へ為縁与相除申候通、證文之儀ハ先達而差上置申候、

札年拾弐才　前田次右衛門従弟　禅宗　乙

右、安永弐巳十二月相果申候、

右ハ書□

年号月日　　前田次右衛門（直恒）印

宛書

○三二　実名書付

（三二の1）
（包紙ウハ書）

「（朱印）
實名
（前田カ）弥右衛門殿」

（朱印）
○實名

△平姓

前田氏

重家之字也、

△重傳（コンヂツグ）「傳重歸納字
陳壓助紐字

謂此雙声音和切、廣韻指南曰、凡反切法者以音和為正云、

○歸字例

歸與反切其義同然、不云反切曰歸者説文歸嫁也、公羊傳婦人謂嫁云歸、婦人之夫家嫁則生其子、反切之義亦如是上字為切切如夫、下字為韵韵如婦、上下之二字相摩生其字如人生子、故歸納一字如子、依上字定軽重清濁如子續父姓、依下字定平上去入似子母胎出、故表此義不云反切云歸也云云、

大隅國府之隠士
紫陽後学
賞善堂藤原姓（朱印）
竪山氏（朱印）
利長誌之

元禄（十二年）己卯冬十一月吉日

前田彌右衛門殿

（三二の2）
（包紙ウハ書）

「（朱印）
實名
前田次兵衛殿」

（朱印）□

○實名

△平姓

前田氏

重家之字也、

△重仲（シンケナカ）父母　仲重　歸納字

陳壓　助紐字

謂此雙声音和切、廣韻指南曰、凡反切之法以音和為正云云、

三折一律之法

凡反切有二字、以上字曰切、以下字曰韵、呼其在上字知属其字母、既知字母訖看其母、下之助紐之二字乃切與助紐連声弄之與韵相協得、所求音是曰歸納也、且如重仲切以陳壓助紐呼與助紐及韵則得重陳壓仲四音、今按用三折之意、重陳是切陳、陳壓是切壓、壓仲是切仲、是三折一律之正法也、

大隅國府之隱士（朱印）□（朱印）

紫陽後学

賞善堂

藤原姓

堅山氏

利長誌之（花押）

元禄己卯冬十一月吉日

前田次兵衛殿

（三二の3）

（朱印）□

○實名

△平姓

前田氏

重家之字也、

△重長（シンケナガ）　長重　歸納字

陳壓　助紐字

謂此雙声音和切、

廣韻指南云、凡反切之法者以音和為正云〻、

歸字例歸與反切其義同、然不云反切歸云者、説文ニ歸者嫁也、公羊□（傳カ）婦人謂嫁云歸、此意婦人之夫家嫁則生其子、

反切之義亦如是、上字為切切如夫、下字為韻〻如婦、
□（上下カ）之二字相摩生其字□（如人カ）生子、故歸納一字如子、依
（後欠）

（三二の4）
（包紙ウハ書）
「□（朱印）
實名
前田拾左衞門殿
□（朱印）」

○實名
△平姓
前田氏
重家之字也、
△重陳（シンケクラ）
陳重
歸納字
陳壓
助紐字
謂此雙声音和切、
廣韻指南曰、凡反切之法者以音和為正云云、

三折一律之法
如重陳之切以陳壓為助紐
重陳是切陳
陳壓是切壓
壓陳是切陳
此三折一律之正法也、

隅陽國府之隱士
紫陽後学
賞善堂竪山氏（朱印）
□（朱印）
利長誌（花押）

元禄己卯冬十一月吉日
前田拾左衞門殿

（三二の5）
（包紙ウハ書）
「□（朱印）
實名
前田八兵衞殿」

（朱印）

○實名

△平姓

前田氏

重家之字也、

△重住（ジウケスミ）　住重　歸納字

陳凰　助紐字

謂此雙声音和切、

雙声者指掌曰、切韻歸納之字一類五音不雑、別声下之韻之字則又為歸納也、此法者只一行之内而反切取、故竪末之例而所求之字無別出也、

音和者指掌曰、取同音同母同等同韻四者皆同謂此音和、

廣韻指南云、凡反切之法者以音和為正云云、

大隅國府之隠士
紫陽之後学
賞善堂
竪山
氏
（朱印）
（朱印）利長（花押）

元禄己卯冬十一月吉日

前田彌兵衛殿

（三二の6）
（包紙ウハ書）

「（朱印）
實名
前田市左衛門殿」

（朱印）

○實名

△平姓

前田氏

重家之字也、

△重著父母（ジウケキラ）　著重　歸納字

陳凰　助紐字

謂此雙声音和切、廣韻指南曰、凡反切之法以音和為正云云、

□（類カ）声（雙）者指掌曰、切韻歸納字一□（類カ）之五音而不雑、別声下之韻之字則又為歸納也、此法者只一行之内而取反切、故竪

末之例而所求之字無別出也、
音和者指掌曰、取同母同等同韻同音四者皆同謂此音和云々、上字定軽重清濁如子續父之姓、依下字定平上去入似子出母胎、故表此義不云反切云歸也云々、

大隅國府隠士（朱印）
紫陽後学　竪山氏（朱印）
賞善堂利長誌（花押）

元禄己卯冬十一月吉日

前田市左衛門殿

（三二の7）
（包紙ウハ書）

「（朱印）
實名
前田覚之丞殿」

（朱印）
○實名
△平姓

前田氏
重家之字也、
△重直（シンケナリ）　直重歸納字
陳壓助紐字
謂此雙声音和切、
雙声者指掌曰、切韻歸納之字一類之五音不雜、別声下之韻之字則又為歸納也、此法者只一行之内而取反切、故竪末之例而所求之字無別出也、
音和者指掌曰、取同母同等同音同韻四者皆同謂此音和、
廣韻指南曰、凡反切之法者以音和為正云々、

大隅國府之隠士
紫陽後学（朱印）
賞善堂（朱印）
竪山氏
利長誌之（花押）

元禄己卯冬十一月吉日

前田覺之丞殿

（以上ノ奥名書付中「○」「△」印及ビ合点ハ朱書、尚朱角印ノ印文ハ「竪山氏」「利長之印」ナリ）

○三三　名字考書付

（三三の1）
實名

應求考之、

享保元年丙申十一月廿六日誕
火　性

直恒（ナラツネ）　歸納　騰（ノボル）
火土　火

右異位音和　珍重

菱刈湯之尾住人
酒匂林右衛門
景棟（花押）
考

寛政二年庚戌
十月吉日
前田次右衛門殿

（別紙）

「火性　前田次右衛門事ハ
伊左衛門　喜左衛門　幸右衛門　有右衛門」

（三三の2）
實名

應求考之、

安永七戊戌年生
木　性

直備（ナラツマサ）　歸納　緻（ナ）直
火水　火反利

三同音和反
平景棟反切

寛政二年庚戌
十月吉日
前田平次郎殿

（三三の3）
實名

應求考之、

宝暦三年癸酉五月二日生
本命金

直毗（ナラヤス）　歸納　治
火水　火

憑切

平景棟反切

寛政二年庚戌

十月吉

前田平七殿

○三四　酒匂景棟書付

此系圖ニ、右前田次兵衛重仲・前田覚之丞重直ハ、大隅之府士藤原氏竪山利長反切之名乗リ書付見得タリ、此人タルヘキヤ、

外ニ右同年同月ニ反切スル名乗リ之書付左之通有、

前田市左衛門重長

前田弥右衛門重傳

前田弥兵衛重住

前田十左衛門重陳

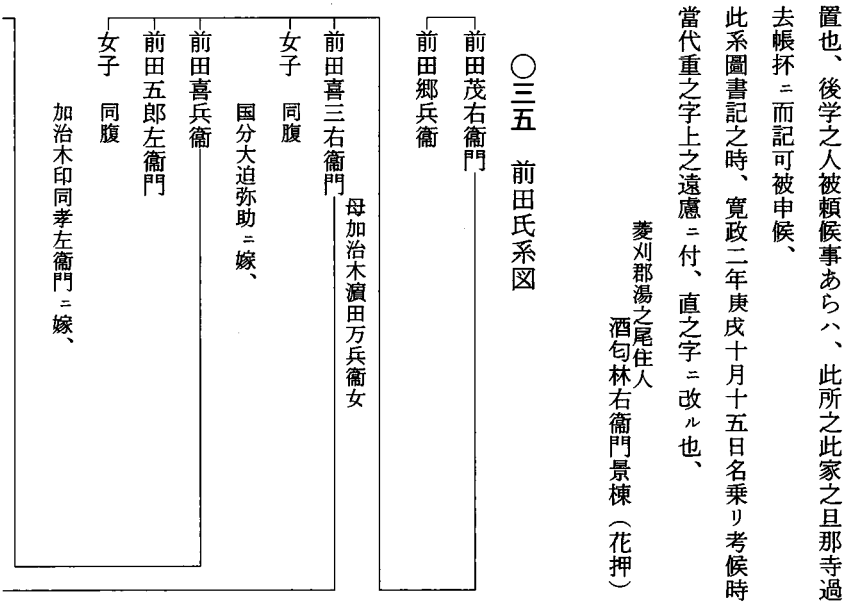
前田左兵衛（ママ）重著

右五人、前段之竪山利長反切之實名書付有之、然共何代次第等之事、少も寛政二庚戌年およひ末葉前田次兵衛直恒不承置之由申ニ付、本文書載へき様も無之、此返書載置也、後学之人被頼候事あらハ、此所之此家之旦那寺過去帳抔ニ而記可被申候、

此系圖書記之時、寛政二年庚戌十月十五日名乗リ考候時、當代重之字上之遠慮ニ付、直之字ニ改ル也、

菱刈郡湯之尾住人
酒匂林右衛門景棟（花押）

○三五　前田氏系図



前田吉兵衛　母同所前田四郎左衛門女

前田長兵衛直殑　寛保三癸亥年生、母右同、山田向井傳左衛門養子ト成、

直芳　前田茂右衛門　望右衛門　安永七戊戌年生、母帖佐郷士中野傳左衛門女

直興　前田清助

直恒　前田次右衛門　幸右衛門　享保元年丙申十一月廿六日誕生、母伊勢兵部家臣神宮司本学女

此前田次右衛門直恒、寛政二年庚戌十月十五日、前段前田茂右衛門より記シ置、

前田喜左衛門

直房　前田平八　享保八年癸卯九月廿九日生、母同、

前田平五左衛門　母溝邊津曲甚大夫女　早世

直號　前田喜右衛門

宝暦十一年辛巳十二月十三日生、母同、

女子　同腹　帖佐中満喜次郎嫁、

女子　母山田士向井弥左衛門女

直克　前田平兵衛　天明五年乙巳九月廿五日生、

直氏　前田平右衛門　寛保三癸亥年生、母蒲生山本十兵衛女

女子　同腹　山田士田原善左衛門ニ嫁、

女子　母加治木遠同市兵衛女印同市兵衛女　溝邊國生孫七嫁、

女子　同腹　加治木濵田万兵衛妻

前田喜助　同腹　早世

（直）□毗　前田平七　寶暦三年癸酉五月二日生、

女子　同腹　山田士向井伊兵衛ニ嫁、

直備前田平次郎
安永七年戊戌生、
母溝邊士野間七兵衛女
女子同腹

（本系図ノ罫線ハ朱書ナリ）

○三六　前田氏系図（断簡）

重□（仲カ）
前田次兵衛尉

○家督相續同重倫

重直
前田覺之丞

（本系図ノ「○」印並ニ罫線ハ朱書ナリ）

○三七　北村氏系図

○安藝守
北村嫡流之故、北村之城主ニて罷居候処ニ、蒲生殿守護方へ御敵被成之節、北村之城致籠城、同御敵仕候得共後ニ守護方ニ罷成、頓而死去為仕由申傳候、

伯耆守
兄安藝守と同前ニ北村ニ為相籠由申傳候、

○六右衛門
十郎太郎　十郎左衛門　平右衛門　入道安清
親安藝守死去之節七歳ニ而有之、比志嶋美濃守殿親類之由ニ付美濃守殿養育ニ而、美濃守殿ニ相付大崎ニ罷移、其後出水ニ移、其より平松ニ罷移候而、又加治木ニ罷移、到子孫加治木ニ罷居候、

國清
舎人

國師
治部左衛門

國友
舎人　宗右衛門
母有村氏女

國吉
久右衛門　母同、

五次右衛門
住出水、

國光
住高岡、

國保
菊松　七郎右衛門
母田代氏女

國平
菊松　治部左衛門
蒲生公

女子　山田弥七左衛門忠常妻

◐國家　三左衛門　母國分勘解由女
　國範　彦八郎　平右衛門　母山野長右衛門女
女子　市来十左衛門妻　母同、

◐國義　彦八郎　早世　母鹿嶋太郎兵衛女
女子　竹内千右衛門妻　母同、
◐國治　六右衛門　三左衛門　母同、
　○國信　萬吉　平右衛門
　國清　隼人
女子　寺師五郎右衛門妻　母同、
國貞　三之允　母同、

（三七の1）
右、安藝守以来ハ慥ニ相知申候、古系圖所持仕候ヘ共、安藝守迄ハ相知不申候、安藝守事、北村之嫡流ニ而北村ニ罷居候事ハ別儀無御座候、安藝守子平右衛門訴状案ニも北村城主之趣相見得申候条、安藝守嫡流ニ御系被下候様ニ奉頼候、以上、

（元禄八年カ）
亥二月廿五日　　加治木（国治・清陽）北村三左衛門

○三八　北村家略系図写

北村家略系圖　　写

○國　五次右衛門　左近

◐國博　五次右衛門　寛文二年壬寅三月六月卒、享年六十二、法名竹林立烟居士

女子　母税所大炊左衛門女　山田弥七兵衛尉有易妻

◯國有　鶴千世　次介　友右衞門尉　母同、
寛永八年辛未十二月廿三日誕生、
秀貞　梅千代　内記　母同、
為小田原佐渡秀利之養子、

女子　母堺田三右衞門尉通頼女
山本清右衞門尉重貞妻
國次　鶴千代　佐五左衞門尉　母同、
早世故不為家督、

◯國壽　虎千代　左近　母同、
寛文九年己酉六月十一日誕生、

亥
二月十八日　出水　北村友右衞門判

（三八の1）
右、出水北村友右衞門殿より被差出候寫とシテ、蒲生北村治部左衞門殿被差出候故、蒲生拾郎兵衞（清賢）殿へ差出候寫也、

元禄八年亥九月日　北村三左衞門（国治・清陽）

◯三九　島津氏系図

（本系図ハ清和天皇ヨリ島津光久ニ至ル、省略ス）

◯四〇　渋谷氏略系図

（本系図ハ省略ス）

◯四一　蒲生氏系図

舜清　号蒲生、
助清　早世
種清
清直

清成
清則　号北村二郎、
清久
清續
清茂
相續叔父清則家、

宗清 ― 直清 ― 道喜

清冬 ― 清寛 法名道悟

忠清 法名護法 ― 久清 ― 宣清

光清

（本系図ノ野線ハ朱書ナリ）

○四二　北村氏系図（巻子）

（藤カ）　（族カ）

北村氏系圖

♾舜清

上総介　號直光坊　母宇佐大宮司女

○舜清大職冠鎌足十二代ノ孫従一位関白太政大臣教通之男従三位侍従通基之子教清、為僧號撿校坊、住于山城州横川、後為宇佐八幡之留守職、下向於豊前國、而以當社大宮司之女為妻所生之男也、

○保安四年初下向於大隅州、而居住下大隅垂水、其後領蒲生及吉田、以蒲生為居城定家號、子孫相續守當城、為履勸（フマヘトコロト）請宇佐八幡矣、

○助清

七郎大夫　母頴娃郡司忠永女　○蚤死

○種清 ― ○清直

八郎太夫　母同、

○清成 ― ○清續

△清則 ― 清久

號北村二郎、

○嗣叔父清則之後、

○清茂 ― ○宗清

飛弾守

○直清
○清種

○清冬
彦太郎
○清寛
美濃守　法名道悟

○忠清
美濃守　法名護法
○久清
法號旨山悟宗

○宣清
刑部少輔
○光清
越前守

△清久
○相續叔父清則之家、實家督清成之二男、
○清久領久富、故或號久富、
○雖古系圖以清久為北村之元祖、考于嫡家蒲生氏及一族之系譜、二郎清則號北村、然則非清久初號北村明矣、今考之、清則無子、故清久嗣其後号北村者乎、一家之古譜咸符合、故以清則為元祖、系清久於其後、

△清家
△清氏
清之
号西俣、
清道
安清
△清景

女子
二郎妻　号妙連、崇白山權現、

△弁阿
二郎
○清景無男子故為壻養子、實比志島氏男也、故古系圖并系蒲生（アハセツテ）・比志島両家、為同姓矣、雖然何以藤姓北村、混于源姓比志島氏哉、古系圖只誤記弁阿實父之世系、而称同姓而已（ノミ）、

△玄喜
△清範

△慈栄
△慈珎
△範次
法名志厳

△清重

源三郎　常陸介　法名清松　号竜欣、

照蔵主

清員

清兼

女子

壽松庵

三郎四郎

三郎右衞門

女子

女子三人

△清義

太郎　法名源秀

『古系圖至于清康・清兼終焉也、按安藝守者領北村而北村城主、然則可謂嫡流者乎、因以安藝守系清康之子也、古系圖清康・清兼之両流嫡庶難明辨、雖然清康之系庶幾于嫡流以故繫焉、清康安藝守共嫡流、則雖非其子爪不可不其後矣』

△清昌

△清康

△安藝守

○家嫡蒲生氏頃年叛　太守公、依焉安藝守亦雖（イトモ）據于北村城暫奉敵　守護、依比志島美濃守國守之謀略、弘治年中、欲飄思降于　太守公之旗下而廻策陷蒲生城、事未成聞蒲生本城、故安藝守棄妻子、参于麗城、時有　高命曰、蒲生若入於太守公之手裡、可賜本領北村矣、而後未幾死去、

伯耆守

國清

與兄俱守北村城、後降　太守公旗下矣、舍人

國師

治部左衞門

住蒲生、

五次右衞門

住出水、

國友

舍人　宗右衞門　母有村氏女

國吉

久右衞門　母同、

國博

五次右衞門

國保

菊松　七郎右衞門

母田代氏女

女子　山田弥七兵衛有易妻　母税所大炊左衛門女

國有　鶴千代　次介　友右衛門　母同、

秀員　梅千代　内記　母同、

○小田原佐渡秀利養子

女子　母堺田三右衛門通頼女

國次

女子　山田弥七左衛門忠常妻　母同、

國平　菊松　治部左衛門

鶴千代　佐五左衛門　母同、早世

國壽　虎千代　左近　母同、

△範為　十郎太郎　十郎左衛門　六右衛門　平右衛門　入道安清

○弘治二年丙辰誕生、

○七歳而喪父為孤矣、因比志島美濃守國守親戚所養育之、以故従國守自蒲生移大崎、其後被　義弘公之鈞命、移居于出水・平松隅州・加治木、

○義弘公航於朝鮮國時、与白坂周防入道・帖佐彦左衛門俱奉　厳命、勤仕京都伏見之御留守番七年、且勉御普請奉行矣、　義弘公感其労、以比志島源右衛門有可賜采地二百石之　恩命、

○自慶長元年二月至元和三年十二月、廿二年勤仕于御普請奉行、就中(ソノナカ)十六年雖譲家隠居、猶奉行之矣、範為奉公之勞可知、

○寛永十年癸酉十月廿七日死、年七十八　白翁常清居士

△國家

彦八郎　三左衞門

○天正元癸酉年誕生、母國分勘解由女

○為　兵庫頭久朗公臣矣、

○寛永十五年戊寅三月十六日死、年六十六　法名久岳嬾桂居士

女子

市来十左衞門家度妻　母同、

△國範

彦八郎　平右衞門

○慶長九甲辰年誕生、母山野田長右衞門女

○寛文十一年辛亥十一月二日死、年六十八　法名廓然無聖居士

△國義

彦八郎

○寛永二年乙丑誕生、母鹿島太郎兵衞女

○同廿一年甲申二月廿六日死、法名仁岳宗寛居士年二十

女子

竹内千右衞門實澄妻　母同、

△清陽

始國治　六右衞門　三左衞門

○寛永十一年甲戌三月十五日誕生、母同、

○兄早世、故相續家、

○當家之古系圖其傳記不詳、故元禄八年秋依□家嫡蒲生十郎兵衞清賢雅丈考古譜、闕其疑□(取其)誤、別改系焉如斯、而并(アハセテ)古系圖以傳於子孫無窮矣、正徳元年辛卯十二月十三日死、法名一法永乗居士

(虫損ノタメ欠)

女子

□郎右衞門宗次妻　母同、

清房
三之丞
○正保二年乙酉十一月十日誕生、
□戊子三月十一日死、法名圓室全休信士

（虫損ノタメ欠）
△清以
□平右衛門
○寛文四年甲辰九月十七日誕生、母曾木伊右衛門
重公女
延享四年丁卯二月七日死、大峯壽椿居士

清純
隼人　清右衛門
○寛文□（八）年戊申十二月廿七日誕生、母同、
□月十日死、法名朴巖宗□居士

□（清香カ）
□為衛
（虫損ノタメ欠）

□（永三）寶□年丙戌九月十一日誕生、母大内山茂兵衛
女　清香實大脇安右衛門為員之二男也、清以依
無嗣子為養子矣、

（虫損ノタメ欠）
（ママ）
□
□為□（運カ）妻
□九年甲寅八月廿三日誕生、母内浦周左衛門
女
□（宝暦三カ）年癸酉九月廿六日死、法名秋月菊白大姉

（紙継目）

清經
十郎左衛門
元文四年己未六月十四日誕生、母同、

清次
平八左衛門

延享二年乙丑正月十二日誕生、母同、
安永二年癸巳閏三月十九日死、法名青岩宗白居士

清章
清四郎　三左衞門
明和六年己丑二月十七日誕生、母竹下十太郎女
天保四年癸巳七月廿三日死、

清長
十助
明和九年壬辰六月十七日誕生、母同、
兄三左衞門後嗣

清周
權助
安永七年戊戌（ママ）生、母同、
天保二年辛卯三月十二日死、

清亮
平八
天明二年壬寅十二月十三日、母同、

女子
母同、

清良
權左衞門
寛政四年壬子十一月廿三日生、母同、

清増
喜八
寛政七年乙卯四月廿九日生、母同、
為原田甚助養子、

清
權右衞門
文化七年庚午八月廿五日生、母溝邊外山傳八

女

清

長次郎

為十助清長養子、

○清長

十助

明和九年壬辰六月十七日生、母竹下氏女

兄清章依無嗣子請　命為養子、

○清

長次郎　三左衞門

文化九年壬申正月十八日生、母溝邊郷士外山傳八女

實庶流清周二男、為清長養子、

天保六年乙未八月廿八日継家、

清

源之進

天保五年甲午十一月十五日生、

母樗木矢四郎女

（以下省略ス）

（本系図ノ人名上ノ「☒」・「○」・「△」印並ニ罫線ハ朱書ナリ）

○四三　摩利支天神旗

（本図ハ省略ス）

桑幡家文書

○　一　古記（冊子）

『古記　第一号』

覺祐譲證文　自壹葉至貳葉

御綸旨写　自貳葉至參葉

注進十七ヶ条　自參葉至九葉

1　大隅正八幡宮経官大法師覚祐譲状

正八幡宮經官覚祐辞

譲與嫡弟永祐先祖相傳經官職講衆□領田畠男女所役

□官職、在調渡（度）證文等、但蒙　上宣、可知行之、

長日洛花經参拾口内壱口、但居一円御（薗カ）免、

毎月五箇新大般若經、在社日（司カ）與判次第證文等、

三箇日弥勒講　貳町并普賢講、在證文等、

諸堂行事職、在調渡證文、

枉（社カ）領壹所　在曾野郡藤十郎居薗、

□薗者、本師龍円房引文、理性房許在之状（ママ）之理性房

命之後者、可依龍円房弟子地蔵丸之由、難（難カ）有契状、

依被悔返、覺祐得分、

一神川、於彼薗者、為覺祐得分、仍可領掌之、

一曾野郡直垂田壹町、但當時者、理性房領治、彼命之後可領掌也、

一神川間事、紀之得分、覺祐所職得替、有所領得分煩之時、可為覺祐沙汰、

一男女所従等命婦佐伯三子處分外可服仕也、

右、件所職并私領田畠所従等、譲与嫡弟永祐之状如件、

貞應二年七月廿三日　　經官大法師

但シ當元文三迄年數記ニ五百十六年ニ成ル、

2　大隅正八幡宮大般若経田坪付

正宮政所源宿祢記是、

正宮　上人大般若經田之坪付

一町　山家之まろ

三町　小河ニあり、高寺の後有、

四反　そのこほりニあり、

五反　内山田ニあり、

一町　畠はうロニあり、

文明十八年十月廿日

但當享保十六年迄年數記二百四拾六年ニ成ル、元文三迄二百五十三年ニ成ル、

3　仁明天皇綸旨

写

仁王五十四代仁明天皇御宇綸旨也、

補二源々永如来御前法橋職一、任レ符立二宮柱一、奉三祭二日月星宿一、領二一天四海一、應三懇祈二天下一、仍諸官並座主経官等補二器用輩一可二進止一、肯被下レ令佛神事奉行耀中神皇寶前上之由、天氣如是、悉之、

承和九年壬戌八月　日　　左中将小槻

當元文三迄年数記ニ八百九十三年ニ成ル、

（本文書検討ヲ要ス）

4　正八幡宮講衆・殿上等訴状

状案御使越中前司入道々延帰洛之時、為御前入寺与山上執行上之、

暦應二十一十八

正八幡宮講衆殿上等謹言上

欲早被経厳蜜御沙汰、且依　公家武家代々御寄進、且任本家執印度々御下知、被修造堂舎佛閣、被下行諸供新米、弥奉抽恒例臨時御祈禱忠勤條々子細事、

副進

一巻　本家執印代々御下知状等案十二通修造堂舎可令供新由事

一當社神宮寺浄土院佛閣等任先例可被修造事

右諸堂内弥勤寺者、建宮最初之霊場、當社無雙之精舎也、然間奉安置三所之尊躰、令精祈一天擁護、号此太多羅子女、毎度之御節本社之神供以前奉備進之、是則依大菩薩御本槽（ママ）欤、爰年来破損之上、去建武四年八月廿二日依大風恙（悉カ）顛倒、佛像・神躰共被侵雨露給之間、奉遷于他堂舎之、興（冥カ）顛之恐不可不言上欤、然者彼堂舎寺顛倒朽損之間所訴申也、仍厳蜜被遂造營、欲全御願、

東堂院造營最中　最勝寺半作　三躰堂假作　九躰堂同前、但佛像十一躰内現在分二躰

迎構堂朽損　十躰堂假作　四王堂同前　尺迦堂一向顛倒

百堂同前　新堂同前　二王堂同前　鐘楼同前

経蔵朽損　法樂寺同前佛像燒失躰　最勝寺新堂假作佛像燒失

一御寶前日佛性米事

右佛性者、為毎朝不闕之神供、以新入由御米内被除置之条、先例也、雖然役所遲怠時者、為執印御沙汰被進宮之處、近年有名無實之条、神慮依有其恐所申子細也、早任先例、不闕之旨欲被備進之矣、

一御寶前正月修正檀供不法事

右勤行者、為年始最初之御祈禱、自正月元日一七ヶ夜不断慇懃之勤行也、而於帖佐彼壇供者、往古以来依被除御米内、為村々役、所令進宮之也、爰於帖佐十余ヶ村之外、神敵押領所々者、恐彼等悪行濫妨、不及催促、其外備丁之村々對捍之条、争可遁其科哉、任先規、可進宮之由、欲被仰下焉、

一長月勤行供粉事

右御勤等者、為毎日不闕之御祈禱所奉致丁寧也、於彼供粉米者、以曾野郡御佃米之内被下行之条、先例(也脱カ)、爰如本家連々被仰下者、不下行有限供粉米者、差遣公人等、任法可令沙汰下行日米、未進者定奉行遂結解(解)、可令致沙汰、且又可停止所帯所職、或村々弁濟使沙汰人等、乍引募有限京進御米、令點止供粉之条、付冥顕可恐可憚旨、嘉禄・正嘉・文永・建治・永仁以下代々御下知御教書明白也、仍所備于右也、而近年不法之間、可全下行之旨、欲被下御下知矣、

一百日大般若同最勝講供粉麦廿四石事

右供粉者、去保安年中奉為　大菩薩御崇敬、　知足院禅定天下以帖佐郷御寄進當宮之間、以供粉米廿□(七カ)石五斗、無退轉被下行衆徒畢、而中古御相轉(傳カ)四至内麦廿四石之間、彼麦内検之時者、先例經官相共遂其節、符行帳令知員数、全供粉之處、近年無其儀之間、有名無實之条、難堪之次第也、所詮、新講顚倒之分并故壹岐前司入道尚圓、以神敵闕所地備丁五□所被寄符四至内之上者、任先例、被相副經官、遂内検、如員数欲被下行焉、

□(二)毎月八日供粉米十三石事加閏月定

右御勤者、毎月以十口請僧所奉講讀百座仁王般若經也、然間於彼供粉者、往古以来、以宮永大下符米内被下行之上者、可為厳蜜之處、近年不法之条、難治之次第也、停止自由抑留、任先例、如員数欲被下行矣、

一四季轉讀大般若經供粉廿四口事季別六口請僧

右大般若經者、　吾神御崇敬之餘、去長久年中國司□(以カ)姶良庄奉寄御寶前四季轉讀大般若經供粉所之處、中古御相傳神領内所之為村々名主弁濟使等、令抑留厳重供粉之条、奉為神為君不忠至極之上者、任御下知之旨、

被處其身等於罪科、於有限供粉者、任員數可令下行之由、欲被仰下焉、

一桑幡若宮阿弥陀經供粉米壹石未下事

右件御勤者、每年十一月十五日、為傳燈行賢上人御忌日之間、於若宮御寶前令讀誦阿弥陀經四十八巻之条、于今不令粉(断カ)絶、而於彼供粉米壹石者、為執印御沙汰被下行之處、近年無沙汰之条、無供勤行難儀之間、所令言上也、早任先例、欲被全下行矣、

一関東御寄進異國降伏御祈禱供粉事

右供粉者、奉為聖朝安穩異國降伏御祈禱、自関東被寄進筑後國堺小保之處、本所又以御佃米参拾石為其替可下行之旨、御教書厳蜜也、無退轉可下行之由、欲被仰下焉、

一同御寄進日向國田貫田供粉事

右粉所者、當時土持一族等、假武威令押領之条顕然也、雖然於御勤者、以六十口請僧、每日六口之勤行所無退轉也、被經厳蜜御沙汰、欲被全供粉矣、

一每年十二月十八日佛名會導師供粉事

右勤行者、奉為　天長地久　本家執印御祈禱、為每年月廻之御勤、就奉致丁寧勤行、以長吏御分作稲参束被下行之条、先例也、而近年未下之条、頗御祈禱退轉之基也、早任先例、欲被下行焉、

一凡絹米下事

右件凡絹者、正月十五日最勝講供養御布施十疋、每月一日大般若一部、法華經仁王講心經供養御布施十二ヶ月分十二疋、同一日最勝講供養御布施十疋、已上四十四疋且注之、任先例、欲被下行矣、

一寺中講演僧膳等近年為寺領弁濟使等令捍(押)留無謂子細事

右僧供等者、自行賢上人以降、悉充堂領等、每月之會日令勤仕之事、已及二百余歳、更以無闕怠之處、近年大略及闕如之条、且無供之勤行也、且佛事廢怠之基也、早任先例、可備進之由、欲被下知焉、

一聖人大般若經供粉米事

右件供粉者、以曾野郡之御佃米内被下行者先例也、而寄事於余名每年不法之間、所申子細也、仍可全下行由、欲蒙御成敗矣、

一浮免經田供析等為御領名主弁濟使等令捍(押)留無謂子細事

右經講田者、代々國司御敬神之餘被奉寄　當宮之条、嘉禄・仁治・寛元・建長以下社國勘合之請文明鏡也、而名主弁濟使等違背代々御下知、致對捍之条、難遁其科欤、早任先例、云年々未進、云向後供析、以公人等可沙汰渡之由被仰下、弥欲被全御祈禱焉、

一當宮御寶前毎月御佛聖米不法事

右佛聖米者、數部經王讀誦轉讀之時、奉備　當宮神前、令祈精誠之御願之處、於神敵能清以下捍(押)領之所々者、神供佛聖以下諸供析米等、皆以所令退轉也、此事被經御　奏聞最中□(也)、至于其外傜丁之村々等者、又名主弁濟使等、依令対捍之、不備佛聖致無供御勤之条、奉為本所、為社家不可不申、然早被下御下知、欲全佛聖矣、

一万善村經田柒町加佛性燈油田一丁定分供析毎年七石弁濟使等年々対捍事

右當村者、為　當宮御寶前四季轉讀大般若供析米析所之条、天承二年國司御寄進状并嘉禄・仁治・寛元・建長社國勘合請文暦然也、衆徒等鎮守國司眼代寄進状、雖致丁寧之勤行、弁濟使等違背　本家執印御下知、令對捍年々供析之間、併所致無供勤行也、為神為君不忠之至極也、然早守代々御下知、云前々未進、云向後供析、可令究濟之旨、厳蜜欲被仰下焉、

以前条々大概如斯、抑　當社者　八幡垂跡之初宮、一天擁護之霊廟也、公家武家御崇敬異他之餘、被奉寄郡郷院之上、累世之本所數代之國司為經講供析、或被寄附庄園田畠、或被除宛御米年貢之次第、且載申于先段欤、然間衆徒等鎮抽慇懃之

丹誠、専仰尊神之玄應、晝夜且暮カ且募之勤行、所奉祈者御願也、身□中之衣食、所令帯者供析也、而近年名主弁濟使等、違背　本家厳重御下知、捍(押)留恒例有限供析米、衆徒等致無供之勤行、含數箇之鬱訴、空送年序之處、今不圖簾直御使御下向、併冥慮之所令然欤、然者等(マヽ)之年来愁吟被垂高察、可然之様被經御注進、且依國司連々御寄進状、且任本家代々御下知之旨、云以前未進、云向後供析、以公人等可被沙汰下行之由、厳蜜被成下御教書、弥奉祈公家武家之御願、専欲致神事佛事之勤行、仍粗言上如件、

暦應二年十一月　日　　講衆殿上等

但當元文三年迄年數記ニ四百年ニ成ル、

記云、い上一七ケ条　本家御使越中前司入道〻延放生大會可遂行之旨、賜　院宣并御教書、同十月十三日亥尅下向、十一月十九日帰洛之時付進之、

于時留守觀道可出擧状云云、十八日堅義結願以後以亥時、御前入寺祐笑与山上執行祐慶為両人、上公文所了、留守有對合、不審等問答云〻、

5　大隅正八幡宮神社次第

注進　當社本地垂跡之事

正八幡宮三所大菩薩　神社次第

本宮御寶殿

一宇三所御坐マス

一東　本地聖觀音　垂跡女躰

二中　本地釋迦如来　垂跡法躰

三西　本地阿弥陀　垂跡俗躰

同若宮殿一宇四所御坐

四所本地普賢文殊垂跡童男童女地蔵龍樹御身異説多也云、

武内本地十一面觀音異説毘沙門垂跡大明神

早風本地馬頭觀音垂跡隼人打給御鉾也、

雨社本地大日如来異説聖觀音

左右善神王本地北多門天南持國天

左右三社本地左二宇黒長菩薩　馬鳴菩薩右一宇大日如来

同石躰社ヨリ丑寅角ニ天承二天始テ石上ニ奉見顯ニ八幡之銘字金色ニ云云、

四所別宮始良庄荒田庄栗野院蒲生院

同其以後　鹿屋恒見若宮　吉田院善神王

加治木若宮善神王　祢寝院若宮

一諸堂塔　一浄土院　社頭近邊

法華三昧堂尺迦三尊像御願所晝夜ニ時ヲ打也、

弥勒寺　大多羅知女御坐ス　御願所

東堂院藥師　三躰堂大日尺迦弥勒皆金色

釋迦堂尺迦皆金色丈六并普賢文殊丈六

迎接堂（カウジウ）　来迎寺身弥陀并三尺之廿五菩薩

新堂採色弥勒菩薩

四王堂東方持國天南方廣目天西方増長天北方多門天

九躰堂　皆金色丈六八尺観世音　阿弥陀九躰并勢至佛像

十躰堂　五大力五躰　千手観音　馬頭観音　愛染明王　大威徳明王

百堂　不空羂索　宇別二門　宇別佛像　菩薩像　羅漢像　各一躰　狭　以上百佛　百菩薩　百羅漢像

一切經蔵七重石塔　在四天王石像　左金剛力　大門一宇二王　右力士

一御四至境内所々

東方　最勝寺　薬師　霊験所　同新堂阿弥陀像

南方　法樂寺　観音像　御願所

西方　朝日寺　観音像　霊験所

北方　咲限寺　観音像　霊験所

西光寺　阿弥陀堂

山王御社　山寺在、

放生會ノ大路ニ五重ニ三基ノ石塔有四天王ノ石像在、

和銅元年辛卯七月十一日（ママ）

正八幡三所大菩薩ト頭給也、同御名号

南無護國霊験威力神通大自在王菩薩

礼拝文

南無皈命頂礼海竜菩薩鑑鏡如意宝珠權現在大士等

○二　鹿児島神社関係史料（冊子）

1　日本書紀神代巻抜粋

『第一号』（号数ハ上欄ニアリ、以下同ジ）

日本書記神代巻抜萃（ママ）

于時高皇産靈尊以眞床追衾覆於皇孫天津彦々火瓊々杵尊使降之、皇孫乃離天磐座天磐座此云阿麻能以簸矩羅、且排分天八重雲、稜威之道別道別而天降於日向襲之高千穂峯矣、既而皇孫遊行之状也者、則自槵日二上天浮橋、立於浮渚在平處立於浮渚在平處此云羽企爾磨、而磐宍之空國自頓丘覓國行去頓丘此云毗陀梨陀毗邏而陀々志、而磐宍之空國自頓丘覓國行去頓丘此云毗陀烏、覓国此云矩貳磨、儀、行去此云騰褒屢、到於吾田長屋笠狭之碕矣、其地有一人、自號事勝國勝長狭、皇孫問曰、國在耶以不、對曰、此焉有國、請任意遊之、故皇孫就而留住、時彼國有美人、名曰鹿葦津姫亦名神吾田津姫亦名木花之開耶姫亦、皇孫問此美人曰、汝誰之女子耶、對曰、妾是天神娶大山祇神所生兒也、皇孫因而幸之、即一夜而有娠、皇孫未之信曰（信之カ）、雖復天神何能一夜之間令人有娠乎、汝所懐者必非我子歟、故鹿葦津姫忿恨、乃作無戸室入居其内、而誓之曰、妾所娠若非天孫之胤必當焦滅、如實天孫之胤火不能害、即放火燒室、始起烟末生出之兒、號火闌降命、是隼人等始祖也火闌降此云、褒能須素里

次避熱而居生出之兒號彦火火出見尊、次生出之兒號火明命、是尾張連等始祖也、凡三子矣、久之天津彦彦火瓊々杵尊崩、因葬筑紫日向可愛可愛此云埃之山陵、

兄火闌降命自有海幸幸此云左知、弟彦火々出見尊自有山幸、始兄弟二人相謂曰、試欲易幸、遂相易之、各不得其利、兄悔之乃還弟弓箭而乞己釣鈎、弟時既失兄鈎、無由訪覓、故別作新鈎與兄、兄不肯受、而責其故鈎、弟患之、即以其横刀鍛作新鈎、盛一箕而與之、兄忿之曰、非我故鈎雖多不取、益復急責、故彦火々出見尊憂苦甚深、行吟海畔、時逢鹽土老翁、老翁問曰、何故在此愁乎、對以事之本末、老翁曰、勿復憂、吾當為汝計之、乃作無目籠、内彦火火出見尊於籠中、沈之于海、即自然有可怜小汀可怜此云于麻師汀此云波麻於是棄籠遊行、忽至海神之宮、其宮也、雉堞整頓、臺宇玲瓏、門前有一井、々上有一湯津杜樹、枝葉扶疏、時彦火火出見尊就其樹下、徙倚彷徨、良久有一美人、排闥而出、遂以玉鋺来當汲水、因擧目視之、乃驚而還入、白其父母曰、有一希客者在門前樹下、海神於是鋪設八重席薦、以延内之坐定、因問其来意、時彦火火出見尊對以情之委曲、海神乃集大小之魚逼問之、僉曰不識、唯赤女赤女鯛魚名也比有口疾而不来、固召之探其口者、果得失鈎、已而彦火火出見尊因娶海神女豊玉姫、仍留住海宮、已經三年、彼處雖復安樂、猶有憶郷之情、故時復太息、豊玉姫聞之、謂其父曰、天孫悽然數歎、蓋懐土之憂乎、海神乃延彦火火出見尊、從容語曰、天孫若欲還郷者、吾當奉送、便授所得釣鈎、因誨之曰、以此鈎與汝兄時、則陰呼此鈎曰貧鈎、然後與之、復授潮満瓊及潮涸瓊而誨之曰、漬潮満瓊者、則潮忽満、以此沒溺汝兄、若兄悔而祈者、還漬潮涸瓊、則潮自涸、以此救之、如此逼悩、則汝兄自伏及将歸去、豊玉姫謂天孫曰、妾已娠矣、當産不久、妾必以風濤急峻之日出到海濱、請為我作産室相待矣、彦火火出見尊已還宮、一遵海神之教時、兄火闌降命既被危困、乃自伏罪曰、從今以後、吾将為汝俳優之民、請施恩活、於是隨其所乞、遂赦之、其火闌降命即吾田君小橋等之本祖也、

2　古史成文抜粋

【第二号】
古史成文抜萃

爾火遠理命、受其珠與鉤而帰来本宮而、備如海神之教言而先與其釣鉤矣、故自爾後其兄火須勢理命、日稍愈貧窮而更起荒心而迫来将攻之時、出潮満珠則潮大溢而其兄沒溺、因愁請云、吾奉事汝而為奴僕、願救活云矣、因出潮涸珠、則潮自涸而其兄平、復已而後改前言而、吾者汝之兄也、如何為人兄而事弟耶云之時、火遠理命、復出潮満珠、則其兄見之走登高山、爾其潮亦沒山、縁高樹、則潮亦沒樹、兄既窮途而無所逃去、故出潮涸珠而救之、亦其兄之為鉤時、火遠理命、居海濱而嘯之、則迅風忽起而其兄溺苦、而無可生由之故、遙請弟命曰、汝久居海原、則必有善術、願救之、若活給吾、則自今以往吾生児之八十連屬、不離汝命之御垣邊、為晝夜之守護人、為狗人而仕奉也白矣、於是、火遠理命停給嘯、則風亦吹息焉、

3　大隅国桑原郡鹿児島神社旊記抜粋

【第三号】
大隅國桑原郡鹿児島神社舊記抜萃

（本記事ハ六号ノ「道ノ社」部分ノ抜粋ナリ、省略ス）

【第四号】
八幡宮鹿児島神社一致奉稱正八幡宮ト也、正八幡宮四家ハ桑幡・留守・最勝寺・澤也、桑幡ハ元祖火闌降命ヨリ隼人正トテ上古ヨリ代々正宮ノ神主ノ家也、

【第五号】
寶暦十年庚辰冬十二月二十日舊記ニ道之社右一宇桑幡宮火闌降命也、

4　石體宮御伝記

【第六号】
石體宮御傳記

仲哀天皇　二月六日崩御、和泉國ニ葬、
神功皇后　四月七日崩御、大和國ニ葬、
皇后息長宿禰王之御子也、
應神天皇　二月十五日崩御、河内國永野山葬、譽田宮ナリ、
此大神御降誕ノ時、八旒之幡ヲ立禁非常給、故奉八幡申也、

人皇三十代　欽明天皇五年、大隅鹿兒山ノ麓ニ岩崩、其音如雷、實七月十一日辛卯也、人皆是ヲ見ニ、金色之光有ル大石顯タレハ、共ニ不思儀之思ヲ成ケル故、鹿兒島神社ノ祭主隼人正代代為神主間、神社ニ奉奏御神樂、　御神託(託カ)曰ク、我現丑寅　仲哀帝　神功帝　應神帝也、為守我朝現石體也、是ヲ以祭主隼人正參内而奉奏此旨、公卿有御議、勅使下リ給ヒ、　鹿児島神社御寶殿　仲哀天皇神功皇后　應神天皇御配祭也、自是奉申　八幡大神宮也、

（本記事ハ六号ノ「石體宮御傳記」トホボ同文ナリ）

『第七号』

5　旧記

旧記

一息長姓欽明天皇五年參内賜之、

6　三国擾乱記

『第八号』

三國擾亂記　正徳六年田部政轉編輯

吉田左近蔵人清忠　祖純四十一世大隅　正八幡宮之神官助清ノ男長太夫清道ノ後胤ナリ、

7　桑幡家三式之事

『第九号』

桑幡家三式之事

生児式　嫡子誕生至三十日當日於　正宮神前祝太夫奉奏生兒式

元服式　嫡子官服着、正宮神前着坐拜礼、祝太夫奏祝奉乞神勅、脩理執當捧神酒、執行三献式、終テ祝太夫結髪十一節而切之、當番請之納中殿、式終而下宮、治髪再奉御礼參申也、用寶刀天圓切髪始助長

上棺式　神孫棺槨舁詣之、於正宮神前御暇拜礼行事、古例隼人神傳也、神具木剱木鎗木楯者可為随行于神前也、五色大幡拾貳旒者至御門神止古例也、

『第十号』

8　古城主来由記

古城主由来記　正徳六年丙申六月田部政轉編輯

大隅國　正八幡宮之神官助清、其子長太夫清道、此人ヨリ吉田ノ元祖ニ立、二代吉田院司御供所撿校吉清、建久八年七月右大将家安堵御下文ヲ給、同九年社家ノ御下文ヲ玉ハル、桑幡中納言家ハ吉田ノ嫡(庶)流ナリ、

『第十一号』　9　大隅国図田帳

（本文書ハ一二号ト同文ニツキ省略ス）

10　大隅国図田帳注進状

（本文書ハ一三号ト同文ニツキ省略ス）

11　大隅国御家人交名

（本文書ハ一四号ト同文ニツキ省略ス）

『第十二号』　12　三国擾乱記

三國擾乱記

本田紀伊守、去ヌル大永七年、大守ノ命ヲ背キ清水ヲ擁シテ叛賊ヲ為ス、其張本ノ一也、カヽリケルニ八幡宮ノ社司神官等神殿ヲ構、御壇ト名ツケ、厳ク柵木ヲ備ヘ、本ヨリ人民神ノ敬ヲナシ守リ居ケルニ、本田カ黨并ニ新納近江守衆ヲ卒ヒ来テ震二悪逆一、然者社内ノ小舎ノ上ヨリ火モヘ出、魔風忽吹登リケレハ、一時ノ中ニ神社焦土ト成コソ墓ナケレ、

『第十三号』　13　集義外書

集義外書

大永七丁亥、八幡社司桑幡豊後守道延ヲ本田氏・新納氏被相攻、桑幡氏八幡山ヘ籠城シ合戦ス、依之鹿府御屋形ヘ三角道家ヲ以奏聞ス、則樺山氏ヲ為大将數千人引卒シ、八幡山ヲ救ヒ三社ヲ防給フ、十月廿八日正宮ヲ焼失ス、雖然稠敷依防戦、両将悉引退ク、大永年中依炎上、正宮御尊體於内裏御開眼、作者七條大佛師康運也、

『第十四号』（端裏書）　14　大隅正八幡宮尊体注文

「正八幡御尊躰御注文」

大隅國桑原郡宮内

正八幡宮御尊躰之事

一間　俗躰冠也、黒装束、持物尺也、御タケ一尺二寸

居タケ也、御疊三寸、
御本地立像聖觀音御タケ八寸、持物花、
女躰御タケ同、持物付也、
二間　釋尊立像八寸印　俗躰同前、
女躰持物同前、御タケ同也、
三間　阿弥陀同八寸印　俗躰裝束紫、御タケ同前、
女躰持物同付也、何モ金也、
御本地作立在様如此、口傳有之、
天文廿年九月吉日　大仏師法印
康運（花押）
桑幡豊後守殿
参
三角道家江渡申候、
（本文書ノ体裁ハ往時撮影ノ写真ニヨル）

『第十五号』口宣案　15　口宣案
上卿　中山大納言
永禄七年四月十二日　宣旨
従五位下息長道隆
宜任左馬頭
蔵人頭右大辨藤原淳光奉

『第十六号』口宣案　16　口宣案
上卿　源中納言
永禄八年三月二日　宣旨
従五位上息長道隆
宜叙従四位下
蔵人頭右大辨藤原淳光奉

『第十七号』口宣案　17　口宣案
上卿　日野新中納言
天明六年八月廿一日　宣旨
従五位下息長道澄
宜任豊後守

蔵人頭右大辨藤原俊親奉

18　口宣案

『第十八号』
口　宣案

上卿　日野新中納言

天明六年八月廿一日　▽宣旨△（二の27号ニヨリ補フ）

息長道澄

宜叙従五位下

蔵人頭右大辨藤原俊親奉

19　光格天皇宣旨

『第十九号』
従五位下息長連道澄

正二位行權中納言藤原朝臣資矩

宣、奉　勅、件人宜令任

豊後守者、

天明六年八月廿一日大外記兼掃部頭中原朝臣師資奉

20　桑幡道澄位記

『第廿号』
息長連道澄

右可従五位下

中務修其祝嘏、致敬明神、言念精誠、抑可褒奬（仰カ）（授）、宜授榮爵式光祠壇、可依前件、主者施行、

御璽　天明六年八月二十日

二品行中務卿織仁親王　宣

正四位下行中務大輔臣藤原朝臣敬長　奉

従四位上行中務少輔臣藤原朝臣國成　行

正二位行權大納言臣　家孝

正二位行權大納言臣　信通

正二位行權大納言兼左近衛大將臣　政熙

正二位行權大納言兼右近衛大將臣　治孝

正二位行權大納言臣　有榮

正二位行權大納言臣　實起

正二位行權大納言臣　實祖

正二位行權大納言臣　實種

正二位行權大納言臣

正二位行權大納言臣　愛徳
正二位行權中納言臣
正二位行權中納言臣　光祖
正二位行權中納言臣　隆建
正二位行權中納言臣　輝久
正二位行權中納言臣
正二位行權中納言臣　資矩
從二位行權中納言兼左近衛權中將臣
從二位行權中納言兼左衛門督臣　忠良
從二位行權中納言臣　經逸
從二位行權中納言臣　忠尹
正三位行權中納言臣　篤長等言
制書如右、請奉
制、附外施行、謹言、
天明六年八月二十日
制可　御璽
月日辰時、從四位上行大外記兼掃部頭中原朝臣師資
左　中　辨　昶　定
關　白從一位朝臣
太政大臣闕
從一位行左大臣朝臣
從一位行右大臣朝臣
從一位行内大臣朝臣
式部卿闕
正三位行式部大輔益良
參議從三位行左大辨兼勘解由長官賴潔
告從五位下息長連道澄、奉
制書如右、符到奉行、
式部少輔從五位下兼行山城介則敏　大録
御璽　少録
少録
天明六年八月二十日

『第廿一号』
21　西遊記
西遊記　寛政年中橘藤一著

大隅國宮内正八幡ハ大社ニシテ宮殿イト美々敷霊驗モイ

チジルシクテ尊キ宮ナリ、社家四氏アリ、桑幡・留守・最勝寺・澤トイフ、桑幡氏ナドハ今迄七十餘代相續シテ由緒殊ニ正シク、昔ハ惣頭ナリシガ、今ニテハ留守氏惣頭ナリ、スベテイヅレモナミナラヌ家柄ナレハ、國主ヨリノモテナシモ薄カラス、又其家居ナドモアシカラス、イニシヘ俊寛・康頼・成經ノ三人硫黄カ島ヘ配流ノ頃云〻其頃ヨリ今ニ代〻子孫相續シテ、殊ニ今ニテハ留守氏社中ノ惣頭トナリ繁栄ナリ、ゲニ邊鄙ニハカヘツテ古キ家モ有ケリ、

（中表紙）

「　正八幡宮年中祭祀

桑幡政所　」

『第廿二号』

22　正八幡宮年中祭祀

正八幡宮祭式惣社中出席勤行規式

一御祭一七日前、御神酒造入之事、

一御祭三日前、惣社司別火精進之事、

一御祭前晩六時、於御釜屋井戸之祓、祝子太夫・殿守両人勤之事、

一同晩、（於カ）御御釜屋井戸祓相濟次第、御神酒并花米隼風宮江殿守與利相備、祝子太夫獻供、祝詞相勤事、

一御祭當日申ノ下刻、惣社中出頭之事、

一同刻、衆會太鼓鳴良須事、

一惣別當神事奉行此屋着之事、

一御祓幣下奉行與里惣別當神事奉行江捧之、奉幣式有之、直ニ下奉行江返幣、夫與里御代官職・御供所別當并權政所少別當江捧之同断、奉幣式終、一社九人、次權太夫下奉行辨官職、惣大工・惣鍛治・銅太夫・黄衣座四人、神樂役五人、右幣式作法有之候事、

一同刻、草花房華上ル、獅子殿ニ備、彌勒院役僧・衆徒殿上方末坐與里二人勤之、

一御佛餉上ル、較ク有テ役僧與里獻供、

右終、草華拜殿相下、前以惣別當神事奉行并別當寺彌勒院・同寺役僧・御代官職・御供所別當・權政所小別

當、引續一社九人、衆徒十五坊、次祝子大夫初其外惣社中銘々、法衣官服等高下着服、當日晩酉之上刻、神事奉行四足上段西方へ着座、別當寺弥勒院東之方へ着座、御供所別當・權政所少別當西之廳左右坐頭着座法躰頭澤俗頭最勝寺、引續一社九人、僧俗左右着座、夫與里祝子太夫、權太夫下奉行辨官職二人、惣大工・惣鍛治・銅太夫・黄衣座四人、神樂役五人、引續末坐ニ檢校何人尓弓毛西之廳江着座、衆徒講師・殿上、一老貳人東之廳左右座頭止志弓、講師・殿上左右須(ママ)番着座、引續三昧衆徒貳人・小寺師壹人・鐘樓役貳人、引續末座獅子舞四人着座、夫與里正殿守六人、一老頭止志弓拜殿末之間西之方江着座、同權殿守、一老頭止志弓同所末之間東之方江着坐、東廻廊次樂所座笛太鼓鐘之役着座、夫與利檢非違使所頭修行太夫着座、引續官主座七人、高下順番着座、諸座都而座席相濟、神事奉行江届申出、直仁神拜之式有之、終テ備所役政所四足座ニ罷出、神事奉行方江小屋着之御届申出、惣別當神事奉行上段政所之座立、於勤行所小屋付之作法有之、直ニ彌勒院住持・同役僧上段政所之座立、寶殿へ参向、引續ニ衆徒東廻廊之座立、拜殿左右尓講師・殿上着坐、神事奉行此屋着之作法相濟、勤行所立、上段政所着座再拜、直ニ備所役正殿守江御佛餉之催促有之、直ニ正殿守備所江罷越、御佛餉捧上神前江相備、其時較有、笛大鼓鉦等之三樂ヲ奏ス、右御佛餉彌勒院役僧與利獻供、直ニ惣社中神拜拍手、夫與里惣別當神事奉行正殿守乎以惣社中江祭始之催促有之、直ニ神事奉行上段政所之座立、御寶殿江参向、引續惣社中各座立、御寶殿與利備所迄之間、高下之場席ヲ以テ銘々御手長ニ罷立、御供備へ上一間毎ニ較有、笛太鼓鉦等之音樂尓弓御本社并ニ末社迄都相備へ、別當寺與利御膳献供之作法有之、終テ銘々本坐へ着、直ニ神事奉行政所座立、拜殿着座、衆徒殿上方與里一人、正殿守一老與里一人、祝子太夫一人、直ニ拜殿江罷出、奉幣之式有之、右三人幣使役爾弓神事奉行御幣頭戴、其内ニ祝子太夫祈念之祝詞仕、奉幣之式終ニ神馬参ル、祝子太夫祈念之上、拍手打鳴、直ニ神馬社頭三遍廻、終惣社司中本座着、神酒并ニ御

供拜授、御神式相濟、直ニ下宮也、

御本社御供上次第

一惣別當神事奉行、寶殿江参向、簾ヲ巻揚神拜之式有之、直西之方江着座、次御供所別當、次小別當着座、

一別當寺彌勒院住持、寶殿東之方江着座、御供揚、終御献供、

一彌勒院役僧與里御供御寶前江相備、中殿與里下殿之間西之方一社七人、東之方衆徒講師方七人御手長ニ立、

一朱階之間一社八番與里貳人、次衆徒殿上方三番與利六人御手長ニ罷立、

一舞殿之下祝子太夫、次權祝子、次三昧衆徒貳人御手長ニ罷立、

一拜殿之儀者四足之方橋涯乎頭止志弖勤事、

一執行太夫衆徒殿上方一老二老両人、正殿守一人、神拜之作法有之、終テ直ニ御手長ニ罷立、拜殿之方正殿守一老壹人、引續神事取次壹人、辨官貳人、惣大工・惣鍛治・銅太夫御手長ニ立、

一執行太夫與利引續官主座高下八人、拜殿橋掛與里四足迄之間御手長ニ立、

一西廻廊橋掛與里黃衣座四人、内壹人鳳凰役、次檢校何人尓弖毛御手長尓罷立、

一備所橋掛上座止志弖備所役壹人、高杯役壹人御供捧出、宮代官職與利御打覆仕神樂役一番江相渡、先官次第順番乎以弖御手長尓罷立、

一彌勒院役僧與利御供御寶前江相備候節、正宮内侍職御打覆乎取留、

四所宮祭式之次第

一神事奉行御内陳江参向、御供所別當・小別當着座、一社・衆徒御本社之通御手長尓罷立、

一衆徒殿上方一老與利御供御前江相備、直尓御献供祝詞、御庭之間黃衣座末坐與利一人、神樂役末座與里一人、次官主座之内與里罷出、御手長尓罷立、

東廻廊之間執行太夫・神事取次役、次惣大工・惣鍛治・銅太夫、引續官主座役六人、四足迄之間御手尓罷立、（長脱カ）

西廻廊與里御備所迄之式御本社尓同、

武内宮御祭式次第

右四所宮御祭式ホ同、

隼風宮御祭式

右武内宮御祭式同、

大多羅乳女御祭式次第

右御本社御祭同刻小寺師役與利、

（中表紙）

「　由緒　」

23　桑幡家由緒書

桑幡家ハ桑幡宮ヨリ出ツ、桑幡宮ノ祭神ヲ火闌降命ト云フ、天津彦々火瓊々杵命ノ第一子、是ヲ海幸彦ト云フ、能ク海幸ヲ得タリ、第二子彦火々出見尊ヲ山幸彦ト云フ、能ク山ノ幸ヲ得タリ、然リ而シテ其風雨アル毎ニ其利ヲ得ル能ハス、弟ハ暴風猛雨アリト雖トモ常ニ其利ヲ得タリ、是ニ於テ兄其弟ニ謂テ曰ク、吾試ミニ幸ヲ易ヘテ、而シテ之ヲ用ヒント欲スト、弟許諾シ互ニ相易ヘタリ、而シテ兄ハ弟ノ幸弓幸矢ヲ持チ、山ニ入リテ獣ヲ覓ム、終ニ獲ル所ナシ、弟ハ兄ノ幸鈎ヲ持チ、海ニ出テ、而シテ魚ヲ釣ル、一魚ヲ獲サルノミナラズ、其釣鈎ヲ失ヘリ、斯クテ兄弟共ニ獲ル所ナクシテ空ク歸レリ、是ニ於テ兄悔ヒテ、而シテ弟ノ弓箭ヲ返シ、己レノ釣鈎ヲ返サンコトヲ乞フ、弟已ニ之ヲ海中ニ失ヘルヲ以テ新鈎（ニヒバリ）ヲ作リ償還ス、兄肯テ受ケス、其故鈎ヲ返サンコトヲ求ム、弟之ヲ憂ヘ、其佩劔ヲ解キ、数千ノ釣鈎ヲ鍛作シ、一箕ニ盛リテ償還ス、兄復タ受ケス、怒テ曰ク、吾カ故鈎ニアラズハ多ト雖トモ取ラジト、督責益々急ナリ、弟深ク之ヲ憂ヘ、計ノ出ン所ヲ知ラス、曩ニ釣鈎ヲ失ヒシ處ニ至リ、獨リ海畔ニ行吟ス、偶々川鴈ノ羂ニ嬰リ困厄スルヲ見テ、心ニ之ヲ憐ミ直ニ解放ス、須臾アリテ鹽土老翁ニ遇フ、老翁問フテ曰ク、何カ故ニ愁吟シテ斯ニ至ルヤ、尊答ルニ事情ノ本末ヲ以テス、老翁曰ク、復タ憂ル勿レ、吾當サニ尊ノ為メニ之ヲ計ルベシト、乃チ目無籠ヲ作リ、尊ヲ籠中ニ内テ之ヲ海ニ沈ム、已ニシテ味小汀ニ至ル、是ニ於テ籠ヲ出テ、行歩ス、忽チ海神ノ宮ニ至ル、其宮タ

ルヤ、雉堞整頓、臺宇玲瓏、門前ニ一井アリ、井傍ニ一ノ湯津杜樹アリ、枝葉扶疎、時ニ尊其樹下ニ彷徨ス、良ゝ久シテ一ノ神女アリ、闥ヲ排ヒテ而シテ出テ、玉鋺ヲ手ニシ来リテ将サニ水ヲ汲マントシ、因テ尊ヲ見テ、驚キ還リ入リテ其父ニ告テ曰ク、門前一客アリ、樹下ニ在リ、風姿俊邁、是レ尋常ノ客ニアラスト、是ニ於テ海神寶坐ヲ設ケテ尊ヲ奉迎シ、坐定テ其来意ヲ問フ、尊答フルニ事ノ委曲ヲ以テス、海神乃チ大小ノ魚族ヲ集メ、之ニ逼リ問フテ曰ク、鈎ヲ取ルノ魚アリヤト、皆曰ク識ラサルナリ、唯タ赤女（赤女鯛魚名也）比コロ口疾アリテ而シテ来ラス、喉ニ於テ鮫アリ、而シテ物ヲ食ヒ得スト、固ク之ヲ召シ、其喉ヲ探リシカバ、果シテ失鈎ヲ得タリ、海神曰ク、汝赤女自今以往餡ヲ呑ム勿レ、天孫ノ御饌ニ預ル勿レト、即チ赤女（一書ニ口女ト云フ）ヲ以テ御饌ニ進メサルノ例アルハ、此ニ基クト云フ、海神厚ク尊ヲ饗應シ、其女豊玉姫命ヲ娶ハス、尊仍テ海宮ニ留リ住ス、纏綿篤愛已ニ三年ヲ經タリ、彼處安樂ノ處ト雖トモ、然レトモ一夜憶郷ノ情ニ堪ヘズシテ一大歎聲ヲ發ス、豊玉姫命其歎聲ヲ聞キ父ニ告テ曰ク、三年ノ間曾テ歎息ノ事ナシ、今夜悽然一大歎聲ヲ發シ玉ヒタルハ何ゾヤ、其父尊ニ謁シ問テ曰ク、今旦我女ノ言ヲ聞ケハ、則チ三年ノ間曾テ歎聲ヲ發シ玉ヒタルコトナシ、然ルニ昨夜一大歎聲ヲ發シ玉ヘリト、蓋シ郷ニ還ラント欲シ玉フニアラスヤ、尊曰ク、然リ、是ニ於テ海神乃チ得ル所ノ釣鈎ヲ献シテ曰ク、此ノ鈎ヲ以テ兄ニ與ヘ玉フ時、陰カニ此ノ鈎ヲ呼ヒ貧鈎ト云テ、而シテ後之ヲ與ヘ玉ヘ、之ヲ所持スルモノ必ス貧苦ニ陥ラン、復タ潮満瓊・潮涸瓊ヲ献シ、且ツ瓊ヲ用フルノ法ヲ教ヘタリ、尊已ニ二種ノ瓊ト釣鈎トヲ受ケテ歸リ、備サニ海神ノ教ノ如クシ、先ツ其釣鈎ヲ兄ニ與フ、爾後其兄日ニ貧苦ニ陥リ、大ニ憤怒ノ心ヲ發シ、将ニ来リ攻ントス、尊時ニ潮満瓊ヲ出シ玉ヘバ、則チ潮大ニ溢レテ、而シテ其兄殆ント沒溺セントシ、大ニ困迫シテ救ヒヲ哀請ス、因テ潮涸瓊ヲ出シ玉ヘハ、則チ潮自ラ涸テ、而シテ其兄無事、是ヲ以テ弟ノ神徳アルヲ知リ、自ラ辜ニ伏シテ曰ク、吾レ自今以往、吾生児之八十連屬汝ノ御垣ノ邊ヲ離レズ、昼夜ノ守護人ト為リテ奉仕セント（『即

チ別紙第一号日本書記第二号古史成文ニ據ル』)、是ヨリ正宮ノ御門川上ニ、火闌降命・隼人命・大隅命ヲ崇祀シ桑幡ノ社ト云フ、子々孫々是ニ居住シ、正宮ノ神主ト為リテ正宮ニ奉仕ス(『即チ別紙第三號・第四号・第五号舊記ニ據ル』)、二十三代岐見布流ニ至リ、石體宮初現ノ旨ヲ欽明天皇ノ朝ニ奏シ奉リ、勅命ニ依リテ鹿兒島神社ニ應神天皇ヲ配祭アラセ玉フ、是ヨリ正八幡宮ノ稱アリ、此時岐見布流ニ息長姓ヲ賜フ(『即チ第六号・第七号ノ旧記ニ據ル』)、岐見布流ヨリ六代公清ニ至リ、和銅元年正八幡宮御造立アリ、公平ニ至リ正五位上ニ叙シ、公足従四位下ニ叙シ、公安正四位下ニ叙シ、公秀・公光・公義・公通・通昌ヲ經テ信昌・信重ニ至リ並ニ従五位下ニ叙ス、重家従四位下ニ叙ス、重頼従五位上ニ叙ス、頼春ヲ經テ頼元・頼康・頼吉ニ至リ並ニ従四位下ニ叙ス、頼弦従五位上ニ叙ス、助頼ヲ經テ助良ニ至リ従五位上ニ叙ス、火闌降命ヨリ是ニ至リテ四十七代助良ノ元服式ニ、寶刀天國ヲ以テ髪ヲ切ル、元服式ニ寶刀天國ヲ用ユルハ此時ニ始マル、助良ノ子助清従五位下ニ叙ス、治承四年六月卒ス、同十一月上棺式ヲ行ヒ、長源庵ニ葬(『即チ第八号三國擾乱記、第九号古書及ヒ系圖ニ據ル』)、清道正八幡宮神事奉行ト為ル、神主ヲ神事奉行ト唱ルハ此ニ始マル、建久九年右大将源頼朝安堵ノ御下文ヲ賜フ(『即チ第十号古城主由来記、第十一号古書及ヒ系圖ニ據ル』)、清道ノ子左馬頭助道父ノ職ヲ継キ、其子左馬頭栄道ニ傳フ、道継・道秀・道久(道脱カ)世ヲ經テ道昌ニ至リ従五位下ニ叙ス、道昌子ナシ、叔父道之嫡孫道恒ヲ養テ子ト為シ宗ヲ継カシム、道泰ヲ經テ道重ニ至リ従四位下ニ叙ス、道元・道穴ヲ經テ道延ニ至ル、大永七年十月廿八日、大隅國清水ノ城主本田紀伊守董親、新納近江守忠武(ママ)等ト謀議シ、正八幡宮ノ領地ヲ豪奪セント欲シ、共ニ兵ヲ率ヒ来リテ道延ヲ攻ム、道延之ヲ道之社ニ防キ、八幡山ニ陣シテ正宮ヲ護ス、合戦數度ニ及ヒ、正宮ノ危キヲ慮リ、三角道家ヲシテ旨ヲ鹿府ニ告ケ援ヲ求メシム、時ノ太守島津貴久之ヲ聞キ、伊集院忠明(朗カ)・樺山善久ヲシテ兵數千ヲ率ヒ来リ援ハシム、十一月廿八日敵兵敗走ス、此日正宮ノ小舎ニ火ヲ失ス、遽ニ北風烈シクシテ災焔天ニ漲ル、正宮亦遂ニ延燒ノ災ニ罹リ、神輿神寶等概燒失ス、是ノ

後僧日秀等ト國主ニ訴ヘ、國中ニ勸化ヲ為シ宮殿ヲ榮(營)築ス、天文廿年九月吉日、正宮御尊體於内裏御開眼、作者七條大佛師康運ナリ（『即チ第十二号三國擾乱記、第十三号集義外書、第十四号七條大佛師法印康運ヨリ道延ニ宛タル古書ニ據ル』）、道延ノ子左馬頭道隆、永禄八年三月二日従四位下ニ叙セラル（『即チ第十五号・第十六号ノ通リ口宣案アリ』）、其子ヲ左馬頭道武ト云フ、道好・道渡・道賢・道盈・道頭ヲ經テ道澄ニ至ル、天明六年八月廿一日従五位下ニ叙セラル時ノ御綸旨今尚家ニ傳ハレリ（『即チ第十七号・第十八号・第十九号・第二十号ニ據ル』）、道歳ヲ經テ公重ニ至リ明治元年ト為ル、上古ヨリ是ニ至ルマテ累代正宮ノ神主タルコト七十二代（『即チ第二十一号西遊記並ニ系圖ニ據ル』）、延々綿々未タ曾テ断絶シタルコトナシ、而シテ祭祀ノ如キモ第廿二号正八幡宮年中祭祀ノ式ニ従テ累代奉仕シ来リシナリ、公重ノ子公朝、明治五年十一月三日鹿兒島神社祢宜ト為リ、又權中講義ニ補セラル、公朝ノ子公幸即チ願人代ニ至リ、明治十六年二月廿三日鹿兒島神宮主典ト為ル、尓来今日ニ至ルマテ第廿三号履歴書ノ通ナリトス、

（中表紙）

「　御綸旨口宣案寫　」

『第十五号』　24　口宣案

（本文書ハ二の15号ト同文ニツキ省略ス）

『第十六号』　25　口宣案

（本文書ハ二の16号ト同文ニツキ省略ス）

『第十七号』　26　口宣案

（本文書ハ二の17号ト同文ニツキ省略ス）

『第十八号』　27　口宣案

（本文書ハ二の18号ト同文ニツキ省略ス）

『第二十号』　28　桑幡道澄位記

（本文書ハ二の20号ト同文ニツキ省略ス）

（中表紙）

「桑幡系圖寫」

29　桑幡系図

隼人命

若隅命

火闌降命

二十三代
岐見布流
石體現座八幡立

大隅命

社號桑幡神社

大隅桑原郡鹿兒山麓鹿

兒島鎮座鹿兒島神社末

社道之社西南壹宇

公清　二十八代　鹿兒島神社神主
和銅元年正八幡宮造立、

公平　神主　従五位上

公足　神主　従四位下

公安　神主　正四位下

公守

公秀　神主

公光　神主

公貫　元慶五年七月廿七日葬、
社号佐木森神社

公義　神主

公之

義通

通行

公通　神主

▽公周△（四号ニテ補フ）

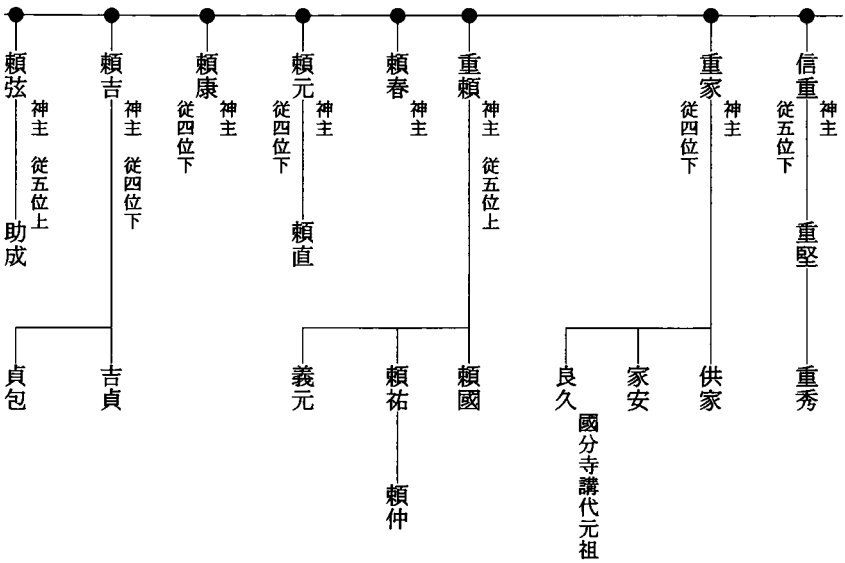
通昌　神主

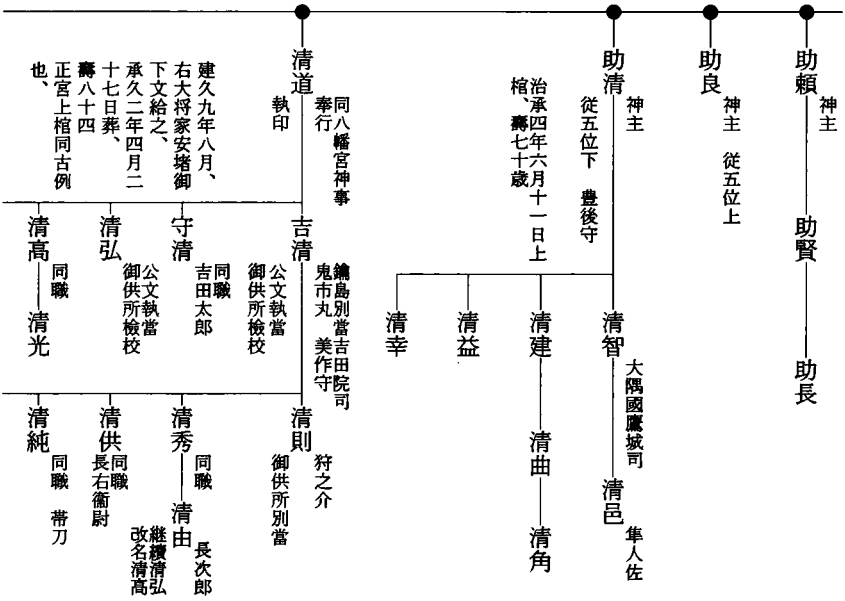
昌門

信昌　神主　従五位下

信武

信春


信重 神主 従五位下
重堅
重秀
重家 神主 従四位下
供家
家安
良久 國分寺講代元祖
重頼 神主 従五位上
頼國
頼祐
頼仲
頼春 神主
頼元 神主 従四位下
義元
頼直
頼康 神主 従四位下
頼吉 神主 従四位下
吉貞
頼弦 神主 従五位上
助成
貞包


助頼 神主
助賢
助長
助良 神主 従五位上
助清 神主 従五位下 豊後守
治承四年六月十一日上棺、壽七十歳
清智 大隅國鷹城司
清邑 隼人佐
清建
清曲
清角
清益
清幸
清道 同八幡宮神事奉行 執印
建久九年八月、右大将家安堵御下文給之、承久二年四月二十七日葬、壽八十四 正宮上棺同古例也、
吉清 鎌島別當吉田院司 鬼市丸 美作守
公文執當 御供所検校
守清 同職 吉田太郎
清則 狩之介 御供所別當
清秀 同職
清由 長次郎 継續清弘 改名清高
清供 同職 長右衛尉
清純 同職 帯刀
清弘 公文執當 御供所検校
清高 同職
清光

- 助道 同職 左馬頭
  - 道往 二兵衛尉
  - 道信 修理執當 二郎兵衛
    - 幸直 主膳正
      - 幸張
    - 栄直 弥勒寺別當 中納
      - 義直
  - 惟清 若狭守
    - 清周 尾張守
  - 孝清 参河守
  - 泰清 尾張守
  - 兼清 次郎四郎
  - 清正 若狭守
  - 清元 伊豆守
  - 清氏 公文検校 伊豆守
  - 清持 同職 次郎太夫
    - 清秋 同職 彦次郎
    - 清家 同職 新兵衛
    - 頼清 御供所検校
      - 清成 三郎二郎
      - 清名 将監
      - 公清
      - 清善 山城守
      - 清莫

- 栄道 同職 左馬頭
  - 道増 隼人佐
  - 道茂 長二郎
  - 道資 隼人佐
  - 道之 修理執當 新兵衛尉
  - 道宅 神右衛門尉
  - 道周 長十郎
  - 道永 鬼二郎
    - 幸道 主膳正
    - 道森 三右衛門尉
    - 道形 長左衛門尉
    - 道直 御供所検校
    - 道伴 永壽 継續國分寺講代絶
    - 永久
    - 賢永
  - 道光 同職 伴兵衛
  - 道守 鑰島別當
  - 道行 伊賀守
    - 道明 鑰島宮別當
      - 道頼 号三角、七郎傳右衛尉

- 道世　同職　修理亮
  - 道親　公文別當　鬼鶴丸
- 道久　同職　常陸守
  - 道宗　式部太夫
  - 道之　權政所　右兵衛門尉
- 道秀　同職　豊後守
- 道継　同職　鬼市丸
  - 道種　彌勒寺別當　伴左衛門尉
    - 道信　同職　伴左衛門尉
    - 道吉　同職　道綱
      - 道義　九郎右衛尉
      - 道序　式部
      - 道方　市右衛尉
      - 道喬　市兵衛
    - 道為　同職　清左衛門尉
    - 道祐　同職　五郎左衛門尉
    - 道唯　同職　新左衛門尉
    - 道實　同職　清左衛門尉
  - 道但　彌勒寺別當

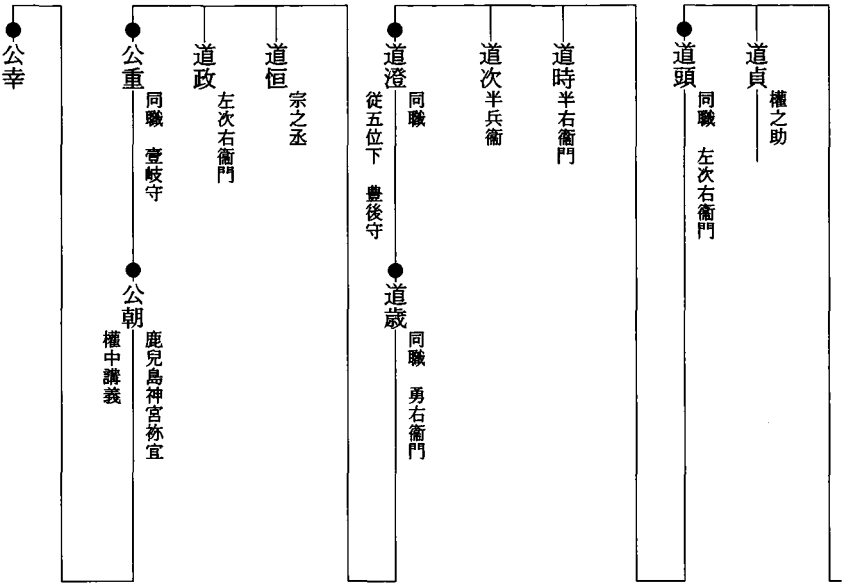
- 道昌　同職　鬼市丸　従五位下
  - 道継　掃部介
- 道恒　同職　常陸守
- 道泰　同職　豊後守
  - 道松　彌勒寺別當　鬼鶴丸　源左衛門尉
  - 道政　同職　弥左衛門　道松有三女無嗣子、寛永十七年四月、留守治部少輔二男為養子、改道政、
- 道重　同職　筑前守　従四位下　豊後守
- 道元　同職　豊後守
- 道穴　同職
- 道延　同職　豊後守

大永七年十月二十八日、本田・新納両姓卒兵来犯、仍而防之於道之社、楯籠八幡山護正宮、合戦及數度、慮正宮危、依之使三角道家告旨鹿府求援、十一月二十八日両姓敗退、當日正宮後小舎失火、為

北風終　正宮御炎焼也、
正八幡宮依炎焼、天文廿年　御尊體御下降、於内裏御開眼也、　御尊體八幡崎御着船之時、蒲生八幡宮之御輿借リ、鑰島宮ニテ奉移着御有テ御憑宮也、

- 道載
  - 道綱 長兵衛尉
- 道直
- 道春 鑰島別當八郎
- 神九郎
- 道門
- ● 道隆 同職 従四位下　左馬頭　豊後守
- 道篤 鬼千代

- ● 道武 同職　左馬頭
  天正十九年細川下向、至文禄二年寺社勘落、依之代々世々讓来知行三百五十町沽却、
- 道純 城之介
- 道跡 鬼三郎
- 道良 長吉
  - 道豊 伴五郎
- ● 道好 同職　左馬頭
- 直盛 正右衛門尉 隅州春山越中守直武ニ相續ス、
- ● 道渡 同職　左馬介
  - ● 道賢 同職 半右衛門
- 道堯 鑰島宮別當 藤左衛門尉
- ● 道盈 同職　休右衛門



（本系図ノ罫線並ニ人名上ノ「●」印ハ朱書ナリ）

（中表紙）

「『第廿三号』

履歴書」

30 桑幡公幸履歴書

（本履歴書ハ省略ス）